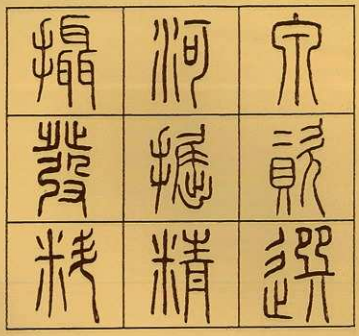


Ⅲ

公益財団法人　大阪府文化財センター

摂　河　泉

発掘資料精選

Ⅲ

公益財団法人
大阪府文化財センター

Selections of Archaeological Relics in Osaka Ⅲ
－ In the Possession of Osaka Center for Cultural Heritage －
By Osaka Center for Cultural Heritage ©
Made and published in Japan, 2012

ごあいさつ

大阪府文化財センターは、この11月で設立40周年を迎えました。この節目の年に奇しくも前任の水野正好理事長の後を受けて重責を担うことになりました。

この40年の歴史を振り返ってみますと、当センターが日本の高度経済成長期以来、埋蔵文化財保護行政の最前線に立って、発掘調査研究を推進してきたことがよくわかります。先輩諸兄のこれまでの努力に対し、心からの敬意を表さずにいられません。

しかしその道が平坦ではなかったことも事実であります。組織の変遷だけを見ても、財団法人 大阪文化財センターからはじまり、幾度かの統合を繰り返して、(財)大阪府文化財調査研究センター、(財)大阪府文化財センターと発展し、2011年4月には、公益財団法人大阪府文化財センターとして、さらに新たな段階に踏み出しております。これらは時々の時代要請に柔軟に応えてきたことを示しておりますが、その中で着実に調査の実績を積み重ねてきたこと、このことが重要であると思います。

これまで調査した資料は膨大でかつ重要なものを多く含みます。その成果は、毎年の報告書に詳述されているものの、多くの方の目に触れる機会も少ないことから、これの精選した出土遺物を紹介する『摂河泉発掘資料精選』が出版されました。すでにⅠとⅡの2冊が出されておりますが、今回は、10年ぶりの出版になります。この間、第二京阪道路建設に伴う調査をはじめ、数多くの重要な調査があり、出土資料も旧石器から近現代に至る各時代におよび、衣食住はもちろん、生産、宗教・祭祀など人間活動のあらゆる分野にかかわるものとなっております。

収載した資料をご覧いただければ、われわれが日常の生活を送るこの大阪の地下に、いかに豊かな歴史が埋もれているか、いかに多くの先人たちの足跡が残されているか、ご理解いただけるのではないでしょうか。

わたくしたちセンターの主な仕事は、新しい歴史の発展の中で、おそらくその大半が失われていくであろうこうした先人たちの足跡と歴史をしっかりと記録し、皆様の記憶に残し、孫子の代まで伝えることであります。そうしたことを考える基礎資料として、この精選が、専門家のみならず多くの方々にご利用いただけるならば、編集者・執筆者はじめセンター一同にとってこれに過ぎる喜びはありません。

最後に、今後とも、地味ではありますが極めて重要な埋蔵文化財調査の仕事へのご理解とご協力、またご指導ご鞭撻を切にお願いしてごあいさつとします。

公益財団法人　大阪府文化財センター
理事長　田邊征夫

Selections of Archaeological Relics in Osaka Ⅲ

TABLE of CONTENTS

Foreword / English contents / Contents, Explanatory notes / Site distribution map

Part Ⅰ Investigations summary

After the lapse of ten years, and henceforth ····· 1

Investigation in *Settsu* (north of Osaka) region ····· 3

Investigation in *Kawachi* (middle of Osaka) region ····· 5

Investigation in *Izumi* (south of Osaka) region ····· 13

Part Ⅱ Selections of archaeological relics

Paleolithic ····· 16

Jomon period ····· 19

Yayoi period ····· 35

Kofun period ····· 84

Ancient times ····· 137

Medieval period ····· 178

Early modern times ····· 207

Modern times ····· 225

Bibliography ····· 233

Index for each site ····· 241

INDEX ····· 245

Postscript

目　次

ごあいさつ …… 理事長 田邊征夫
英文目次
目次・例言
主要遺跡分布図

Ⅰ部　調査概要

センターこの10年、そして今から …… 1
摂津（大阪北部）地域の調査 …… 3
河内（大阪中部）地域の調査 …… 5
和泉（大阪南部）地域の調査 …… 13

Ⅱ部　発掘資料精選

旧石器時代 …… 16
縄文時代 …… 19
弥生時代 …… 35
古墳時代 …… 84
古代 …… 137
中世 …… 178
近世 …… 207
近現代 …… 225

文献目録 …… 233
遺跡索引 …… 241
INDEX（英文目録）…… 245
あとがき

例　言

・本書刊行は（公財）大阪府文化財センターの設立40周年記念事業のひとつとして行われたもので、『摂河泉発掘資料精選』（1995年刊）、『摂河泉発掘資料精選Ⅱ』（2002年刊）の続編にあたる。なお、書名中の「摂河泉（せっかせん）」は、旧国区分による摂津（東部）：大阪北部、河内：大阪中部、和泉：大阪南部、に因む。
・本書は、（公財）大阪府文化財センターおよび前身である（財）大阪府文化財センターがこの約10年間に行った発掘調査の概要をⅠ部に、それら調査の代表的な出土品等の紹介をⅡ部に収めた。
・執筆者については、それぞれの文末に表記したほか、図版準備・編集者とともに巻末に示した。ただし、各原稿に関しては、用語・表現・内容統一など一定の調整を施した部分を含む。

主要遺跡分布図

1. 小畑遺跡
2. 北々呂貝塚群
3. 知恵谷遺跡
4. 栗生宮殿遺跡
5. 栗生開谷遺跡
6. 松俣東鉱山窯跡
　栗栖山南鉱窯跡
7. 恵大寺遺跡
8. 荒田遺跡
9. 宿久庄西遺跡
10. 紫金山古墳
11. 給料寺遺跡
12. 鏡町遺跡
13. 東奈良遺跡
14. 玉都遺跡
15. 新池遺跡窯跡群
16. 今城塚古墳
17. 古曽部・芝谷遺跡
18. 安満遺跡
19. 成合遺跡
20. 金龍寺旧境内跡
21. 萩之庄南遺跡
22. 東田園跡遺跡
23. 住吉宮家の前遺跡
24. 宮池西遺跡
25. 宮池遺跡
26. 宮池東遺跡
27. 鵜頭遺跡
28. 吹田陸軍墓遺跡
29. 明和池遺跡
30. 狩大院町庁舎跡
31. 大阪城跡
32. 難波宮跡
33. 森の宮遺跡
34. 森小路遺跡
35. 四天王寺跡
36. 慈願本町遺跡
37. 谷津寺跡
38. 田口山遺跡
39. 藤阪大龟谷遺跡
　長尾窯跡群
40. 杜中責谷遺跡
41. 穂高遺跡
42. 杼遺跡
43. 津田城跡
44. 津田遺跡
45. 東倉山遺跡
46. 倉谷遺跡
47. 有池遺跡
48. 神宮寺遺跡
49. 上松遺遺跡
50. 松葉病遺跡
51. 上の山遺跡
52. 泉子作遺跡
53. 星田遺跡
54. 平遺遺跡
55. 奥山遺跡・寝屋南遺跡
　・寝屋東遺跡
56. 太東遺跡・太東古墳群
57. 宮宮遺跡・大宮遺跡
58. 讃良川遺跡
59. 小路遺跡
60. 高宮八丁遺跡
61. 蔀屋北遺跡
62. 讃良郡条里遺跡
63. 星屋遺跡
64. 氣本遺跡
65. 中垣内遺跡
66. 日下貝塚
67. 西ノ辻遺跡
68. 鬼虎川遺跡
69. 水走遺跡
70. 鬼子遺跡
71. 北島遺遺跡
72. 馬場川遺跡
73. 池島・福万寺遺跡
74. 花園窯遺跡
75. 若江遺跡
76. 新家遺跡
77. 西岩田遺跡
78. 瓜生堂遺跡
79. 巨摩遺跡
80. 若江北遺跡
81. 山賀遺跡
82. 新上小路遺跡
83. 弓削ノ庄遺跡
84. 亀井遺跡
85. 友井東遺跡
86. 小阪合遺跡
87. 美園遺跡
88. 佐堂遺跡
89. 久宝寺遺跡
90. 亀井北遺跡
91. 植松遺跡
92. 亀井遺跡
93. 城山遺跡
94. 長原遺跡
95. 八尾南遺跡
96. 田井中遺跡
97. 志紀遺跡
98. 恩智遺跡
99. 高安城跡
100. 船橋遺跡
101. 仏法山古墳
102. 西大井遺跡
103. 林遺跡
104. 国府遺跡
105. 茶山遺跡
106. 江北ヲ山遺跡
107. 古市古墳群
108. 池内遺跡
109. 三宅西遺跡
110. 大和川今池遺跡
111. 若山遺跡
112. 大堀遺跡
113. 観音寺遺跡
114. 丹上遺跡
115. 都戸遺跡
116. 河原城遺跡
117. 兄塚遺跡
118. 四波東遺跡
119. 狗ヶ谷遺跡・蔵塚古墳
120. 落合遺跡・東国田遺跡
121. 狭竹塚寺
122. 甲田南遺跡
123. 東山遺跡
124. 田尻谷古墳群
125. 松谷石切場跡
126. 横木石切場跡
127. 覚弘寺遺跡
128. 高向遺跡
129. 高屋寺遺跡
130. 大井遺跡
131. 塔頭遺都市遺跡
132. 百舌鳥古墳群
133. 湊南岸遺跡
134. 浜寺元町遺跡
135. 四ッ池遺跡
136. 下田遺跡
137. 浅井清水町遺跡
138. 金田口貝塚遺跡
139. 福田遺跡
140. 平井遺跡
141. 小阪遺跡
142. 大平寺遺跡
143. 伏尾遺跡
144. 万崎池遺跡
145. 菱木下遺跡
146. 西浦橋遺跡
147. 長谷観音墓
148. 大鳥寺遺跡
149. 野々井遺跡
150. 御昌古墳群
151. 伽藍橋遺跡
152. 遠上皆伝遺跡
153. 信太山遺跡
154. 観音寺山遺跡
155. 池田寺遺跡
156. 仏並遺跡
157. 小田遺跡
158. 山ノ内遺跡
159. 山直北遺跡
160. 三田遺跡
161. 上ツノ遺跡
162. 水込遺跡
163. 山直中遺跡
164. 土井の本遺跡
165. 中之庄遺跡
166. 西大路遺跡
167. 下池田遺跡
168. 栄ノ池遺跡
169. 冥土塚遺跡
170. 鴨浜遺跡
171. 加茂・神前・畠中遺跡
172. 鳴本遺跡
173. 石才南遺跡
174. 貝塚市東山丘陵遺跡群
175. 大垣遺跡
176. 南遺跡・上町東遺跡
177. 沓宮遺跡・大西遺跡
178. 上町遺跡
179. 松原遺跡
180. 末広遺跡
181. 諸目遺跡
182. 長滝遺跡
183. 目根野遺跡
184. 中島遺跡
185. 鳥取遺跡
186. 南瀬遺跡
187. 男里遺跡
188. 亀川遺跡
189. 向出遺跡
190. 金岡寺遺跡
191. 井山城跡
192. ミノバル切場跡
193. 新作寺遺跡
194. 田山遺跡
195. 淡輪遺跡
196. 西信遺跡
197. 小島北荒遺跡
198. 西の庄荒遺跡
（赤丸：本書掲載遺跡）

0　20km

Ⅰ部　調査概要

センターこの10年、そして今から

センター生誕

当財団は1972年11月に大阪府教育委員会の認可を受け、財団法人大阪文化財センターとしてその産声をあげた。爾来、大阪府の埋蔵文化財行政の一翼を担い、埋蔵文化財の発掘調査のみならず様々な事業を展開し、現在までに40年の道のりを歩んできた。その間、1995年には、関西国際空港建設事業に関連して設立された財団法人大阪府埋蔵文化財協会と統合し、財団法人大阪府文化財調査研究センターに名称変更、さらには2002年4月に財団法人大阪府博物館協会と統合し、新たに財団法人大阪府文化財センターとなった。

そして、2011年4月、当財団は公益認定を受け、公益財団法人大阪府文化財センターとして新たなスタートを切っている。

センターこの10年

当財団の10年を振り返るにあたっては、現地調査の拠点となる調査事務所の変遷をたどるとその軌跡がみえてくる。

財団法人大阪府博物館協会と統合し、新生大阪府文化財センターとなった2002年度の組織は、総務部・調査部・普及部のほかに、弥生文化博物館部・近つ飛鳥博物館部・日本民家集落博物館部という構成をとっている。主体となる埋蔵文化財の現地調査は大阪府下の北・中・南の3箇所に設置した調査事務所が担当し、各事務所の担当地域は、北部調査事務所は淀川より北側の地域、中部調査事務所は淀川と大和川の間の地域、南部調査事務所は大和川より南側の地域としていた。

この財団法人大阪府博物館協会との統合は当財団の一つの転機であり、大阪府下全域を対象とし広範にわたって発掘調査を実施するとともに、府内の3博物館の業務管理も行うこととなった。

2003年3月31日、北部調査事務所は管内での調査事業の減少に伴い閉鎖するが、これに代わって、同年4月1日、第二京阪道路建設に伴う調査事業が本格化し、これを円滑に推進するため、寝屋川市に京阪支所を、交野市に京阪支所交野分室を新たに開設した。2004年4月1日には京阪支所を京阪調査事務所とし、これと同時に中部調査事務所池島分室を池島支所としている。

その後、2006年4月1日には、京阪調査事務所交野分室を京阪調査事務所とし、京阪調査事務所整理棟を寝屋川分室とする。さらに同日、京阪調査事務所門真分室を開設する。両分室は、第二京阪道路建設に伴う発掘調査のピークをむかえ、他団体からの職員派遣の受入などに対応したものであったが、事業の収束に伴い、門真分室は2008年7月31日、寝屋川分室は2009年3月31日に閉鎖した。

また、この間には組織の改正も行い、2008年4月1日には、総務部を総務企画部に改め、普及部を廃止、調査部に資料活用課を置いた。2009年4月1日からは調査事務所および係制を廃止し、総務企画課に総務グループを置き、調整課を廃止し調査課を置き、調整グループおよび調査グループを設けた。さらに、2012年4月1日からは、グループ制を廃止し、総務企画部の下に総務企画課、調査部の下に調査課および調整課を置くといった改正を行うなど、職員数に合わせた組織体制の構築を実施している。

発掘調査では、当財団においては1989年から長きにわたって調査を実施してきた池島・福万寺遺跡が、治水緑地建設自体が凍結されたことにより事業が休止したが、一方で新名神高速道路の建設に伴う調査が本格化している。

また、大規模開発に伴う沖積地調査の経験と実績をもとに、2009年度から財団法人鳥取県教育文化財団に職員を出向させ、発掘調査の最前線において技術支援を行っている。

府立博物館とともに

この10年間における、もう一つの大きな転機が2006年4月1日、大阪府立弥生文化博物館ならびに大阪府立近つ飛鳥博物館および近つ飛鳥風土記の丘の指定管理者として選定されたことである。

大阪府は府立の2博物館に指定管理者制度を導入し、2006年度からの5年間の指定管理者を一般公募とした。当財団ではこれまで大阪府における埋蔵文化財の発掘調査のみならず、普及啓発事業にも力を注いでいたこともあり、さらなる文化財活用の場として指定管理者に応募し、審査の結果、選定されることとなった。

これにより府立2博物館の学芸部門を含めて管理運営を行うこととなり、大阪府の博物館事業にも直接的にかかわりをもつという大きな変革を迎えた。

この第1期の指定管理期間中に大阪府知事が交代し、文化施設の見直しがなされるなかで、一時、弥生文化博物館に関しては廃止、近つ飛鳥博物館との統合案も出されたが、結果的には、積極的な館外活動や入館者増などにより、存続が決定している。

なお、近つ飛鳥博物館および近つ飛鳥風土記の丘に関しては、第1期の指定管理期間が終了し、2011年度からの5年間で再度、指定管理者が公募され、当財団ではより効率的な施設管理を実施するため近鉄ビルサービス株式会社とグループを構成し、第2期指定管理者として選定され、現在にいたっている。

一方の弥生文化博物館は存廃問題があり、2011年度は1年間のみの指定管理者として当財団が継続して管理運営にあたっていたが、存続が決まり、2012年から4年間の指定管理者が一般公募され、近つ飛鳥博物館と同様に近鉄ビルサービス株式会社とのグループで指定管理者に選定されている。

博物館における指定管理者制度は、その是非が問われる昨今ではあるが、少なくとも当財団が管理運営する府立2博物館に関しては、両館の設立目的に則って、館内での展示事業のみならず、出前授業などの館外事業も積極的に推進し、着実な管理運営を進めている。

そして今から

文化庁が毎年作成している緊急発掘調査費用の推移図をみると、1997年をピークに年をおうごとに下降している。

これは公共事業の減少と連動するものであり、開発に伴う記録保存目的の発掘調査、いわゆる緊急発掘を担うことが基本である当財団にあって、この状況は決して心穏やかなものではない。

当財団では大阪府の出資法人として40周年の節目の年に、2012年から2016年までの5年間の中期経営計画を策定した。

当財団が目指すメインビジョンを「文化財で心を豊かに―『温故知新』で文化力向上」とし、これまで当財団が地域に根ざして蓄積した様々な情報と最新の調査成果を公開・活用し、広く社会に還元することを表している。

また、これを実現するためのサブビジョンとして、「新たなステージへ―新たな成長への挑戦」、「文化財を身近に―歴史教育への寄与」を掲げた。

前者は公共事業が減少するなか、市町村事業への参画や新規の文化財公開活用事業などの開拓・展開などを通して、新たな事業構造を確立していくことを目指すべく掲げたものである。

一方、後者は明日を担う子ども達に歴史の大切さを伝えることを目指す内容を打ち出したものである。

この文章を執筆している間、各社新聞では大阪府と大阪市の統合と大阪都構想の話題が紙面を賑わせている。

大阪府の出資法人たる当財団も、埋蔵文化財の調査事業の統合や博物館管理運営の効率化などをめぐって俎上にのぼる府市統合本部会議の議論と無縁ではない。

指定管理者制度や大都市制度など、国政の大きな流れにあらがうことは難しくとも、当財団は40年の実績とさらなる挑戦を胸に、新たな10年を着実に刻んでいくものと確信している。

(江浦)

摂津（大阪北部）地域の調査

2003年度以降、摂津地域で行われた主な調査は、旧大阪府警察本部棟新築Ⅱ期工事に伴う大坂城跡、大阪国際空港周辺緑地整備事業に伴う勝部遺跡、吹田信号場駅基盤整備工事や北部大阪都市計画事業吹田操車場跡地土地区画整理事業に伴う吹田操車場遺跡、明和池遺跡、西の庄東遺跡、大阪府営住宅建て替えに伴う玉櫛遺跡、都市計画道路事業茨木箕面丘陵線に伴う宿久庄西遺跡、新名神建設に伴う止々呂美城跡、金龍寺旧境内跡、（仮称）阿波座駅前プロジェクトに伴う旧大阪府庁舎跡などである。

大坂城跡・難波宮跡

調査地点は、前期難波宮内裏倉庫群の北側、豊臣期大坂城三の丸の西端に位置し、また、戦前には陸軍関係の施設があった。Ⅱ期の調査では、難波宮跡関連の成果として、2箇所の谷から3000点を越える漆容器、絵馬、斎串、爭柱などが出土した。大量の漆容器は、7世紀中頃～後半の猿投窯産や湖西窯産の東海系須恵器を含み、「漆部司」との関連が注目される。また、一本柱塀と考えられる柱穴列や板材を用いた護岸施設など、後期難波宮の北辺を考えるうえで重要な遺構も検出されている。

豊臣期大坂城関連では、二の丸大手口を囲む堀障子が施された素掘りの堀が検出され、堀からは埋葬人骨や堀の埋め立てにかかわった武将に宛てた「菅平右衛門」木簡などが出土し、大坂冬の陣前後の豊臣・徳川両軍の緊迫した状況を窺うことができる。

吹田操車場遺跡・明和池遺跡

1998年の確認調査を最初とし、明和池遺跡を含む操車場跡地全域で、古墳時代～中世の遺構・遺物が検出された。

これまでの調査では、縄文時代の石鏃や晩期土器、弥生時代中期の土坑や水田畦畔などが検出されているが、具体的様相を明らかにするまでにはいたっていない。

古墳時代では、流路と谷のほか溝、土坑、井戸、掘立柱建物、竪穴建物や、山陰系土師器など多様な遺物が発見され、集落の様子も明らかになりつつある。同後期では、計画的な土地開発の一端が窺える等間隔に並行する溝や地形の起伏を無視して掘削された直線的な溝が検出されている。また、古墳時代後期～奈良時代の土坑群が複数箇所で確認されている。これらの土坑については、付近から七尾瓦窯や吉志部瓦窯で生産された瓦と同笵の瓦、焼成不良や焼け歪んだ須恵器が出土していることから、須恵器や瓦の粘土採掘坑と考え、当地域が須恵器や瓦生産にかかわる材料採取地と選別・集荷の拠点とする見解も示されている。

奈良・平安時代では、柵列、溝、掘立柱建物、畠地からなる集落と水田が検出されている。出土遺物も多様で、奈良三彩小壺、猿投窯産や篠窯産を含む緑釉陶器、灰釉陶器など、一般農村集落とは異なる遺物群の出土も多くみられる。

大坂城跡　Ⅱ期調査地全景

吹田操車場遺跡　古墳時代の直線的に掘削された溝

勝部遺跡

勝部遺跡は、猪名川流域における弥生時代の大規模集落として知られるが、弥生時代後期末～古墳時代初頭の北摂地域の基準資料ともなる良好な土器群や、古墳時代前期集落関連の遺構が検出され、大庭寺遺跡ＴＧ 232 型式に先行する初期須恵器もしくは陶質土器なども出土し、海外との交流拠点の一つであったことが示唆される。

また、12 世紀後半～ 13 世紀の掘立柱建物や井戸など集落関連遺構も検出されている。

玉櫛遺跡

中世の集落跡として知られる玉櫛遺跡では、13 世紀中頃～ 15 世紀前半の大規模な溝を伴う掘立柱建物からなる遺構や、象嵌文様をもつ高麗青磁や輸入陶磁器類、「薭民将来」札を含む多くの木製品や金属製鍋、短刀、石硯、石鍋など多様な遺物が出土しており、有力農民層の屋敷地の存在が指摘されている。

5 世紀後半～ 6 世紀後半では、ピット群や掘立柱建物が検出され、馬骨や木製鞍（前輪）が出土し、馬飼集団の存在が推定される。

宿久庄西遺跡

箕面市と茨木市の北部丘陵を対象とした「国際文化公園都市」の調査では、古代～中世の集落の様子が明らかにされた粟生間谷遺跡をはじめ多くの成果が得られているが、丘陵の南側、勝尾寺川の河岸段丘上に立地する宿久庄西遺跡の調査では、奈良～平安時代の掘立柱建物が検出され、円面硯や土馬、鉄滓や大形の羽口などの鍛冶関連遺物が出土しており、有力氏族の居住域であった可能性が示唆されている。

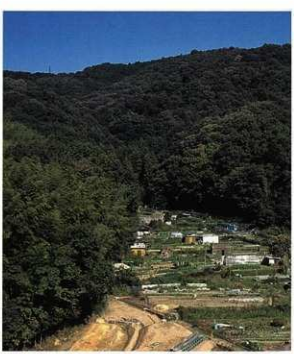
旧大阪府庁舎跡

大阪市西区江之子島の旧大阪府庁舎跡の調査では、明治 7 年に竣工し、大正 5 年に増改築された洋風建築の庁舎の基礎が良好な状態で検出された。多数の刻印煉瓦やタイル、柱頭飾りなどの建築部材が出土し、近代洋風建築の技術や様式、産業史を研究するうえで貴重な成果が得られている。

金龍寺旧境内跡

2010 年度に行われた成合・宮が谷地区の確認調査で新規に発見された金龍寺旧境内跡の調査では、8 ～ 9 世紀と 11 ～ 13 世紀の遺構・遺物が検出された。特に古代では、多くの土器群のほか、土馬、円面硯、石製の巡方、輸入陶磁器などが出土し、背後の山中に建立され古代から近世まで栄えた金龍寺が、中央権力と強い関係を有していたことが改めて明らかにされている。（金光）

旧大阪府庁舎跡　全景（奥から北翼・中央棟・南翼）



金龍寺旧境内跡　調査地から金龍寺跡中心部を望む

河内（大阪中部）地域の調査

〈北河内〉

北河内地域では、2件の大規模事業が実施された。近畿自動車道門真ジャンクションから京都府久御山町を結ぶ高速道路、第二京阪道路建設に伴う調査と、枚方市で行われた国家公務員宿舎建て替えに伴う禁野本町遺跡の調査である。特に、第二京阪道路の調査は足掛け10年の歳月をかけて行われ、多くの重要成果が蓄積された。この道路関連の調査により当地域の歴史解明は大きく進展したといえよう。

第二京阪道路の調査

第二京阪道路は当地域を南西から北東に貫き、調査対象地は門真市・寝屋川市・枚方市・交野市域に及ぶ。調査遺跡も20遺跡を超え、ここでは時代毎にその成果の概要を記す。

〔縄文時代〕寝屋川市讃良郡条里遺跡で中期末～後期、交野市私部南遺跡で後期の遺構が発見された。扇状地に立地する讃良郡条里遺跡では中期末の土器が集中して出土し、建物等は検出されていないが、その出土状況から何らかの作業場の跡と推定されている。また、後期の石器が集中して出土し、製作跡と推定できる場所も検出されている。低位段丘上に立地する私部南遺跡では、中期末～後期初頭、後期末の深鉢が出土した土坑などの遺構が検出された。しかし、その分布密度は低く、集落は周辺域に想定されている。その他、寝屋川市の高宮遺跡や小路遺跡などからもかなりの遺物が出土している。明確な遺構は検出されていないが、周辺域に集落が拡がっていることが確実視される。

〔弥生時代〕前期から後期まで各時期の遺構・遺物が発見された。前期では河内湖縁辺部に位置する讃良郡条里遺跡で近畿地方最古段階の土器を伴う集落跡が検出され、当地域における弥生文化受容の様相を明らかにした。一方、河内湖内陸部に位置する私部南遺跡でも集落や流路が発見されている。前期中段階後半～新段階の土器が伴っており、内陸部における弥生文化の定着の時期が明らかにされた。

中期になると多くの集落が発見される。その前半期には、内陸部の枚方市と交野市の市境の丘陵上に立地する上の山遺跡で独立棟持柱をもつ大形掘立柱建物や竪穴建物、方形周溝墓が、近接する私部南遺跡でも竪穴建物や方形周溝墓などが検出された。河内湖縁辺部では、讃良郡条里遺跡で竪穴建物などが確認されたが、集落に関する遺構の分布密度は低い。しかし、周辺には雁屋遺跡など当期の拠点的な集落が形成されており、一方、讃良郡条里遺跡内では水田の可能性が高い土壌が広範囲に確認されている。内陸部、縁辺部とも、前期から弥生文化が急速度で発展した状況を具体的に読み取ることができよう。

中期後半から後期では、河内湖を望む丘陵部に位置する太秦遺跡で、建て替えを含め30棟を越える竪穴建物が検出され、当地域の中心的な集落であったことが明らかとなった。また、谷を隔てて隣接する丘陵上の天尾遺跡では20基を超える方形周溝墓群が検出された。集落域と墓域の関係を知るうえで良好な資料となっている。

後期の遺構は交野市の東側の丘陵部、東倉治遺跡などで竪穴建物が確認されているが、前代に比べその検出例は少ない。ただ、私部南遺跡では灌漑用水路が、讃良郡条里遺跡では水田の可能性が高い土壌が広範囲に確認され、生産活動における具体状況の一端を垣間見ることができた。

第二京阪道路の発掘調査（寝屋川市域）

〔古墳時代〕前期から後期まで重要な成果が得られている。前期の成果としては、小路遺跡の前方後方形周溝墓、讃良郡条里遺跡や上の山遺跡の方形竪穴建物によって構成される集落の発見がある。特に前方後方形周溝墓の検出は、弥生時代から古墳時代へと社会変化していくなか、当地域における墓制を考えるうえで重要な資料となった。

中期および後期には、河内湖縁辺部は「河内の牧」の中心地として発展する。調査では讃良郡条里遺跡から馬骨や製塩土器、木製鞍や鐙など馬飼いにかかわる遺物が多数出土している。さらに出土品のなかには渡来系の遺物も多くみられ、馬飼いに渡来人が関与していたことがより明確となった。

一方、讃良郡条里遺跡から見て北東の丘陵部でも同時期に開発が始まることが判明した。河内湖を望む高宮遺跡では、丘陵斜面を階段状に掘削して竪穴建物群が営まれる。建物内には造り付けの竈が設置され、渡来系の遺物が出土することから、この開発にも渡来人が関与していることが窺えた。さらに、高宮遺跡から奥まった丘陵部には、低墳丘の方墳を中心に構成される太秦古墳群が築かれる。高宮遺跡、太秦古墳群ともに馬飼い集団との関連が想定されている。

内陸部の遺跡、茄子作遺跡、私部南遺跡、上私部遺跡、有池遺跡などでも多くの遺構・遺物が発見されている。茄子作遺跡では谷部から焼き歪みのある初期須恵器の破片が数多く出土した。周辺斜面部に窯の存在が確実視され、須恵器生産の開始とその発展を考えるうえで重要な資料となっている。私部南遺跡、上私部遺跡、有池遺跡では竪穴建物を中心にした集落が形成されることが確認された。いずれの遺跡からも渡来系土器が出土しており、近接する鍛冶集落、森遺跡との関係が注目される。また、前述の遺跡のうち、讃良郡条里遺跡、私部南遺跡、上私部遺跡は、後期になっても大きく発展していき、6世紀代にピークを迎える。

古墳については前述の太秦古墳群のほか、寝屋川市で横穴式石室を埋葬施設とする奥山1号墳が発見された。出土遺物から6世紀後半～7世紀初頭の古墳と判明した。

〔古代〕河内湖に近い寝屋川市域では、寝屋南遺跡で飛鳥時代、寝屋東遺跡と大尾遺跡では飛鳥～奈良時代、讃良郡条里遺跡と高宮遺跡では奈良～平安時代の集落、小路遺跡では奈良～平安時代の流路が

上の山遺跡　弥生時代の大形掘立柱建物

小路遺跡　古墳時代初頭頃の前方後方形周溝墓

太秦遺跡　弥生時代の竪穴建物群

高宮遺跡　古墳時代の竪穴建物群

発見された。特に丘陵部に立地する高宮遺跡では大形の倉庫群が検出され、直近の高宮廃寺との関係が注目された。また、隣接する小路遺跡や讃良郡条里遺跡北東部で検出された流路（同じ流路）には堰が設けられ、その周辺からは奈良～平安時代の人面墨書土器や人形、絵馬が集中して出土している。当時の祭祀の状況を知るうえで重要な成果である。

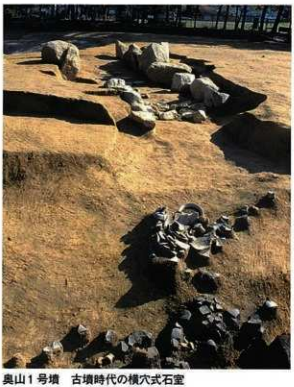
内陸部の交野市域では、上私部遺跡が7世紀には衰退するが、近接する私部南遺跡では奈良時代にも集落が営まれ、公的施設の存在が指摘されている。その他、枚方市津田遺跡では平安時代の墓が検出され、灰釉陶器や須恵器の壺が出土している。

〔中世〕枚方市津田遺跡、交野市有池遺跡、門真市巣本遺跡などで良好な資料が得られている。津田遺跡では鎌倉時代の墓や安土・桃山時代の礎石建物が検出された。墓のなかには青磁碗などが副葬されたものもある。礎石建物周辺からは多量の瓦とともに宗教色の強い青銅製品が検出されている。石仏も並んで出土し、この地に寺院が存在したことが確実視された。有池遺跡は平安時代後期～鎌倉時代の集落である。13世紀以降には複数の屋敷地が出現し、なかには濠を伴う有力層のものと推定される屋敷地もある。巣本遺跡は、古くは湿潤な環境下にあったが、中世以降、河川の氾濫により堆積が進み人々が生活できる環境へと変化した。鎌倉時代の集落のほか水路、耕作地が検出され、低地開発の状況が明らかにされた。

禁野本町遺跡の調査

枚方市で行われた国家公務員宿舎建て替えに伴う調査で、2002年と2010年に実施した。調査地周辺は、近接する百済寺との関係が注目視される場所で、これまでの調査では奈良～平安時代の掘立柱建物を中心とした遺構群が広範囲に検出されている。今回の調査地は遺跡西半部にあたる。ほぼ全域で奈良～平安時代の建物群が確認され、集落の変遷がより具体的となった。

また、当地は1945年の終戦まで旧日本陸軍の軍事施設である禁野火薬庫が存在した場所である。調査では予想以上に関係施設の基礎部分が残存していることが明らかとなり、近代史を語るうえで重要な資料が蓄積された。なお、発見された施設に使用されていた軽便鉄道のコンクリート製枕木など、その一部は、完成した住宅地のなかの公園にモニュメントとして活用されている。（岡戸）



奥山1号墳　古墳時代の横穴式石室

津田遺跡　中世墓の副葬品

禁野本町遺跡　軍事施設火薬庫の基礎部分

〈中河内〉

中河内地域では、大小多くの事業が実施された。その代表が、近鉄奈良線連続立体交差化工事に伴う瓜生堂遺跡、岩田遺跡、花屋敷遺跡、恩智川治水事業に伴う池島・福万寺遺跡、八尾市竜華地区区画整理事業に伴う久宝寺遺跡、住宅建て替えに伴う新上小阪遺跡、植松遺跡、小阪合遺跡、大和川高規格堤防建設に伴う八尾南遺跡などの調査である。ここでは大規模調査を中心にその成果を概観する。

瓜生堂遺跡・岩田遺跡・花屋敷遺跡

近鉄連続立体交差化工事に伴う調査のため、調査範囲は東西に長い。西から東大阪市の瓜生堂遺跡、岩田遺跡、花屋敷遺跡の3遺跡が調査対象となった。

瓜生堂遺跡ではこれまでの調査でも確認されているように、弥生時代前期の居住域や水田域、同中期の方形周溝墓、中世の集落などが検出された。瓜生堂遺跡の東側に隣接する岩田遺跡では弥生時代中期の土器棺墓が検出され、瓜生堂遺跡から続く墓域がさらに東へ拡がることが明らかとなった。花屋敷遺跡は2006年度に近鉄河内花園駅前再開発に伴い調査が実施され、13～14世紀の集落が発見された。隣接した場所で行われた2010～2011年の調査でも、同様の集落が確認され屋敷地の状況が明らかとなった。また、屋敷地を画する溝付近からは、中国銭など15390枚を納めた埋納遺構が検出された。

池島・福万寺遺跡

東大阪市と八尾市に所在する池島・福万寺遺跡の本格的な調査は、1984年大阪府教育委員会によって着手され、1989年から当センターが継続的に実施している。これまでの調査では、弥生～古墳時代の水田、古墳時代後期の集落、平安時代以降近世までの条里遺構などが検出され、沖積地における堆積環境と土地利用の関係を明らかにしてきた。

ここ10年間の発掘でも、これらの調査成果がより繊細で強固なものとなったといえる。また、池島地区では、調査場所は生駒山地に近い遺跡東側が対象となり、弥生時代前期の溝群や墓地、弥生時代中期の竪穴建物など集落にかかわる遺構が検出された。不明であった弥生時代集落がようやく姿を現し始めたのである。しかし、当事業は当面の間、その実施が凍結された。今後、集落と生産域を考えるうえで重要な調査成果が期待されただけに残念である。

岩田遺跡　弥生時代の土器棺墓

池島・福万寺遺跡　縄文時代末～弥生時代初頭の墓群

花屋敷遺跡　室町時代の銭貨埋納遺構

池島・福万寺遺跡　弥生時代の初期水田

若江北遺跡

東大阪市所在の当遺跡は、これまでに弥生時代前期の集落関係の遺構群や水田が確認され、出土弥生土器は近畿地方最古段階として注目されてきた。

2010年に行った水道送水管布設に伴う調査では、規模は小さいものであったが、弥生時代から中世にいたる各時代の遺構面を検出し、弥生時代後期の遺構面では土器が集積された状況で出土した。

山賀遺跡

東大阪市所在の当遺跡は、近畿自動車道の調査で弥生時代前期の遺構や遺物が多数確認され、近畿地方の重要な弥生時代遺跡の一つとなっている。

2004～2005年に実施された調査地は、近畿自動車道の調査地から東へ約100mの場所にあたる。この調査では、弥生時代前期末～中期初頭の遺構面で堤を伴い並行に走る溝群が検出され、この溝間からは約20基の木棺墓が発見された。木棺の多くは規模の小さい未成人棺と推定されるもので、当該期の墓制を考えるうえで一石を投じる成果となった。

久宝寺遺跡

八尾市竜華地区区画整理事業や近畿自動車道八尾パーキングエリア建設のための調査を数次行った。

特に久宝寺駅南側で実施された竜華地区水処理施設建設に伴う調査は、その規模も大きく、得られた成果も多様である。

縄文時代晩期～弥生時代前期では出土遺物の様相から近畿地方における弥生文化受容の状況の一端を知ることができ、弥生時代中期～後期には水田開発が大規模に行われたことが明らかとなった。後期後半には当地域は大規模な洪水にみまわれ、前代とは異なる地形が形成される。微高地には建物や井戸が設けられ生活域として使用されるが、この生活域はすぐに耕作域となり、弥生時代後期末～古墳時代初頭には群集する墳墓群が形成される。

墳墓は約60基検出された。そのほとんどが小規模な方形墳であったが、なかには前方後方形のものも存在した。このような墳墓のあり方は、弥生時代から古墳時代へと変化する過渡期の社会構造を考えるうえで重要な資料となっている。

また、当調査の周辺域でも多くの発掘が行われ、精緻な調査成果により、各時代の様相がより詳細に把握されてきている。

山賀遺跡　弥生時代の溝群

久宝寺遺跡　古墳時代初頭の土器溜り

久宝寺遺跡　古墳時代の堰

久宝寺遺跡　古墳時代初頭の墳墓群

新上小阪遺跡・植松遺跡・小阪合遺跡

いずれも住宅の建て替え事業に伴うものである。事業は複数期にわたって実施されることが多く、遺跡内の状況を広範囲に知ることができた。

東大阪市所在の新上小阪遺跡の調査は3期に及ぶ。2001年に遺跡北西側、2005～2006年には北中央付近、2008～2010年には南側で調査を行った。その結果、弥生時代中期には遺跡北中央付近は生産域、南側は墓域であることが確認され、続く後期には北中央付近には集落が展開することが明らかとなった。また、古代（8世紀後半～9世紀）の集落は北西側から南側に拡がることが確認され、出土遺物の様相から周辺における寺院関係施設の存在が指摘されている。

八尾市所在の植松遺跡の調査は2期に及ぶ。いずれの調査地も遺跡南西端に位置し、弥生時代前期の水田、古墳時代前期の溝、古墳～平安時代の流路が検出された。流路からは須恵器や土師器のほか墨書土器や移動式竈などを含む多量な遺物が出土しており、周辺域での集落の存在を窺わせている。

八尾市所在の小阪合遺跡の調査は3期に及ぶ。これまで行われた2期分の調査では、弥生時代の水田、古墳時代初頭の竪穴建物や掘立柱建物、古墳時代中期の初期須恵器の出土する土坑、奈良時代の井戸、平安時代の掘立柱建物が検出され、各時代の集落様相が把握されていた。2004年に行われた調査でも古代の遺構が確認され、当該期の集落の範囲をより詳細に知ることができた。

弓削ノ庄遺跡・亀田遺跡

外環状線鉄道連続立体交差事業に伴うものである。東大阪市南西部に位置し、南東には加美遺跡が立地する。弓削ノ庄遺跡では縄文時代晩期～弥生時代前期の掘立柱建物や土器棺墓、弥生時代中期の方形周溝墓、亀田遺跡では弥生時代後期の土坑などが検出され、遺跡の空白地帯であった当地域の歴史を考えるうえで重要な資料となった。

田井中遺跡

八尾市所在の田井中遺跡は南部域を中心に各機関によって数次の調査が行われ、弥生時代前期～中期の居住域や方形周溝墓群、土器棺墓などが発見され、集落の構造やその変遷が把握されている。2005年に行った陸上自衛隊八尾駐屯地内での調査は小規模なものであったが、南西部で前期の大溝や水田が、南中央部で土器棺墓が検出された。これまでの知見と合わせ、集落構造がより鮮明となった。

八尾南遺跡

八尾市南部に位置する八尾南遺跡は、これまでの調査で旧石器時代の遺構や古墳時代集落が確認されている。特に古墳時代の遺構からは韓式系土器が出土し、渡来系集団の存在を窺わせている。

2002～2005年の調査箇所は遺跡南端部にあたり、弥生時代前期の水田、弥生時代後期の集落、弥生時代後期末～古墳時代初頭の墳墓群が発見された。

特に弥生時代後期の集落は洪水砂によって覆われており、当時の生活面がそのまま残存していた。数棟確認された竪穴建物中には、周堤帯をもつもの、河川に向かい排水路を設けたもの、梯子（はしご）を配したものなどがあり、当時の竪穴建物の構造を知るうえで数多くの知見が蓄積された。また、居住域の周辺では水田も確認され、弥生ムラの景観を具体的に知ることができる貴重な成果となった。（岡戸）

八尾南遺跡　弥生時代の竪穴建物

〈南河内〉

都市圏自動車専用道路として奈良県葛城市と堺市美原区をつなぐ南阪奈道路、大阪都市再生環状道路として位置付けられ、阪神高速道路14号松原線と4号湾岸線を連絡する大阪府道高速（都市計画道路）大和川線の2本の道路建設、並びに近畿地方整備局による大和川高規格堤防整備といった、国・大阪府によって推し進められている大型プロジェクトに伴う発掘調査が展開された。

平成の竹内街道

1996年度の太子町田須谷古墳群を皮切りに本格的な発掘調査を開始した南阪奈道路関連では、駒ヶ谷・尺度・都戸という羽曳野市内に所在する3遺跡の調査を実施した。

1996～1997・1999年度に2次にわたって発掘調査を実施し、「蔵塚古墳」と命名された6世紀中頃の前方後円墳が新たに発見されて話題を呼んだ駒ヶ谷遺跡では、1次調査区域の未調査地約5700㎡を対象に調査を行った。この調査において総柱建物を含む17棟の掘立柱建物が新規に確認され、1次調査検出分と合わせてその変遷を検討した結果、これら建物群の形成は蔵塚古墳の破壊を伴うものであったこと、飛鳥～奈良時代に位置付けられた隅丸方形の柱穴で構成される建物は、その主軸方向から4グループに分けられ、3期以上にわたって変遷していることが示された。また、蔵塚古墳の南東側で検出された溝からは、ほぼ完形の須恵器の高杯形器台が出土し、古墳の存在を示す資料として注目された。

羽曳野インターチェンジの建設予定箇所を中心に3haを超える広範囲の発掘調査を行ってきた尺度遺跡では、国道170号（大阪外環状線）との交差点建設に伴って国道の西側で小規模な調査を実施した。この調査では、竪穴建物2棟と掘立柱建物1棟が新たに追加され、既往の調査で確認された豪族居館の可能性のある方形区画を含む古墳時代初頭の集落が、東西350m、南北200mの拡がりを有していることが明らかとなった。

南阪奈道路の路線内で最後に発掘の鍬が入ったのが、市域西端に位置する郡戸遺跡である。中位段丘上を東西に横断したこの調査では、真福寺遺跡に近い調査区の西側で規格性の高い飛鳥時代と平安時代の掘立柱建物群が確認され、公的施設など一般の集落とは性格を異にする建物群であることが指摘された。また、調査区の東半では、5世紀中葉から1世紀にわたって築造された7基の小方墳が検出され、この地域の古墳時代社会の考究に重要なデータを提供することができた。

南阪奈から大和川線へ

大和川線の事業区間のうち、国道309号と府道大阪狭山線をつなぐ都市計画道路堺松原線と合わせて大阪府が整備を担当することとなった延長2.7kmの区間を対象に、路線内に所在する三宅西・池内・大和川今池の3遺跡について、2003・2004年度の確認調査の成果に基づき、発掘調査を実施した。

最も東に位置し、松原線とのジャンクションにあたる三宅西遺跡の調査では、調査区の中央から少し

駒ヶ谷遺跡　古代の建物群

大和川線の発掘調査

西に寄った位置で確認された流路から、北白川上層式3期に位置付けられる遺存状態の良好な縄文時代後期中葉の土器群が出土し、当該期の基準となり得る一括の資料が得られた。加えて、調査区の東端では、20棟以上を数える円形の竪穴建物と掘立柱建物、方形周溝墓から構成される弥生時代中期前葉の集落が検出され、これまで良好な調査例が少なかったこの時期の集落景観を窺うことができる貴重な成果となった。

三宅西遺跡に西接し、1年遅れで開始した池内遺跡の調査では、遺跡の西端において、東西両側を2条の大溝で画された環濠集落の可能性が高い弥生時代前期中頃の居住域、さらに流路を挟んだその東では同時期の小区画水田が検出され、河内湖（潟）南岸域における初期農耕集落の立地と構造を探るうえで非常に重要な調査例となった。また、その上層の遺構面では、平安時代の屋敷地や両側に側溝を伴った屋敷境の道路などが発見され、側溝からは多量の土器が出土した。なお、当遺跡では、大和川線へのアクセス道路として計画された都市計画道路大阪河内長野線建設に伴う調査区域も含め、同時代の居住域がさらに3箇所確認されている。

近鉄南大阪線の西側に位置し、松原・堺両市と一部大阪市にまたがって拡がる大和川今池遺跡では、大阪狭山線の両側とシールド工事の起点となる今池水みらいセンター内の2工区を対象に調査を実施した。密集する住宅街を東西に貫いた前者の調査では、調査区東寄りの微高地で20数個体の円筒埴輪や7個体以上の家形埴輪を伴った一辺約20mを測る古墳時代前期の方墳や円筒埴輪棺が見つかったほか、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物群が検出され、遺跡北東部における土地利用の実態を垣間見ることができた。また、松原・堺両市にまたがって行った水みらいセンター内の調査では、ちょうど市境にあたる箇所で東西両側に側溝を有した幅員約18mの道路遺構が確認され、古代の官道“難波大道”の発掘として大いに注目を集めた。

二つの飛鳥時代集落

2000年度に左岸の藤井寺市側から着手した大和川高規格堤防整備に伴う発掘調査は、舞台を対岸の柏原市側に移して引き続き実施した。この船橋遺跡における調査では、調査区の西半で弥生時代後期の井戸や溝状遺構が検出されたほか、間に空閑地を挟んだ東西約160m、南北約80mの範囲で20棟以上の掘立柱建物と竪穴建物などから構成される飛鳥時代前期の集落が確認され、西半を中心にガラス製小玉の鋳型や羽口等の工芸生産遺物も出土していることから、工房城の存在が推定されている。

上記のほか大きな成果がもたらされた調査として、独立行政法人都市再生機構（調査当時：都市基盤整備公団）による藤井寺団地建て替えに伴う藤井寺市はざみ山遺跡の調査があげられる。1ha以上に達したこの調査では、75棟に及ぶ飛鳥時代の掘立柱建物群が検出され、獣脚円面硯や土製仮面などの出土遺物の存在から、遺跡の性格として渡来系氏族の居宅の可能性が指摘されている。（岡本）

大和川今池遺跡　難波大道の検出

はざみ山遺跡　飛鳥時代の掘立柱建物群

和泉（大阪南部）地域の調査

デフレ状況から脱し切れないまま日本経済が長らく低成長に喘ぐなか、関西国際空港の建設に伴い活況を呈していたこの地域の公共事業も大幅な減少に転じ、発掘調査の実施に関しても総じて低調であった。過去10年間においては、空港へのアクセスを担う南海本線の高架化を目的とした連続立体交差事業、都市計画道路建設事業など、主にインフラ整備を原因とした継続調査を中心に事業が展開された。

泉佐野市域の発掘調査

南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に関連して、泉佐野市内に所在する湊・上町東・若宮・大西の4遺跡が発掘調査の対象となった。

このうち最も規模の大きい湊遺跡では、2006年度の調査で検出された流路の肩部からほぼ完形に復原できる古墳時代初頭の製塩土器が出土し、さらに別の流路では、同時期の土器とともに使用済みとなった製塩土器が大量に廃棄されていたことが判った。その結果から、既往の調査所見で漠然と製塩遺跡と評価されてきた当遺跡の性格・内容について、より具体的に検討できる資料を得ることができた。

湊遺跡の南西に接し、中世の集落遺跡として知られる上町東遺跡では、2005年度に行った調査においても掘立柱建物や井戸、溝状遺構などが検出され、これらの遺構から出土した瓦器を主体とする土器類の分析を通じ、集落は12世紀後葉頃に成立し、その存続期間は13世紀前葉までの半世紀あまりと短期間であったこと、また、集落の性格について、既往の調査と同様に輪羽口や櫛形木製品などが出土したことから、従来から唱えられてきたように工人が集住した集落である可能性が高いことが指摘された。

全長約500mにわたって2000㎡あまりの面積を対象に実施した若宮・大西遺跡の調査では、17世紀末から18世紀中葉にかけて行われた水田化による削平で遺存状況が悪く、中世以前の遺構としては若干の溝状遺構や土坑、小穴が検出し得たのみであった。

拠点集落：男里遺跡の調査

空港へのアクセス道路と連絡するバイパス道路として計画された都市計画道路泉南岩出線が遺跡内を縦断することとなった泉南市男里（おのさと）遺跡では、2004年度を最後に足掛け11年間にわたって行ってきた発掘調査を完了し、2005年2月に調査報告書を刊行した。

調査の結果、調査区の中央やや南寄りを中心に弥生時代中期末に位置付けられる32棟以上の竪穴建物と掘立柱建物3棟などから構成される東西推定約100m、南北約200mの規模を擁する居住域、そこから南東へ300mほど離れた調査区の南端で方形周溝墓2基からなる墓域が確認され、あわせて、鋭利な工具で複数の掘立柱建物を描いた絵画土器など注目すべき遺物も出土した。泉南（せんなん）地域における拠点的な弥生集落と評価されてきた、当遺跡の集落構造の実態を把握するうえで重要な成果となった。

なお、そのほかの道路建設関連事業として、弥生時代中期の方形周溝墓、13世紀～14世紀初頭の井戸や土坑といった集落関連遺構が確認された、都市計

湊遺跡　製塩土器の出土状況

男里遺跡　弥生拠点集落の発掘調査

画道路高石北線の整備に伴う高石市伽藍橋遺跡の調査があげられる。

"自由都市"堺の発掘

大阪府住宅供給公社による公社賃貸住宅建て替えに伴って2006・2007年度に堺市堺区戎之町東4丁と少林寺町東3丁で実施した調査は、当センターが初めて手掛ける堺環濠都市遺跡の発掘調査となった。

遺跡内の中央東寄りに位置し、長尾街道の10mほど北側にあたっていたと推定される戎之町地区では、16世紀中頃から江戸時代後期までの7面の生活面が確認され、中世後期～江戸時代の町屋の復原が可能となったとともに、大坂夏の陣で被災した第4面を境として町割を異にしていることが明らかとなった。

一方、遺跡の南東部にあたる少林寺地区では、遺跡の象徴である"環濠"に相当する大規模な濠が4条確認されたほか、道路に面した表側に礎石建物を建て、その裏側に井戸や埋甕、廃棄土坑などを配した、近世期の町割に直交する短冊形地割の町屋が検出された。都市の南限を画した4条の濠は、都市域の拡大とともに北から南へ少しずつ位置をずらしながら掘削されたもので、都市側に土塁を備えた最も北側に位置する濠は、幅約17m、深さ約4.2mというこれまでに調査された濠のなかでは最大級の規模を擁しており、防御性の高さとともにその掘削を可能にした"自由都市"堺の経済力の高さを窺うことができた。なお、この最北の濠は、出土遺物から16世紀後半に機能し、天正14（1586）年の豊臣秀吉による濠埋め戻し令によって埋められたと推測され、一番南端の濠は、大坂夏の陣の直前に掘削され、その後、徳川幕府によって埋め立てられていたことが判明した。

堺環濠都市遺跡（戎之町地区）　近世町屋の調査

堺環濠都市遺跡（少林寺地区）　巨大環濠の発見

新しい事業形態の登場

事業形態に関する新たな動向として、公共施設等の整備に民間事業者の優れた能力等を活用するＰＦＩ方式の導入があげられる。民間事業者から直接事業を受託する新方式による発掘事業の嚆矢となったのが、府営岸和田下池田住宅の建て替えに伴う岸和田市下池田遺跡の調査であった。

2007年度から2箇年度にわたったこの調査では、竪穴建物や土器棺墓などから構成される弥生時代中期後葉～後期中葉の集落が確認されたほか、後期後葉から庄内式期にかけてのおびただしい量の土器を廃棄した溝状遺構、古墳時代後期の井戸なども検出され、従来捉えられていたよりも長期にわたって存続した集落であることが明らかとなった。（岡本）

下池田遺跡　溝に棄てられた大量の土器

Ⅱ部　発掘資料精選

Ⅱ部凡例

・本書に収録した遺物は全て、旧(財)大阪府文化財調査研究センター・(財)大阪府文化財センターおよび現(公財)大阪府文化財センターの調査で出土した資料であり、『摂河泉発掘資料精選Ⅱ』(2002年刊)以降、2012年7月までに刊行した発掘調査報告書の収載品から選定した。

・遺物は、旧石器時代(001～012)、縄文時代(013～074)、弥生時代(075～268)、古墳時代(269～476)、古代(477～639)、中世(640～755)、近世(756～826)、近現代(827～858)の時代別、また同時代のうちでは、土器類、埴輪、瓦塼類、銭貨、金属・ガラス製品(および関連資料)、土製品、石製品、木製品、墨書・文字資料類、その他、の順に配列した。

　ただし、境界期遺物の一部に関しては、また、遺物種の内容を勘案した結果によっては、必ずしも厳密には区別できていないものもある。遺物名称の表記は、各時代における一般的な呼称を採用したが、煩項にいたる場合は簡略にしたがい、あるいは、説明的記載を優先した部分もあるため、統一的表記に則らない箇所もみられる。なお、細別期の表記においては一部に推定分を含む。

・遺物の大きさに関する略号は次のとおりである。

(単位はcm。ただし、概数値の場合は、小数点以下を表記していない。)

RD：口径	rd：推定・復原口径
D　：径	d　：推定・復原径
MD：最大径	md：推定・復原最大径(一部は残存部での値)
BD：底径	bd：推定・復原底径
H　：高さ	h　：残存高
W　：幅	w　：残存幅
L　：長さ	ℓ　：残存長
T　：厚さ	t　：残存厚

・石製品と木製品のうち、材種の判明するものは明記した。材種名の記載のないものは未同定である。

・報告および出典の文献名、遺跡別索引、遺跡所在地、遺跡名の読み、英文目録は、本書末を参照されたい。

001

001　ナイフ形石器　旧石器

讃良郡条里遺跡　(W2.0・L7.6)　文献.710

古代～近世の堆積層から単独で出土。サヌカイト製。横長剥片をやや斜めに用い、1側縁に二次加工を施す。形態からみて、後期旧石器時代後半期に属すると考えられる。この石器名称はナイフのような形をしていることに由来するが、使用痕分析によって、切截具ではなく、槍先などの刺突具として使用されたと推定されるものが少なからず存在する。　(井上)

002

002　ナイフ形石器　旧石器

讃良郡条里遺跡　(W1.4・L4.9)　文献.763

縄文後期の流路内に堆積した砂礫層から出土。

サヌカイト製。瀬戸内技法によって剥離された翼状剥片を素材として用い、その打点側の側縁に二次加工を施している。このような形態のものは国府型ナイフ形石器と呼ばれており、後期旧石器時代の後半期に出現し、瀬戸内・近畿地方を中心とする地域に分布することが明らかになっている。　(井上)

003

003　ナイフ形石器　旧石器

高宮遺跡　(W1.9・L6.5)　文献.637

古代以降の堆積層から出土。サヌカイト製。002と同じく、典型的な国府型ナイフ形石器である。本遺跡や讃良郡条里遺跡が立地する寝屋川市東部から四條畷市東部にかけての地域では、このほかにも国府型ナイフ形石器が点々と確認されている。そのため付近に後期旧石器時代後半期の集落が存在した可能性が高く、今後の調査の進展が期待される。　(井上)

004

004　ナイフ形石器　旧石器

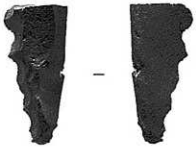
吹田操車場遺跡　(W1.5・L4.2)　文献.823

古墳時代～古代の遺構を検出中に単独で出土。

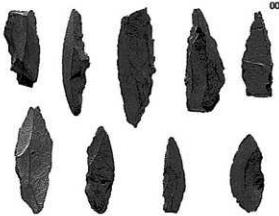
サヌカイト製。縦長剥片を素材とし、1側縁に二次加工を施している。大阪市長原遺跡や同瓜破北遺跡でまとまって出土した後期旧石器時代後半期の石器群には、横長剥片素材のものとともに縦長剥片素材のナイフ形石器が含まれており、本例もその時期に属すると考えられる。　(井上)

005

006



007



008

005　ナイフ形石器　旧石器
郡戸遺跡　（W1.7・L5.5）　文献.595

古墳時代や古代の遺物に混じって出土。

サヌカイト製。翼状剥片を素材とし、打面側の側縁に二次加工を施す、典型的な国府型ナイフ形石器である。006・007に示すように、本遺跡からは同様の石器が多く確認されている。いずれも原位置を保ったものではないが、付近に後期旧石器時代後半期の集落が存在したことを示している。　（井上）

006　ナイフ形石器　旧石器
郡戸遺跡　（W2.3・ℓ5.0）　文献.595

005と同じく、古墳時代や古代の遺物に混じって出土。サヌカイト製。半分は欠損している。横長剥片を素材とするが、背面側には原礫面が残り、背面にみられる剥離面の打点は主要剥離面の打点の方向とは異なる。国府型ナイフ形石器が盛行した時期には、このような横長剥片素材のものも存在しており、ナイフ形石器のバリエーションを示すと考えられる。　（井上）

007　ナイフ形石器　旧石器
郡戸遺跡　（左下：W2.0・ℓ6.0）　文献.595

005・006のものとは別地点であるが、同様に古墳時代や古代の遺物とともに出土。

いずれもサヌカイト製。翼状剥片を素材とする国府型ナイフ形石器とともに、横長剥片を素材とし、基部の2側縁に二次加工を施すものや、基部と先端部に二次加工を施すものがある。

（井上）

008　ナイフ形石器　旧石器
はざみ山遺跡　（右：w2.0・ℓ4.2）　文献.707

いずれも古墳時代以降の遺物とともに出土。

サヌカイト製。左と中のものは翼状剥片を素材とし、打点側の側縁に二次加工を施す国府型ナイフ形石器。また、右のものは横長剥片の1側縁に二次加工を施したナイフ形石器と考えられる。本遺跡周辺では旧石器時代の遺跡がいくつか知られており、旧石器時代を研究するうえで重要な地域の一つである。　（井上）

009

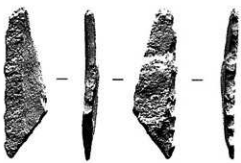
009　角錐状石器　旧石器

私部南遺跡　(W2.1・ℓ6.3)　文献.865

古墳時代～古代の遺物に混じって出土。

サヌカイト製。横長剥片を素材とし、2側縁に二次加工を施している。断面形は台形を呈する。角錐状石器は後期旧石器時代後半期に作られた石器で、九州・瀬戸内・近畿・関東地方を中心に分布している。本例のような形態の角錐状石器は、槍先として用いられた可能性が高い。　(井上)

010



010　スクレイパー　旧石器

池内遺跡　(W4.4・L1.3)　文献.843

古墳時代～古代と推定される遺構から出土。サヌカイト製。横長剥片を素材とするが、打点とは反対側の側縁（写真右端）に二次加工を施す点で、ナイフ形石器とは異なる。このため、二次加工を施した側縁を刃部とするスクレイパーと推測されている。詳しい時期は明らかではないが、パティナ（石器表面からの水和層）の発達具合から旧石器と考えられている。(井上)

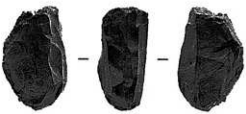
011

011　細石刃状石器　旧石器

私部南遺跡　(左:W0.5・L2.1)　文献.865

古墳時代の堆積層および中世の遺構から出土。サヌカイト製。細石刃とは幅1㎝以下の小さな石刃で、後期旧石器時代末期に盛行した。木や骨の軸に複数の細石刃を嵌め込み、槍先として使用されたと推定される。写真の石器は細石刃の可能性がある剥片と報告されたが、両者とも断面形が四～五角形を呈して厚みがあり、細石刃そのものではないと思われる。　(井上)

012

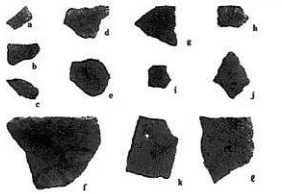


012　細石核　旧石器

私部南遺跡　(W2.7・L4.2)　文献.865

古墳時代の掘立柱建物の柱穴から出土。サヌカイト製。角柱形を呈し、長辺側の1面に細石刃を剥離した痕跡が残る。同様の細石核は寝屋川市讃良川河床遺跡などから出土しているが、類例が少なく貴重な検出事例である。なお大阪府下では、このような細石核のほか、楔形細石核に関連する剥片も出土しており、両者の関係についても検討する必要がある。　(井上)

013

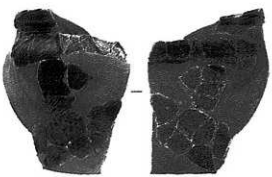


013　縄文土器一括　　縄文早期
津田遺跡　　(f:w10.1・ℓ7.0)　文献.800

いずれも後世の遺構・包含層から出土。

a～fは押型文土器である。a～eは早期前葉の神宮寺式であり、aには山形文、b～eには格子目文が施されている。fは早期後葉の高山寺式であり、大振りな山形文が施されている。g～ℓは表裏条痕文土器であり、早期末葉に帰属する。h・k・ℓには爪形文が施されている。kには補修孔がみられる。　(河本)

014

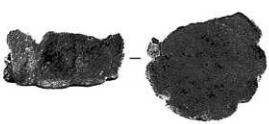


014　縄文土器（深鉢）　　縄文前期
讃良郡条里遺跡　　(rd26.0・h25.3)　文献.801

縄文前期後葉の古土壌層から出土。

口縁部はキャリパー形を呈する。ＬＲ縄文を地文とし、口縁部から胴部上半にかけて、押し引き沈線を施した突帯を貼り付けて文様を描いている。北白川下層Ⅲ式の土器であるが、この土器は府内での出土が極めて少なく、本例はそのうちでも全体の形が判る貴重な資料である。　(河本)

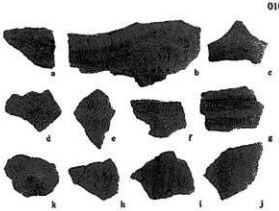
015



015　縄文土器（深鉢）　　縄文前期
小路遺跡　　(BD12.1・h5.2)　文献.669

下層確認トレンチから出土。中央部がやや持ち上がる平底の底部で、外面にはＬＲ縄文を施している。底部側面に押圧による抉りを現状で６箇所入れており、下から見た形は菊花状を呈している。底部の形状に沿うように、土器内面に植物が敷かれたような状態で出土した。自然に入り込んだのか、意図的に敷かれたかは判然としないが、特異な事例である。　(河本)

016



016　縄文土器（深鉢）　　縄文中期
津田遺跡　　(b:rd31.0・ℓ10.0)　文献.800

いずれも後世の遺構・包含層から出土。長大なＲ縄文を地文として、口縁部や胴部にかけて爪形文を施す中期前葉の船元Ⅰ式の土器である。a～dはⅠ口縁部片で、aのように水平口縁になるものもあれば、b～dのように波形が大小の波状口縁になるものもみられる。e～jは胴部片。kは角底であり、この時期に特有の五角形底になるものと思われる。　(河本)

017

017　縄文土器（深鉢）　縄文中期
讃良郡条里遺跡　（上左：H46.9，上右：RD32.5，下左：h38.8，下右：H48.8）　文献798

下左は後期初頭の流路、他は中期末の二又に分かれる流路と流路の間から集中して出土。

上左は、外面と口縁端にＬＲ縄文を施し、口縁部には上２条、下１条の横方向沈線を引き、その間に押し引き沈線による楕円形区画文を、胴部には４条の波状沈線を施す。上右は、口縁部に２条の横方向沈線を引き、その間に沈線による円形文、二重楕円形区画文を施す。縄文は施されず胴部に文様はない。下左は、外面と口縁端にＬＲ縄文を施し、口縁部には沈線による円形文、隆帯による楕円形区画文を、胴部には２条の縦方向の列点文、円形文、３条の沈線による方形区画文、２条の横方向沈線を施す。下右は、外面と口縁端にＬＲ縄文を施し、口縁部に１条の横方向沈線、長方形区画文、４条の波状沈線を施す。胴部に文様はない。４点とも残りが良く、中期末の北白川Ｃ式の文様構成を考えるうえで良好な資料である。　（河本）

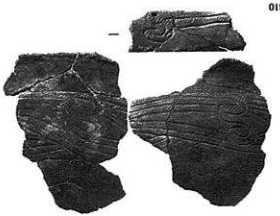
018

018　縄文土器（深鉢）　縄文中期末～後期初頭
私部南遺跡

（上：rd31.6，中：rd30.4，下：h25.9）　文献857

３点は円形袋状土坑（掘り込み穴）から、折り重なる状態で出土。上は、口縁部から胴部上半にかけ、３条の沈線を横方向に展開させ、上２条の沈線はＪ字文を描き、下端の沈線は口縁部の形状に対応してゆるやかな波状沈線となる。縄文は用いず、沈線のみで文様を描く。中は、ゆるやかな波状口縁の波頂部に同心円文を描き、同心円文の間には横方向の沈線を施す。胴部には、波頂部の下にあたる位置に口縁部と同じ同心円文を描き、２条の垂下沈線の間にＬＲ縄文を施した縄文帯によって二つの同心円文をつなぐ。波底部の下にあたる位置には沈線により鐙状の文様を描く。下は、沈線間にＬＲ縄文を施した縄文帯によって、胴部に紡錘文を描く。これらは017の土器群と比べると、口縁部文様帯が退化し、口縁部・胴部文様帯の一体化が進んでいることや、縄文帯による文様を施す点で、017よりも年代的に新しく位置付けられる。　（河本）

019



019　縄文土器（鉢）　縄文後期

三宅西遺跡　(rd26.0・h18.0)　文献.832

南北方向にのびる大規模な流路から出土。

口縁部はゆるい波状を呈し、内面（写真上）に波頂部をＳ字文とする横方向の縄文帯を施している。胴部外面には、沈線間にＬＲ縄文を施す多条沈線とＳ字文を施している。019～022は全て同一の遺構から出土しており、残りも良く、後期中葉の北白川上層式３期の器種構成がよく判る好資料である。　(河本)

020

020　縄文土器（深鉢）　縄文後期

三宅西遺跡　(rd14.2・h13.2)　文献.832

019と同じ流路から出土。小形の深鉢であり、口縁部は外面を無文とし、内面には一部弧状を呈する横方向の沈線を１条施している。胴部上半には簡略化させたＳ字文および横方向の沈線を描き、沈線間にはＬＲ縄文を施している。内面には炭化物の付着がみられる。019の土器と比べると、本例は文様が全体的に簡略化されたものといえる。　(河本)

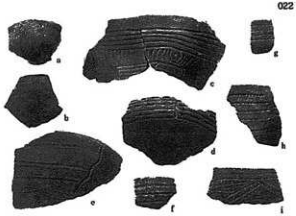
021

021　縄文土器（浅鉢）　縄文後期

三宅西遺跡　(rd22.0・h12.0)　文献.832

019と同じ流路から出土。水平口縁で平底の浅鉢。口縁部外面には、沈線間にＬＲ縄文を施す２条の縄文帯を横方向に展開させ、この上下二つの縄文帯をつなぐような縦方向の短い縄文帯が２箇所にみられる。内面に炭化物が付着しているが、このような使用時の煤や吹きこぼれの残存している土器が、この流路からは比較的多く出土している。　(河本)

022



022　縄文土器（浅鉢）　縄文後期

三宅西遺跡　(c:h7.4, g:h4.1)　文献.832

019と同じ流路から出土。

ａ・ｂは無文浅鉢、ｃ～ｉは有文浅鉢。このうちｃ～ｅ・ｈには、対向多重弧線文や短沈線と沈線を交互にくりかえす文様など、関東・北陸地方の堀ノ内式や加曾利（かそり）Ｂ式といった土器に類似する文様が施されている。後期中葉における各地との交流の様相を考えるうえで重要な資料である。　(河本)

023

023　縄文土器（深鉢）　縄文後期
池島・福万寺遺跡　（rd29.6・H23.1）文献.761

自然流路の層部から出土。波状口縁で、波頂部には内面に刺突の施された突起を有する。口縁部には沈線によって方形区画文を描き、この区画文の周囲と波底部に貼り付けた突帯の上には、刻みを施している。胴部には横方向の平行沈線および連弧状沈線を引き、沈線間には貝殻掘縄文を施している。後期中葉の元住吉山Ⅰ式の土器である。（河本）

024

024　縄文土器（深鉢）　縄文後期
池島・福万寺遺跡　（rd25.5・H26.8）文献.761

縄文晩期～弥生前期の土壌化層の下層にあたる、自然堆積層の上面から出土。内外全面に巻貝条痕を施している。口縁部外面は無文であるが、穿孔が1箇所認められる。口縁部内面には横方向の沈線が1条、胴部には横方向の凹線が3条施されている。後期中葉から後葉にかけては、このような貝殻を用いた調整や施文が多くみられるようになる。（河本）

025

025　縄文土器（深鉢）　縄文後期
池島・福万寺遺跡　（MD24.5・H26.4）文献.804

縄文晩期～弥生前期の土壌化層の下層にあたる、氾濫堆積物が主体を占める自然堆積層から出土。

口縁部は角状の突起をもち波状を呈する。胴部から頸部への屈曲部に1条の横方向の沈線と細い刻目帯を施している。外面には斜め方向のヘラミガキ、内面には横方向の貝殻条痕がみられる。煤が内外面にみられ、特に外面には厚く付着している。（河本）

026

026　縄文土器（深鉢）　縄文後期
山賀遺跡（上左:rd39.2, 上右:rd28.7, 下:rd29.6）文献.788

弥生前期の土壌化層の下層にあたる、自然堆積層から折り重なるようにして出土。いずれも、3～4条の横方向の多条凹線および巻貝圧痕による施文を特徴とする、後期後葉の宮滝式土器である。上左は口縁部に半円形の突起がみられ、この突起部と頸部に巻貝圧痕を施す。他の2点は水平口縁で、上右の胴部には補修孔と思われる焼成後の穿孔がなされている。（河本）

027

028

029

030

027　縄文土器（浅鉢）　縄文晩期
私部南遺跡　(h5.2・w11.2)　文献.757

後世の包含層から出土。口縁部は波状を呈し、リボン状の突起をもつ。口縁端部を鍵形に短く屈曲させている。内外面とも丁寧なナデ調整を施している。晩期中葉～後葉の滋賀里Ⅲｂ式～滋賀里Ⅳ式期にみられる浅鉢である。50ｍほど離れた地点では、滋賀里Ⅲｂ式期の土坑が検出されており、周囲にこの時期の集落域が存在する可能性が想定される。　(河本)

028　縄文土器（浅鉢）　縄文晩期
私部南遺跡　(h9.8・w14.4)　文献.865

晩期中葉～後葉の流路から出土。

ゆるやかな波状を呈する口縁の波頂部にＢ字形突起を有し、体部外面には眼鏡状隆帯を施している。器形自体は頸部と体部との境に屈曲をもつ関西地方によくみられるものであるが、体部に眼鏡状隆帯を施すという点で特異なものであり、東北・北陸地方などの影響を受けた土器である可能性を考えさせる。　(河本)

029　縄文土器（浅鉢）　縄文晩期
船橋遺跡　(rd43.0・H31.6)　文献.676

縄文晩期の古土壌層から、斜めに傾いた状態で出土。頸部が「く」字形に屈曲し、口縁端部内面には横方向の沈線を１条施している。底部外面には棒状工具による圧痕がみられる。外面は横方向のミガキ、内面はナデによる調整がなされている。内面には薄く炭化物が付着している。縄文晩期後葉～末の突帯文土器深鉢に伴う浅鉢と考えられる。　(河本)

030　縄文土器（壺）　縄文晩期末
船橋遺跡　(rd13.2・h36.0)　文献.676

縄文晩期の古土壌層を掘削し検出した土坑の上面から出土。ほとんどの破片が内面を上に向けた状態で検出され、縦に割った半分弱の部分が残存していた。口縁端部に突帯を施すが、刻目はない。外面は頸部から肩部にかけてはミガキ、胴部にはケズリ調整がなされている。内面は全体にナデ調整を施しており、肩部には指オサエの痕がみられる。　(河本)

031

031　縄文(突帯文)・弥生土器一括　縄文晩期末～弥生前期
讃良郡条里遺跡　(右奥:rd49.0・h39.5)　文献.830

西流し途中で合流する溝から出土。本遺跡では近畿地方の縄文・弥生時代移行期を考えるうえで重要成果があった。従前の当地最古の弥生土器より遡る土器が確認され集落様相も把握できた。この溝からは縄文終末・長原式と弥生初頭・遠賀川(おんががわ)系の土器が多く出土し、両土器の共存にかかわる貴重資料となるが、双方の出土状況が異なる傾向も指摘されている。　(秋山)

032

032　縄文土器（深鉢）　縄文晩期末
讃良郡条里遺跡　(RD31.5・H41.0)　文献.830

上記溝のすぐ北側に位置する土壙(どこう)（墓関係の掘り込み穴）から出土。平面楕円形の遺構内に縄文晩期末の突帯文土器深鉢を斜位に埋置した状態で検出された。土壙底面に向けた体部下位に穿孔があり、土器棺墓と想定してよい。埋土観察により当初は木製蓋などが存在した可能性が想定される。深鉢内からは、漆とみられる赤色塗膜が埋土の水洗選別で確認された。(秋山)

033

033　縄文土器（深鉢）　縄文晩期末
弓削ノ庄遺跡　(RD29.2・H38.3)　文献.705

平面楕円形の土壙から、土圧で圧縮されるがほぼ完形を保ち、横位の状態で出土。検出時には別個体の深鉢片が被されていた。土器棺墓に供された、突帯文土器の深鉢で、口縁部が外反し体部は肩部付近で丸みをもちゆるやかに屈曲する。外面には、口縁端からやや下がった位置と肩部付近に粘土突帯がめぐらされ、端部には浅いD字形で小形の刻目が加えられる。(秋山)

034

034　縄文土器（深鉢）　縄文晩期末
弓削ノ庄遺跡　(BD7.0・h9.8)　文献.705

ピットから出土。本遺跡は、遺構面や包含層から縄文晩期末～弥生前期の遺物が大量検出され、時代移行期の重要集落である。本例は突帯文土器深鉢の底部付近と推定される。底・体部内外面に多くの籾殻圧痕があり破面にも確認できる。縄文晩期末土器の製作者の周辺に少なからずの籾が存在した確証であり、稲の伝来・水稲栽培開始期の注目すべき資料となる。(秋山)

035

035　縄文土器（浅鉢・浮線文土器）縄文晩期末
久宝寺遺跡　（左：h4.8・w6.2）　文献.759

左は弥生後期の作土器、右は縄文晩期長原式～弥生中期初頭の包含層から出土。ともに浅鉢の破片で、右は口縁部文様帯に眼鏡枠状浮文、体部文様帯に結節部が分離された紡錘形浮文が施され、左の口縁部文様帯には直線状、体部文様帯には反復させながら横位に連続する浮文を配する。双方とも口縁と体部文様帯間が連接し、比較的古い段階の浮線文（ふせんもん）土器である。（三好）

036

036　縄文土器（浅鉢・浮線文土器）縄文晩期末
弓削ノ庄遺跡　（rd25.2・h4.7）　文献.705

包含層から出土。本層下には、縄文晩期末を主体とし少量の弥生前期前半の土器を伴う面が検出される。浅鉢の体部上半から口縁部の破片で、口縁端部外面には結節部に小さな瘤状隆起をもつ眼鏡枠状浮文がめぐらされ、突線１条を介した体部には、３条一組を二つあわせ６条一対とする紡錘形浮文がある。口縁と体部文様帯がやや離れ、後出的要素が強い。　（三好）

037

037　縄文土器（浅鉢・浮線文土器）縄文晩期末
讃良郡条里遺跡　（rd30.4・h18.2）　文献.830

包含層から出土。本層下には、弥生前期前半を中心とし縄文晩期の遺物を若干伴う面が検出される。全容が判る例で、口縁上部に眼鏡枠状、体部に３・４条を対とする下弦状と紡錘形の浮文を施す。外面から内面上位には黒色処理した下地に水銀朱混和漆が塗布される。類した赤色顔料塗布例は大阪市長原遺跡や藤井寺市国府遺跡にもあり当土器類の特殊性を示す。（三好）

038

038　縄文土器（船形・浮線文土器）縄文晩期末
池島・福万寺遺跡　（bd6.3～7.7・H11.7）文献.804

14-１面のくぼみ状地形から出土。両端が反った船状の形をなす。口縁部外面に眼鏡枠・紡錘形状の浮文があり、突線１条を介し、長辺側体部中央～底部に両翼状から平行線につながる浮文が施され、一部に黒色顔料が塗布される。ともに出土した土器に縄文晩期末～弥生前期のものがある。この土器の故地でも船形土器は稀少で、ましてや近畿例は稀有である。　（三好）

039

039　土偶　　縄文晩期末～弥生前期
久宝寺遺跡　　(w6.9・ℓ7.9)　文献.759

弥生前期の溝から出土。板状に作り出された土偶の頭部である。十字に貼り付けた粘土紐により目と鼻を、左右端部の突出部に円孔を穿つことにより耳を表現している。頭頂部には二つの突起が認められ、結髪を表したものと思われる。縄文時代から弥生時代への過渡期における祭祀はもちろんのこと、当時の習俗を考えるうえでも興味深い資料である。　(永野)

040

040　土偶　　縄文晩期末～弥生前期
久宝寺遺跡　　(w7.4・ℓ5.6)　文献.759

弥生前期の包含層から出土。

形態から、脚部が省略され台状となる土偶と考えられる。胴部に粘土を貼り付けることで乳房と腕を作り、腹部には縦方向の沈線を施して正中線を表現している。本例のような土偶は「台式土偶」と呼ばれ、縄文晩期末～弥生前期に近畿地方を中心に出土している。

(永野)

041

041　土偶　　縄文晩期末～弥生前期
久宝寺遺跡　　(w8.1・ℓ6.2)　文献.759

弥生前期の溝から出土。土偶の体部片で、腹部には正中線が認められる。近年の発掘調査により、近畿地方では弥生時代に帰属する土偶の検出事例が増加しており、多くは縄文土器と弥生土器が共伴する遺跡から出土している。縄文時代から弥生時代へ、新たな文化が伝播・定着する過程における様相を考察するうえで重要な位置を占める。　(永野)

042

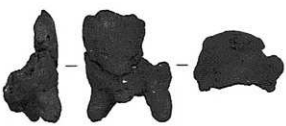
042　土偶　　縄文晩期末～弥生前期
池島・福万寺遺跡　　(W4.6・L5.8)　文献.804

縄文晩期末～弥生前期中葉の包含層から出土。

抽象的な人形表現をとる土偶である。側辺中央部に設けられたくぼみから上が顔、下が腹部を表したものと思われる。顔の両端には穿孔により耳が、中央には刺突により口が表されるが、その他の器官は認められない。腹部に施された縦方向の線刻は正中線を表したものと思われる。　(永野)

043

044



045

046

043　土偶　　縄文晩期末～弥生前期
池島・福万寺遺跡　　(w8.5・ℓ6.2)　文献.804

縄文晩期末～弥生前期中業の包含層から出土。

「台式土偶」の体部片である。弥生時代における土偶は、縄文と弥生、異なる文化基盤を有する集団が共生する集落から多出しており、精神文化を共有していたことを窺わせる。弥生文化をもたらした集団が、縄文時代の伝統的な祭祀を受容することにより、集団間の融和を図ったのであろうか。　(永野)

044　容器形土製品　　縄文晩期末～弥生前期
池島・福万寺遺跡　　(w5.0・t6.3)　文献.804

縄文晩期後半～弥生前期の落込みから出土。

脚付きの容器形土製品である。現状では3本の脚が認められるが、さらに多くの脚部を有していた可能性もある。あるいは何らかの動物を模した土製品であった可能性も残る。いずれにせよ、日常の道具とは考えにくく、祭祀具など特殊な用途が推察されるが、具体は不明である。　(永野)

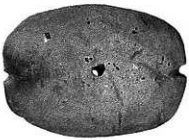
045　船形土製品　　縄文晩期末～弥生前期
池島・福万寺遺跡　　(h4.0・ℓ6.4)　文献.804

044と同じ落込みから出土。楕円形を呈する平面形状、および半円形を呈する断面形状から、船形土製品と考えられる。器面はヘラミガキ調整により丁寧に仕上げられている。本資料が出土した落込みからは、044容器形土製品のほか、土偶やミニチュア土器などの祭祀具が出土していることから、何らかの祭祀が執り行われた可能性が高い。　(永野)

046　輪状土製品　　縄文晩期末～弥生前期
池島・福万寺遺跡　　(d8.0・T1.3)　文献.804

弥生中期の流路から出土。生駒山西麓産の胎土を用いて製作されている。輪状土製品の類例は、八尾市久宝寺遺跡や東大阪市鬼塚遺跡、大阪市長原遺跡などに求めることができ、腕輪としての用途が指摘されている。一方で、本例のように腕輪とするには小さく、適さないものもあることから祭祀具などの可能性も残るなど、具体な用途は不明である。　(永野)

047



047　板状土錘　　縄文晩期～弥生前期
池島・福万寺遺跡　　(W8.5・L6.1)　文献.862
縄文晩期～弥生前期の包含層から出土。
中央には孔を穿ち、長軸の両端には抉りを施す。
本遺跡では、縄文時代～弥生時代の遺構面において、杭列を伴った溝が検出されており、漁撈に関する施設である可能性が指摘されている。本資料も時期を同じくすることから、こうした漁撈に使用された蓋然性が高い。　(永野)

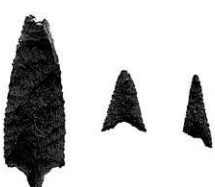
048

048　有舌尖頭器　　縄文草創期～早期
大和川今池遺跡　　(W3.2・L7.0)　文献.837
弥生時代～古墳時代の包含層から出土。
サヌカイト製。有舌尖頭器(ゆうぜつせんとうき)は、縄文草創期～早期前半に認められる狩猟具で、槍先として使用されたと考えられている。本資料の出土地周辺では、同時期の遺構や遺物は確認されておらず、詳細時期は不明である。縄文人が狩猟に携行し、遺失したのであろうか。
(永野)

049

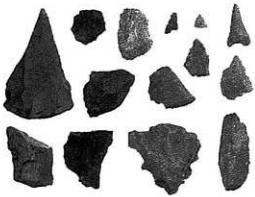
049　有舌尖頭器　　縄文草創期～早期
郡戸遺跡　　(W2.5・ℓ7.5)　文献.595
包含層から出土。
サヌカイト製で、先端部および基部の一部を欠損する。両面とも大きな剥離調整を行った後、両側縁部から細かい調整剥離を施している。本遺跡では、縄文時代の遺構や土器は確認されていないが、本例のほか石鏃などの狩猟具が出土していることから、周辺が狩猟採集の場として利用されていたことが窺える。(永野)

050

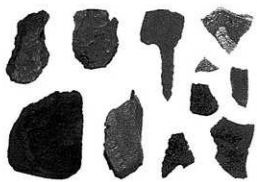


050　有舌尖頭器・石鏃　　縄文草創期
はざみ山遺跡　　(左:W2.5・ℓ7.4)　文献.707
左の有舌尖頭器は、古墳時代～飛鳥時代の包含層から出土。サヌカイト製で、全体に細かな押圧剥離調整が施されている。製作時において、舌部は中心線より若干のずれがあったらしく執拗に調整がなされている。右2点の石鏃は、南北方向にのびる飛鳥時代(飛鳥Ⅱ-2～Ⅲ期)の溝から出土。サヌカイト製の凹基式石鏃である。　(永野)

051



052



053

054

051　石器集中部資料一括　　縄文前期

讃良郡条里遺跡　　(左上:W4.6・L7.3)　文献.623

縄文前期後葉の遺物集中地点のうち、ブロックⅠとされた径4mほどの石器集中部から出土。

いずれもサヌカイト製で、加工途中品や剥片・砕片が多く検出されていることから、石器製作跡と考えられる。一方で、スクレイパーや石鏃などの製品も出土していることから、一部の石器を使用した活動が行われていた可能性も残る。　(永野)

052　石器集中部資料一括　　縄文前期

讃良郡条里遺跡　　(左上:W1.8・L3.5)　文献.623

縄文前期後葉の遺物集中地点のうち、ブロックⅡとされた径2mほどの石器集中部から出土。

その集中部で検出された石器は、原礫面を残す剥片が複数認められる一方で、石核の出土数が少ないことから、素材の多くは剥片の形で搬入された可能性が考えられる。当地における石材の流通と石器製作過程を考察するうえで貴重な情報を与えてくれる。　(永野)

053　石器集中部資料一括　　縄文後期

讃良郡条里遺跡　　(左下:W1.9・L2.9)　文献.763

縄文後期に比定される遺構面において検出された石器集中部から出土。その集中部では、石鏃や石錐、石匙(いしさじ)、石核、剥片、楔形石器、削器などのサヌカイト製石器のほか、磨石や石剣、礫、礫石器、土器の砕片が検出されている。出土したサヌカイト製石器の大多数は未製品や剥片などであるため、当地において石器製作が行われたものと考えられる。　(永野)

054　石匙　　縄文前期

宿久庄西遺跡　　(W4.3・L3.6)　文献.587

E地区の包含層から出土。

サヌカイト製の横型石匙。刃部がやや長く二等辺三角形に近いが、均整のとれた三角形を呈する。このような石匙は、近畿地方では縄文前期の北白川下層式期に多く認められることが知られている。本遺跡では、縄文時代の土器は出土していないため断定はできないが、同時期の所産である可能性が考えられる。(永野)

055

055　石鏃未製品（水晶）　縄文

有池遺跡　（W2.0・L2.9）　文献.838

中世の溝から出土。水晶製の石器は縄文時代などにみられることから、本例も縄文時代に帰属する可能性がある。水晶は硬く、加工は容易ではない。そのような石材をあえて選択したのは、威信財や祭祀具など、特殊な用途を想定したためであろうか。あるいは試験的に用いた結果、やはり不適と判断され、製作途中で放棄されたのであろうか。　（永野）

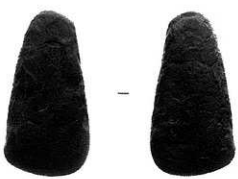
056

056　二次加工剥片（黒曜石）　縄文

私部南遺跡　（W3.0・L3.6）　文献.857

1調査区785土坑から出土。混入品であるため時期は不詳。大阪府下では、黒曜石製の石器は縄文早期末～前期および問後期～晩期の遺跡において、量は少ないが比較的まとまってみられることから、本例も縄文時代に帰属する可能性がある。黒曜石は近畿地方では採取されないため、当時の広域な流通の一端を窺い知ることができる資料として重要である。　（永野）

057



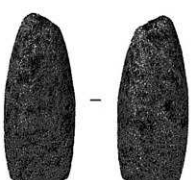
057　磨製石斧　縄文前期

讃良郡条里遺跡　（W5.4・L10.4）　文献.798

7－4 a 層上面（縄文早期後半～前期前半）に帰属する689流路④から出土。

石材は砂岩。刃部に最大幅をもち、また斜め方向の使用痕がみられることから、縦斧としての機能が想定される。横斧優勢から縦斧優勢への転換期における定型化した縦斧として、また表面痕跡から使用法が想定可能な資料として貴重である。　（松本）

058



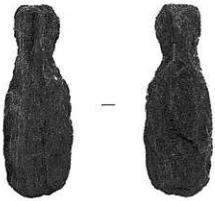
058　磨製石斧　縄文晩期末～弥生前期

弓削ノ庄遺跡　（W4.9・L11.9）　文献.705

1調査区側溝（8層相当）から出土。

石材は玄武岩。よく研磨されており、整った形を呈する。中央に最大幅をもち、刃部幅はそれよりやや狭い。また、使用によると考えられる欠損が刃部にみられる。057と比較して、より形態の洗練されていることが窺える。また、縄文・弥生移行期の石斧資料として重要と考えられる。　（松本）

059



059　磨製ヘラ形石器　縄文中期

讃良郡条里遺跡　(W3.1・L9.0)　文献.798

450 落込み(5－6 a 層)から出土。石材は結晶片岩。ヘラ状を呈する磨製石器であり、刃部と思われる部分の側縁は光沢をおび使用痕と推定される。形状は縦型石匙に似ているが、磨製石器であるため異なる。出土層準からは縄文中期後葉～末の咲畑式と北白川C式の土器が出土しており、帰属時期についてはある程度の時間幅を限定できそうである。　(松本)

060

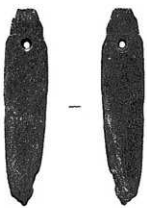
060　石皿　縄文中期

讃良郡条里遺跡　(W38.3・L40.8)　文献.798

337 流路下部から出土。

石材は細粒砂岩。上面には幅4cmを単位とする研磨痕がみられ、研磨痕の内側には線条痕が明瞭に残る部分も認められる。石皿の用途としては植物や顔料など、物質の磨り潰し機能が想定されているが、その詳細や対となる磨石の存在について考えるうえで、使用痕の明瞭に残る資料は貴重である。　(松本)

061



061　垂飾　縄文晩期～弥生前期

久宝寺遺跡　(W1.0・ℓ4.9)　文献.759

7－2 層から出土。

石材は石英片岩。薄く細長い磨製石鏃形の形状をしており、太い方の端部よりやや中央寄りに1点穿孔がある。刃部をもつようにも見えるが脆く実用的ではないため、垂飾と判断される。穿孔をもつことから紐を通してぶら下げ、首飾りや胸飾りとして使用されたのではないかと考えられる。　(松本)

062

062　獣形勾玉　縄文晩期～弥生前期

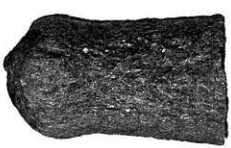
久宝寺遺跡　(W1.5・L3.5)　文献.759

061 同様、7－2 層から出土。石材は砂質ホルンフェルス。半月状の直線部分に3箇所の切り込みを施し、1点の穿孔をもつ。石製勾玉には、縄文時代の系譜を引く縄文系勾玉と古墳時代につながる弥生系勾玉があり、獣形勾玉は前者に属する。獣形勾玉は全国的にみても検出例が少なく、大阪府内での出土例も他に東大阪市鬼虎川遺跡など数例に限られる。　(松本)

063

064

065



066

063　石剣　　縄文後期

讃良郡条里遺跡　　(w2.5・ℓ15.9)　文献.763

1区北端の石器集中部から出土。石材は貫岩(ひつがん)。両端部が欠損しているほか、両端よりやや中央寄りに打痕がみられる。石剣は広義の石棒類に属し、後期に石棒から変形し発達したものである。出土地点は多くの剥片や未製品が出土し、石器製作場の跡ではないかと推定される場所にあたり、石器・石材の流通や加工について考えるうえで重要な資料である。　(松本)

064　石刀　　縄文後期

私部南遺跡　　(W2.3・ℓ16.1)　文献.857

12区の段丘下から出土。石材は片岩。両端部および中央付近に一部欠損がみられるものの、整った形状をしている。刃部と柄部の区別は不明瞭である。石刀の分布は、後期末から晩期の北海道渡島地域と東北地方北部に多く、関東・中部・東海地方にも少数あり、北日本の文化が近畿地方まで伝わったことを示す一つの例として捉えることができる。　(松本)

065　石棒　　縄文晩期か

久宝寺遺跡　　(w5.4・ℓ9.5)　文献.759

第7面07055高まりの盛土から出土。

石材は紅簾石角閃石石英片岩。より下層の遺物を盛土中に巻き上げたものと推測される。端部は片側が欠損しており、反対側の端部に瘤状の作り出しをもつが、この瘤状部分を頭部と呼ぶ。石棒は祭祀に用いられたと推測される遺物であり、本遺跡からは同種の石材を用いた石棒片が他に3点出土している。　(松本)

066　石棒　　縄文晩期

池島・福万寺遺跡　　(w4.0・ℓ26.4)　文献.761

45区14-2b層から出土。

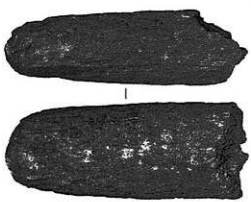
石材はホルンフェルス。両端部に欠損がみられるが、ほぼ完形と思われる小形の石棒である。中央部よりやや端寄りが細くなっており、頭部の作り出しが確認できる。石棒は後期以降に小形化する傾向があり、石棒を用いた祭祀の性質にも変化が想定され、当遺物もそのなかに位置付けられる。　(松本)

067

067　石棒　　縄文晩期末～弥生前期
池島・福万寺遺跡　（W6.5・ℓ35.9）文献.804

229流路底部から出土。石材は点紋片岩。頭部付近はわずかにくびれ、先端は欠損するが丸みをおびていたとみられる。断面形は楕円形を呈する。全体的に遺存状態は良い。本遺跡では石棒７点が出土しているが全て建物跡外からの検出であり、この時期の石棒祭祀が個別のものから集落共同体全員にかかわるものに変化した可能性が想定できるかもしれない。　（松本）

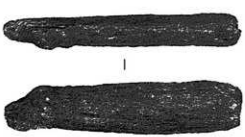
068



068　石棒　　縄文晩期末～弥生前期
池島・福万寺遺跡　（w6.9・ℓ16.7）文献.804

339落込みから出土。石材は絹雲母片岩。断面は円形に近い楕円形を呈し、頭部（遺存端部）は膨らむことなく自然に丸く仕上げていたとみられる。これは有頭石棒に対して無頭石棒と呼ばれる。なお、石棒はしばしば被熱による変形や折損がみられ、完形での出土例は比較的少ない。このことから石棒の使用方法の背景に、火を用いた祭祀の存在が想定される。　（松本）

069



069　石棒　　縄文晩期末～弥生前期
弓削ノ庄遺跡　（W4.4・ℓ19.8）文献.705

１調査区８層から出土。石材は絹雲母片岩。一部が欠損しているものの、２条の凹部によって頭部を表現している。端部の片側は欠損しており、裏面も剥離しているが、本来の形状は断面円形に近かったと考えられる。同様例は府内では大阪市長原遺跡等で出土しているが、本遺跡での石棒の出土数は多く、複数の類型が確認できる点で貴重な資料である。　（松本）

070

070　石棒類　　縄文晩期末～弥生前期
讃良郡条里遺跡　（右上:w3.6・ℓ13.8）文献.830

３-267・268溝および６区８ａ層から出土。

石材は粘板岩が多く、他に結晶片岩、紅簾片岩がある。多くは石棒と推定されるが、一部根拠に乏しく性格の不明なものがある。石棒と推定可能なものには被熱痕跡のみられるものがあり、その背景に火を用いた祭祀の存在が想定されるなど、石棒のもつ性質を考えるうえで重要な資料である。　（松本）

071　サヌカイト集積資料　縄文晩期末～弥生前期
弓削ノ庄遺跡　　（左下：W5.6・L6.3）　文献.705

調査区の北半、1-50溝の南側から出土。径約20cmの範囲にサヌカイトが集中し重なり合っており、剥片および石核が15点検出された。いずれも10cm未満で、剥片製作用ではなくそのまま石器の素材になるものと考えられるが、風化面や原礫面を一部に残すものが多いため素材として良好ではなく、それらが集積されていた背景については今後の検討を要する。　（松本）

072　翡翠原石　　縄文
私部南遺跡　　（W3.0・L11.7）　文献.857

6調査区から出土。原位置を留めず、混入した遺物である。荒割りによって原石からある程度整形されている。翡翠（ひすい）は日本国内では限られた地域でしか産出せず、そのなかでも各地に流通したのは北陸地方の姫川流域産とほぼ特定できる。その原石が本遺跡において出土したということは、石材の広範な流通が行われていたことの一端を示している。　（松本）

073

073　イノシシ牙製装飾品　　縄文晩期
池島・福万寺遺跡　　（W1.9・ℓ8.5）　文献.804

第14-1面339落込みから出土。

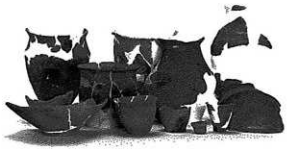
イノシシのオスの右下顎犬歯を用いた装身具と考えられる。基部側が大きく欠損しており、残存部のほぼ中央に径約0.4cmの両面から穿孔した円孔2点、基部側に内面から穿孔した径約0.5cmの円孔2点が残る。外面には黒色物質が塗布されており、呪術的な意味をもつ装身具として用いたと考えられる。　（松本）

074

074　イノシシ牙製装飾品　縄文晩期末～弥生前期
池島・福万寺遺跡　　（w1.8・ℓ11.0）　文献.841

第14-2面から出土。073と同様に素材としてイノシシの牙を用いている。2個一対の穿孔が2箇所に残存しており、中央の孔は径0.38cmで両側からの穿孔、先端の孔は径0.34cmで内側からの穿孔である。また全体に研磨が施されている。073と類似しているが、穿孔の位置が異なっており、外面処理の方法などにも差異がみられる。　（松本）

075

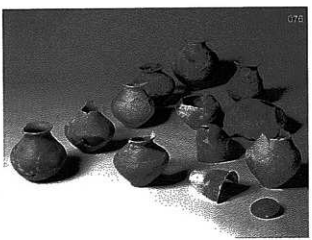


075　弥生土器集合　弥生前期

讃良郡条里遺跡　（左奥：rd19.4・H27.0）　文献.830

本遺跡では、近畿地方で最古相を示す弥生土器群が包含層や流路のほか、建物に伴う遺構などから出土。

壺と甕がそれぞれ全体の約4割を占め、残る2割は鉢や高杯、甕蓋などの器種となる。焼成失敗品などの出土から、集落内での土器生産も窺われ、近畿地方における弥生土器の成立と土器生産を実態的に検討するうえで重要な資料となる。（中尾）



076　弥生土器集合　弥生前期

池内遺跡　（奥：RD16.0・H32.6）　文献.843

水田内の流路に設けられた畦（畔）周辺から、弥生前期中葉の土器群がまとまって出土。

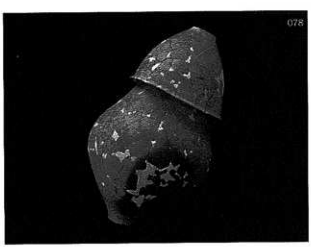
本遺跡では集落と水田が確認されており、初期農耕集落と性格付けられる。集落下位の遺構面からは、これに先行するとみられる小区画水田が確認されており、周辺の水田開発の開始時期がさらに遡ることを示す。（中尾）

077

077　弥生土器集合　弥生前期

瓜生堂遺跡　（左端：RD11.5・H23.2）　文献.631

本遺跡でも池内遺跡と同じく集落と水田が確認され、多くの土器が集落域から出土。3条以上に多条化した沈線をめぐらす甕がみられ、池内遺跡と同様に前期中葉の資料群といえる。本遺跡の南側には、075同様の古い様相をもつ弥生土器が出土した東大阪市若江北遺跡が立地し、当時の河内湖（潟）南岸地域における初期水田開発の展開を検討しうる。（中尾）



078　弥生土器（壺・鉢・土器棺転用）　弥生前期

田井中遺跡　（上：RD38.8・H28.7）　文献.753

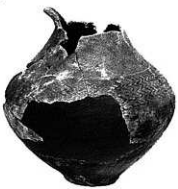
弥生前期の遺構面で検出された長楕円形の土壙から出土。遺構内の片側に寄せて、頸部と低い段を削り出した肩部に各3条の沈線を施した大形の広口壺を棺身として斜めに掘え置き、口縁部に2条の沈線をもつ鉢が被せられていた。過去の調査では80mほど東で方形周溝墓も確認されており、調査地周辺が当該期の墓域であったことを物語っている。（岡本洋）

079

079　弥生土器（壺）　弥生前期
讃良郡条里遺跡　(rd15.0・h26.0)　文献830

建物に隣接する土坑から出土。口縁部、頸部、胴部の各部位が明瞭に区分されており、西日本各地で確認される出現期の弥生土器に特徴的な器形をもつ。各部位の境界には段と沈線がめぐらされ、文様面からも器体の分割性が意識されている。胴部の重弧文は全周せずに部分的な施文に留まり、文様による装飾意識（正面観の存在か）をも考えさせる。　(中尾)

080



080　弥生土器（壺）　弥生前期
池内遺跡　(rd11.8・H23.6)　文献843

南北方向に蛇行して流れる流路に設けられた堰周辺から、当資料と081を含む完形に近い弥生前期土器群が出土。

080・081は口頸部境と頸胴部境に設けた段によって各部位を区画する。当資料は胴部上半をヘラ描きの綾杉文で飾り、黒色物質を塗布している。

(中尾)

081

081　弥生土器（壺）　弥生前期
池内遺跡　(md23.0・h24.7)　文献843

堰周辺から出土。口縁部を欠損するが、体部最大径に比べて器高が高い壺である。胴部上半に文様帯をもつ点で080と共通するが、文様は異なり当資料は重弧文を対向して配置する。本遺跡では、木葉文や斜格子文も含め、多様な文様をもつ壺が確認され、器面に黒色物質を塗布した資料も多い。赤彩の施された壺片もみられ、加飾性の強い資料群を形成している。(中尾)

082

082　弥生土器（壺）　弥生前期
池島・福万寺遺跡　(RD36.4・H54.3)　文献872

幅約2.4mの溝状遺構の最上層から出土。溝の底には土坑状の掘り込みが連続して確認され、内部から木製農具の未製品が検出された。製作過程にある木製品を水漬けするための施設と判断される。

大形の壺で、頸部には削り出しによる段をもつ。弥生前期の大形壺には、当資料のように頸部のすぼまりが弱いものが多い。　(中尾)

083

083　弥生土器（壺）　弥生前期
私部南遺跡　（RD14.8・H23.8）　文献.865

弥生前期中頃～後半の遺物を含む流路の底から出土。

頸部と胴部最大径付近に２条の突帯を貼り付ける。胴部の突帯上には刻目を入れる。口縁には２個一対の穿孔をもつことから、もとは蓋が付属したと想定されるが付近からは検出されていない。

（中尾）

084

084　弥生土器（壺）　弥生前期
山賀遺跡　（BD6.5・h22.8）　文献.788

平面不定形の浅い土坑から出土。

083と同じく、頸部と胴部最大径付近に２条の貼り付け突帯をもつ。本遺跡と083を出土した交野市私部南遺跡とは、当時の河内湖を間に挟んで直線距離にして約18km離れている。両資料における類似性は、河内湖を介在した弥生集団の緊密な交流の一端を想起させる。

（中尾）

085

085　弥生土器（壺）　弥生前期
私部南遺跡　（MD22.0・h21.8）　文献.865

縄文晩期～弥生後期の遺物を含む流路から出土。

頸部から胴部にかけて５条１単位の刻目突帯を３単位貼り付けており、突帯の多条化が極まった加飾性の強い壺である。口縁内部の２条の刻目突帯は水平に全周せず、一部分が注ぎ口を作るように斜め上方に向かって貼り付けられる。これが意匠であるのか、注口としての機能を意図したものかは不明である。（中尾）

086

086　弥生土器（小形壺）　弥生前期
山賀遺跡　（BD7.2・h10.4）　文献.788

弥生前期土器を主体とする包含層から出土。

小形の壺で胴部上半に粘土紐を貼り付け、両蕨手（ろびて）（双頭渦文）のような文様を表現する。線の端を早蕨のように巻き込んだ蕨手文は、土器のほかにも銅鐸や刀剣、鏡などの金属器や、装飾古墳の壁画などにも用いられ、幅広い範囲と時期にみられる文様であるが、起源や意味は判っていない。

（中尾）

087

087　弥生土器（甕）　弥生前期
讃良郡条里遺跡　（左:rd19.4, 右:RD19.8）　文献.830

建物に隣接する土坑から出土。右は弥生前期に一般的な形態をもつ甕（088～090に近似）であり、本遺跡出土の甕の主体を占める。一方で左の甕は、胴部上方に刻目を施した段をもち、そこから口縁に向かって屈曲する形態を呈する。成形技法や胎土は他の弥生土器と同様だが、印象的には2条突帯の縄文晩期深鉢を想起させる。底部には焼成後に1孔を穿つ。（中尾）

088

088　弥生土器（甕）　弥生前期
弓削ノ庄遺跡　（rd21.5・H25.5）　文献.705

弥生前期の遺構検出面上から出土。当資料を含め出現期の弥生甕は、砲弾形の器形から短く外反する口縁部をもち、頸部に少条沈線か段をめぐらす程度の簡素な文様をもつものが主体である。縄文の突帯文深鉢とこれらの弥生甕との間には、型式的な連続性を見出す資料を欠き、煮炊具として他地域で成立した弥生甕が河内平野に伝播した状況を端的に示す。（中尾）

089

089　弥生土器（甕）　弥生前期
瓜生堂遺跡　（RD20.6・H20.2）　文献.631

平面長方形をなす土坑から出土。同遺構からは弥生前期土器壺・甕・鉢・蓋などが検出されている。砲弾形の器形から外反する短い口縁の端部には刻目を入れ、頸部に沈線3条をめぐらす。器表には煤付着があり、それを分析試料として行った炭素年代測定では2440±40（^{14}C, B.P.）の測定結果が出され、近畿弥生開始期の実年代論に貴重なデータを提供した。（中尾）

090

090　弥生土器（甕・焼成失敗品）　弥生前期
讃良郡条里遺跡　（rd22.0・h21.8）　文献.830

自然流路と考えられる溝状遺構の最上層から出土。

胴部のなかほどに、円形の剥離破損痕をもつ。破損面も他部位の器表面と同様な状態で被熱しており、土器焼成時に破損したものと考えられる。本遺跡では、当資料のほかにも多様な焼成失敗品が確認されており、初期弥生集落内での弥生土器製作が想定されている。（中尾）

091

091　弥生土器（高杯）　弥生前期
池島・福万寺遺跡　（RD15.4・H15.0）　文献.804

土壙墓、木棺墓などからなる墓域の土坑から出土。

杯部内外面と脚部外面に丁寧なミガキ調整を施し、杯・脚部の境には断面三角形の突帯を貼り付ける。周辺遺構からは縄文晩期の突帯文土器の出土が主体的だが細片が多い。近接して検出された土器棺墓には当資料と同時期とみられる弥生前期中葉の壺が使用されており、墓域の形成年代を示す可能性もあろう。（中尾）

092

092　弥生土器（高杯・鉢）　弥生前期
山賀遺跡　（左：RD19.5, 右：H7.5）　文献.788

左は、平面円形を呈し弥生前期遺物を含む土坑の中層から出土。また、土坑上層からは260垂飾形木製品が検出されている。器高の約2／3を占める深い杯部をもち、口縁端部には沈線が1条めぐる。

右は、弥生中期前葉までの遺物を含む溝から出土。小形の鉢で、胴部を円形刺突文と沈線で飾る。高台状になった底部には2孔一対の穿孔があく。　（中尾）

093

093　弥生土器（鉢形容器）縄文晩期末～弥生前期
讃良郡条里遺跡　（h2.2・w8.8）　文献.830

自然流路から出土。流路からは縄文晩期の突帯文土器も多く出土している。おそらく鉢形をなす土器の底部で、平面小判状を呈する。側面にはヘラ状工具によって弧状の文様などが描かれているようだが、欠損部位が大きく詳細は不明。その形状や底部側面への施文など特異な土器であり、木製容器なども含めて類例の抽出が必要であろう。　（中尾）

094

094　弥生土器（接合部剥離資料）　弥生前期
讃良郡条里遺跡　（上：w7.4, 下：w7.0）　文献.830

粘土の積み上げ単位の上下で剥離破損した土器片で、本遺跡各所から約50点出土。ほぼ全てが壺や鉢の破片とみられ、甕の破片はない。西日本の弥生前期土器は、器体外面へ接合面が傾斜する外傾接合や、幅広の積み上げ単位などを共通した特徴としてもつ。当資料は、弥生土器の成形技法を実態的に検討するうえで重要であるが、本遺跡以外での類例に乏しい。（中尾）

095

095　弥生土器集合　　弥生前期～中期

山賀遺跡　　(奥中:RD21.8・H49.6)　文献.788

弥生前期～中期の大溝から出土。中期土器では、「生駒西麓型」の壺、受口状口縁をもつ無文の壺、等々が検出されている。生駒西麓型の土器は、河内地域社会の共通規範と集団意識を標榜する役割をはたしていたと考えられており、本例にもこのような共通規範の表出が想定できる。また大溝からは、213碧玉製管玉、215勾玉状石製品も確認されている。　(佐藤)

096

096　弥生土器一括　　弥生中期

船橋遺跡　　(左前:RD14.6・H17.8)　文献.675

弥生中期前葉の不整楕円形の土坑から一括で出土。

細頸壺3点と、甕1点である。細頸壺2点は、体部上半に櫛描直線文、波状文が施されており、細頸壺1点は無文である。いずれも口縁部を南方向に向けて並べた状態で検出されている。遺構内の中層が水溜まりのような状態で堆積した後に、意図的に置かれたものと思われる。　(佐藤)

097

097　弥生土器(壺)　　弥生中期

新上小阪遺跡　　(左:h28.6, 右:H29.7)　文献.601

上面に大畦畔と思われる遺構のある、調査区東半中央南端の土坑から出土。ほぼ完形の広口長頸壺2点で、ともに類似した形態である。両壺は、口縁部を北東方向に向け、ほぼ平行に並んだ状態で検出された。ベンガラを塗布した痕跡が残存している点、意図的な破砕や穿孔がみられる点、出土状況から水田祭祀に伴う祭祀遺物であると考えられる。　(佐藤)

098

098　弥生土器(摂津型水差し形)　　弥生中期

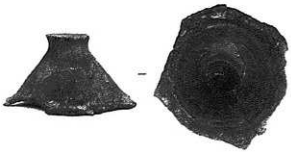
私部南遺跡　　(rd7.0・H22.6)　文献.857

弥生中期初頭の底面の起伏が著しく、極めて浅い不整形土坑から出土。甕やサヌカイトの剥片が共伴する。

中期中葉以降の水差し形土器に比べ、把手がなく、かつて「瓢形土器」と呼ばれていた器種の系譜をひく形態を有する。これらの要素は、中期初頭の摂津型水差し形土器の特徴である。

(佐藤)

099



099　弥生土器（甕）　弥生中期

新上小阪遺跡　（rd6.1・H10.5）　文献.601

弥生中期前葉の溝から出土。甕用の甕である。内外面ともミガキ調整だが、炭化物の付着が著しい。内面には、2条の環状に一周する炭化物が3㎜ほどの厚さで残存している。口径の違う甕で複数回の使用がなされた結果と考えられ、甕甕と甕のセット関係を考えるうえで興味深い。土器割れ口にも炭化物が付着することから、欠損後も使用され続けたと思われる。（佐藤）

100

100　弥生土器（脚付鉢）　弥生中期

瓜生堂遺跡　（rd24.8・h18.5）　文献.875

弥生中期中葉～後葉の土器棺墓と思われる土壙から出土。口縁部に2個一対の焼成前穿孔が2箇所みられ、蓋があったと思われる。この特徴から無頸壺かとも考えられる。口縁端部は内折し、口縁付近の外面に凹線文6条、内外面にはミガキ調整が施される。胎土は生駒山西麓産だが、器形は播磨地域の特徴を有する。これは、土器製作技術の伝播等を示す。（佐藤）

101

101　方形周溝墓供獻土器群　弥生中期

新上小阪遺跡　（左端：RD9.3・H22.4）　文献.859

弥生中期後葉の方形周溝墓から出土。

無頸壺、把手付鉢、台付鉢、水平口縁の高杯、甕、水差し形、摂津産の広口壺などである。

ヨコミガキの生駒山西麓産胎土の土器とタテミガキの非生駒山西麓産胎土の土器が共伴して出土している。多くの土器が、体部下半に穿孔をもち、供獻品と考えられる。

このうち方形周溝墓の周溝の底からは、甕が1点正位で据えられたような状態で出土した。また、南西隅の盛土裾部からは、流水文を施した壺と円形浮文を付した壺の2点が出土している。正位で出土した甕は、外面のほぼ全面に厚く煤が付着し、内面下部にもこびり付いた焦げが認められる。流水文を施した壺は、流水文の正確な割り付けができておらず、緻密さに欠けるやや雑な印象を受ける。

（佐藤）

102

102　方形周溝墓供献土器群　　弥生中期
瓜生堂遺跡　　(左:RD21.2・H34.8)　文献.631

99-1区と99-3区で検出された、弥生中期後葉の方形周溝墓の周溝ほかから出土。左右両端の個体は99-1区における検出である。

生駒山西麓産の広口壺、広口長頸壺、無頸壺、同壺蓋、高杯、非生駒山西麓産の高杯、大形甕、把手・台付鉢、水差し形の各器種がみられる。全て周溝墓の供献土器であったと考えてよい。　　(佐藤)

103

103　方形周溝墓供献土器群　　弥生中期
瓜生堂遺跡　　(左:RD22.0・H41.8)　文献.631

99-5区で検出された、弥生中期中葉～後葉に埋没した方形周溝墓の周溝から出土。左3点は北東側周溝、右1点は北西側周溝での検出である。生駒山西麓産の広口壺2点、水差し形、高杯である。壺1点には穿孔がみられる。右端の高杯は、脚部に三角形または矢羽根状の透かし孔と鋸歯文があり、播磨地域の特徴を示す。これらも供献土器と考えてよい。　　(佐藤)

104

104　方形周溝墓供献土器群　　弥生中期
瓜生堂遺跡　　(最前:RD14.4・H12.6)　文献.631

99-5区で検出された、弥生中期中葉～後葉の方形周溝墓の周溝から出土。103が供献された墓の北東に位置する周溝墓に伴うものである。

生駒山西麓産・非生駒山西麓産の土器ともに各器種のものがみられ、焼成後穿孔をもつ個体も多い。穿孔が施される点、方形周溝墓の周溝から出土した点などから、供献土器と考えられる。　　(佐藤)

105

105　方形周溝墓供献土器群　　弥生中期
瓜生堂遺跡　　(右:RD24.8・H14.6)　文献.631

99-5区で検出された、弥生中期中葉～後葉の方形周溝墓の周溝から出土。103が供献された墓の北西に位置する周溝墓に伴うものである。生駒山西麓産の広口長頸壺2点、非生駒山西麓産の広口壺と鉢である。広口長頸壺1点と鉢は焼成後穿孔を有する。広口壺は摂津地域からの搬入品の可能性がある。他に甕や高杯なども伴出している。供献土器と考えられる。(佐藤)

106

106　方形周溝墓供献土器群　弥生中期

瓜生堂遺跡　（左:RD19.0・H33.2）文献.875

10-1-6区で検出された、弥生中期後葉の方形周溝墓の盛土裾付近から出土。盛土から崩落した堆積層からの検出である。広口壺4点で、全て底部付近に焼成後の穿孔がなされている。供献品と考えられる。類似関連するデータとしては、大阪市加美遺跡において、盛土上から焼成後穿孔を有する土器の出土事例が報告されている。（佐藤）

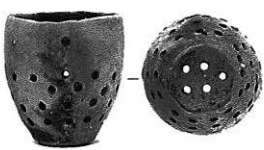
107

107　方形周溝墓供献土器ほか（壺）　弥生中期

御羅橋遺跡　（左:H37.4, 中:H30.0, 右:H49.8）文献.708

弥生中期前葉の方形周溝墓から、表面が黒く、広い範囲に黒斑がみられ、分割ミガキにばらつきがみられる日明山型の壺1点（左）、その周辺の墓と思われる土壙から壺2点（中・右）が出土。供献品の証左となる穿孔が後者の壺2点にみられる。近畿地方で、同様の墓壙からの穿孔土器の出土例は八尾市恩智遺跡のみであり貴重例といえる。（佐藤）

108

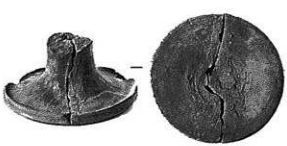


108　多孔土器　弥生中期

鬼虎川遺跡　（RD5.4・H6.5）文献.879

調査区東端の第13-3面から出土。検出地点の周辺では炭化物が一定量確認され、焼けた木片、動物遺体の破片、土器、石器も多く出土した。ほぼ完存品で、口縁部付近、体部、底部に数多くの小孔が焼成前に施されている。同じ調査では他に、本例よりややサイズの大きい類似土器が出土しており、その個体の内面には灰白色の付着物がほぼ全面に残っている。（佐藤）

109



109　補修土器（高杯）　弥生中期

鬼虎川遺跡　（BD14.0・h7.3）文献.879

弥生中期前葉の溝から出土。同遺構では、鉢、壺、甕、土器転用円板、石剣、尖頭器、石鏃等が共伴している。生駒山西麓産の高杯脚部である。土器製作時において、乾燥段階に二つに割れてしまった脚部に、必ずしも丁寧な細工とはいえないものの、粘土で厚く盛り上げて補修したうえで焼成をしている。極めて珍しい資料であろう。（佐藤）

110

110　弥生土器一括　　弥生後期

瓜生堂遺跡　　（右：RD17.6・H21.6）　文献.631

弥生後期前半の集石遺構に共伴する土器集中部から出土。掲載資料以外にも多数の個体がある。それらの土器には広口壺、長頸壺、鉢、高杯ほか各種があり、いずれの器種も生駒山西麓産が認められる。同じ調査区の東半部における土器群と一連のものと考えられるが、集石遺構や土器群の形成された背景などその具体的内容に関しては判然としない。　（柴田）

111

111　弥生土器（広口壺）　　弥生後期

久宝寺遺跡　　（RD17.6・h26.2）　文献.759

弥生後期の落込みから出土。口縁端部外面に円形浮文、口縁端部内面と肩部に竹管によるS字状の連続渦文を施す。また、底部を欠損させており、実用的ではないことや、同落込みからはミニチュアの壺・鉢も出土していることから、何らかの祭祀目的で使用された可能性が高い。なお、微化石分析を行った結果、当遺構面における水田耕作の存在が示唆された。　（柴田）

112

112　弥生土器（壺）　　弥生後期

八尾南遺跡　　（左：w11.0・T0.8）　文献.797

弥生後期後半の竪穴建物付近の流路から出土。

大形壺の肩部の破片で、外面にヘラミガキ、内面には指オサエ痕を残す。竹管文、列点文、櫛描直線文のほか、二重竹管文をヘラ描きの弧文で連続させる文様などバリエーションが豊富である。加飾壺で二重口縁になると思われることから祭祀用の土器と考えられる。生駒山西麓産の土器である。　（柴田）

113

113　弥生土器（籠目痕跡壺）　　弥生後期

瓜生堂遺跡　　（rd14.8・H25.0）　文献.631

弥生後期前半の包含層から出土。体部外面には、最大幅約1.0cmの、斜格子状に編んだ籠目の痕跡が観察される。籠目痕の重なりは、右上がりが下に、左上がりが上に認められる。同層には完形復原できる鉢、高杯、甕が多く含まれ、散在的ながら土器群として把握できる。なお、それらは110で記した本遺跡の集石遺構が終息した後に形成されたものである。　（柴田）

114

114　弥生土器（細頸壺）　弥生後期
池島・福万寺遺跡　（RD8.4・H22.1）　文献.828

弥生後期の微高地上の流路から出土。ほぼ完形で摩滅も少なく好資料である。扁平な体部からゆるやかに頸部へ移行する細頸壺で、底部は突出した平底である。外面全体にヘラミガキが丁寧に施され、口縁部直下には凹線文を２条めぐらせることから、後期前半に位置付けられる。生駒山西麓産の胎土である。同流路の土器には他に完形復原できるものが多い。　（柴田）

115

115　弥生土器（長頸壺）　弥生後期
瓜生堂遺跡　（RD9.5・H24.5）　文献.631

弥生後期の集石遺構関係層から出土。長頸壺で、体部下半部の内面はヘラケズリ、外面にはヘラケズリ後にナデ調整がみられる。頸部には右下から左上方向の刻目状文様がみられ、このような体部形態や文様の特徴から在地産でない可能性が高い。共伴した他の土器には広口壺、高杯、甕などがあり、四国・讃岐産（系）土器と考えられる個体も含まれる。　（柴田）

116

116　弥生土器（長頸壺）　弥生後期
山賀遺跡　（md12.9・h10.8）　文献.788

弥生後期の包含層から出土。小形化した長頸壺と考えられる。外面はハケメ調整で、ヨコナデによって口縁部へ続く部位の屈曲度を強くする。体部上半の内面には黒色の付着物が観察され、光沢や皺から漆であると判断される。外面ではなく内面に漆がみられることで、当資料が漆を保存する容器であった可能性が示唆され珍しい資料である。　（柴田）

117

117　弥生土器（壺）　弥生後期～古墳初頭
下池田遺跡　（bd19.0・h55.8）　文献.835

弥生後期～庄内式期前半の遺物を多く含む溝から出土。当該時期には、本例のように大形で底部が厚いものは少ない。内・外面とも剥離や摩滅が著しいが、外面の頸・体部にヘラ描き（線刻）と思われる痕跡がみられる。いずれも先端の細い工具で、横方向に複数の線を描き、そののち縦方向に１本の線を加えている。絵画土器の可能性もあるが画題は不明である。（柴田）

118

118　弥生土器（脚付壺）　弥生後期
勝部遺跡　(bd17.0・h19.7)　文献.625

弥生後期～古墳時代初頭の溝から出土。ほぼ完形に近く、球形体部の上方にのびる頸部と、円筒形の脚柱部から裾部が低く大きく開く台部が付く。体部と脚柱部の接合部には円盤充填が行われ、当該時期には珍しい。脚裾部には鋭い凹線がめぐるなど、他地域の影響を受けたか外来系土器の可能性が高い。同溝の他の出土土器にも外来系の土器が散見される。　(柴田)

119

119　弥生土器（脚付細頸壺）　弥生後期
下池田遺跡　(RD6.5・h31.3)　文献.835

弥生後期～庄内式期前半の遺物を多く含む溝から出土。外面は口縁部以下が丁寧なタテミガキ。内面は、頸部はナデで一部に接合痕が残り、脚柱部はナデでシボリ目がみられる。脚部の形態は後期に通常みられる高杯と同様であるが、体部は横方向に強く張り、頸部は直立し、口縁がゆるやかに外反するなどの特徴から紀伊Ⅴ-4様式に相当すると考えられる。　(柴田)

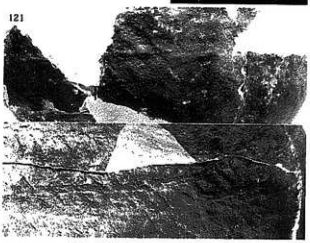
120

120　斜格子目タタキの甕　弥生後期
八尾南遺跡　(RD18.2・H25.8)　文献.797

弥生後期の竪穴建物に伴う外周土坑から出土。

生駒山西麓産でほぼ完形である。口縁部は短く外反し受口状を呈し、肩部に焼成後の穿孔がある。体部外面に斜格子目タタキがみられる。この種のタタキは通常のタタキの様相からは逸脱するが、作りは非常に丁寧である。八尾市亀井遺跡に類例があるものの出土数は少ない。　(柴田)

121



121　斜格子目タタキの甕　弥生後期
八尾南遺跡　(上:h17.8, 下:H24.0)　文献.797

弥生後期の流路上層から出土。同遺構検出の他の土器と様相が異なり、この2個体の体部外面の斜格子目タタキについては特筆される。タタキのちナデ調整されるが、わずかに残るタタキ痕は上記の120資料よりも格子目が大きい。体部内面には上半に指オサエ痕、下半にハケメ調整が施され、2分割成形がみられる。外面の体部上半には煤が付着する。　(柴田)

122

122　弥生土器（台付甕）　弥生後期

新上小阪遺跡　（RD19.1・H30.2）　文献.791

竪穴建物をめぐる溝から出土。体部外面はタタキで、下部は縦方向に板ナデを施す。体部内面には板ナデの後に下半部に輪状状にミガキが施され、2分割の成形がみられる。なお、当該期の甕の内面にミガキを施す例は少ない。脚台部は端部を内側に押しつぶし明瞭な面を有し、脚台部との接合は円盤充填である。同溝では他に近江・山城地域系土器が出土している。（柴田）

123

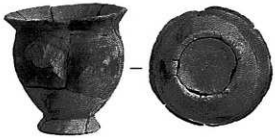
123　弥生土器（台付甕）　弥生後期

久宝寺遺跡　（RD15.6・H21.6）　文献.759

弥生後期末～古墳時代初頭の包含層から出土。

口縁が受口状を呈した甕を脚台部の上に載せた台付甕である。体部外面は丁寧なハケメののち下位をナデ調整し、内面の体部と脚部には全体にナデが確認できる。同層の他の出土品には直口壺、広口壺、鉢などほぼ完形なものが多く、氾濫により埋没する直前状況を示す遺物と考えられる。（柴田）

124



124　弥生土器（甕）　弥生中期末～後期

若江北遺跡　（RD13.8・H14.4）　文献.863

調査区北東部のブロック土を多く含む盛土から出土。複数個体の土器片が重なっている状態で確認された。当資料は不安定な底部に粘土紐を足し、新たに裾の拡がった底部を作っている。体部内面はケズリ調整がみられるが、体部外面にはタタキがみられないことから、中期末から後期初頭にかけての時期に相当すると考えられる。（柴田）

125

125　弥生土器（高杯）　弥生後期

新上小阪遺跡　（RD22.7・H14.5）　文献.791

竪穴建物の周囲の溝から出土。周辺では土器が多く検出されたが、全体復原できる唯一の個体である。口縁部は明瞭な稜をなして外反し、杯部外面には櫛歯状の波状文をミガキで施す。脚部の裾端面には刻目を加え、3方に透かし孔を配置する。同遺構からは、頸部に突帯を貼り付け、刻目を施した壺が確認されることから、本例も後期後半に属すると考えられる。（柴田）

126

126　ハ字形タタキの鉢　弥生後期

八尾南遺跡　(RD14.0・H10.0)　文献.797

弥生後期の竪穴建物に伴う外周土坑から出土。

完形で、底部中央に焼成後の内・外面からの穿孔がある。特筆すべきは体部外面に横位の連続「ハ」字形のタタキを施し、内面には全体にハケメを施す。八尾市亀井遺跡においても類例があり、本遺跡を含めた、河内地域におけるタタキ技法の多様性を窺い知る重要な資料である。　(柴田)

127

127　斜格子目タタキの鉢　弥生後期

八尾南遺跡　(RD19.5・H17.1)　文献.797

弥生後期の流路下部から出土。約4/5が残存する。直口のやや大形品で、体部外面に斜格子目タタキののちナデ、内面にハケメを施す。120・121同様、当資料においても斜格子目タタキが特筆される。本遺跡から出土した壺に格子目タタキが施されているものがあるが、それよりも目が細かく、器種によって使い分けがみられたのかもしれない。　(柴田)

128

128　弥生土器（片口鉢）　弥生後期

新上小阪遺跡　(RD35.1・H23.5)　文献.791

弥生後期の建物に伴う外周溝から出土。同溝は調査区において最も多くの各種土器が検出された。大きく外反する口縁部の端部は面を有する。口縁部の外面はナデ、内面は横方向にミガキが施される。体部外面の上半部は横方向、下半部は斜め方向に丁寧なミガキを施す。体部内面の上半部は横方向にミガキ、下半部は放射状に暗文風のミガキを施す。　(柴田)

129

129　弥生土器（台付鉢）　弥生後期

新上小阪遺跡　(rd16.7・H11.7)　文献.791

128と同じ溝から出土。口縁端部は肥厚して面を有し、口縁は屈曲が強く内面に明瞭な稜をもつ。脚台部は柱部が短く屈曲して裾部が開く。脚台部の外面はミガキ、内面はナデ・板ナデで工具痕が残り、円形の透かし孔を3方に穿つ。本遺跡内において、台付鉢には外反口縁鉢と椀形鉢が安定した器種として同等量みられるが、遺構により出土傾向に差がある。　(柴田)

130

130　弥生土器（台付鉢）　弥生後期

瓜生堂遺跡　（RD30.8・H19.2）　文献.875

土器溜（ろ）りから出土。鉢部は、上方に立ち上がる口縁をもち、口縁端部は断面方形である。口縁部外面に１単位７～８本で縦方向の棒状浮文を７箇所貼り付ける。脚台部は太く中空に作られ、縦四つを１列とした円形の透かし孔を７列穿孔する。棒状浮文と透かし孔を均等に配することで、シンメトリカルな外観を示す。胎土は生駒山西麓産である。（後川）

131

131　弥生土器（器台）　弥生後期

大和川今池遺跡　（md15.0・h20.8）　文献.837

土坑から出土。

口縁部と下端部は欠損する。筒部に刺突文、沈線文、綾杉刺突文を配する。上下２段に透かし孔と呼ばれる円形の孔を穿つ。綾杉文は、工具の先端を土器の表面に押し付けることで施文されている。連続的に施文された文様の雰囲気が綾杉のシルエットに似ていることから、綾杉文と呼ばれている。（後川）

132

132　異形土器　弥生後期～古墳初頭

下池田遺跡　（bd4.1・h5.2）　文献.835

溝から出土。

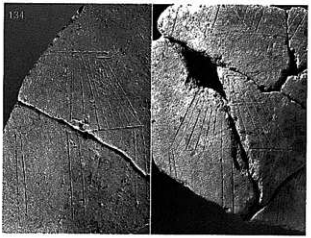
ミニチュア土器の範疇に含まれる。類似する形状のものがなく、異形土器と呼ばざるをえないものである。口縁部は欠損しており、全体の形状は不明である。胴部中央が突出してめぐり、側面からは突帯のように見える。ナデ調整を中心にして器形を整えており、内面上部には、シボリ目が認められる。（後川）

133

133　皮袋形土器　弥生後期

八尾南遺跡　（RD6.0・H8.0）　文献.797

流路から出土。完形品である。獣類の内臓を利用した皮袋を想起させることが、「皮袋形」の由来である。底部側面には、焼成前の穿孔が１箇所穿たれる。体部は指ナデ、口縁部は指オサエによって成形する。具体的な使用方法は判っていないが、本資料には、穿孔が認められることから、液体などを容器に注ぐ用途も想定できる。（後川）



134

134　絵画土器（建物）　弥生中期

男里遺跡　(rd11.5・h10.8)　文献.674

集落北側の弥生中期末の大溝から出土。

水差し形か台付壺の口縁部の可能性がある。絵画は幅0.2㎜程度の鋭利な工具で線刻され、頂角を下方に向けた鋸歯文の下部に、屋根飾りを付ける高床建物を３棟以上描く。建物は土器絵画の意匠として多く描かれるが、屋根表現が通有の斜格子状ではない点や全容が把握できるという点で貴重な事例である。　(正岡)

135

136

135　絵画土器（建物）　弥生中期

下池田遺跡　(w3.7・t0.8)　文献.835

弥生後期末～古墳前期初頭の溝上部の落込みから出土。壺の体部片の可能性があるが、細片であることと器表面の摩滅のため、詳細は不明である。外面には縦→横→右下がり→左下がりの順に線が刻まれる。下端縦線の脇に右下がりの線が描かれているほかは、斜格子状の屋根表現をとる通有の建物絵画が想定できる。伴出品との関係から中期後葉の所産か。　(正岡)

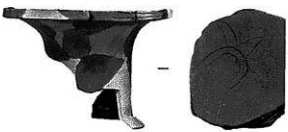
137

136　絵画土器（龍）　弥生後期か

下池田遺跡　(w8.0・t0.6)　文献.835

弥生後期後半の溝付近の側溝から出土。

広口壺の肩部と考えられ、頸部の下方に、２条の沈線からなる直線と弧状表現が施される。弥生時代の土器絵画において弧状の表現を伴うものには、鹿の体部や龍があるが、脚の表現がないこと、本遺跡の類例に龍を描いたとされる土器があることなどから、本例も龍ないしはその記号化したものと考えられる。(正岡)

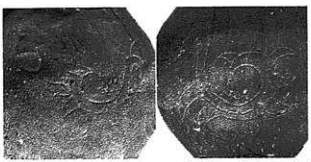


137　絵画土器（龍）　弥生後期

亀田遺跡　(rd25.6・h18.4)　文献.705

弥生後期の遺物を多数含む包含層（高まり）から出土。部分的に欠損しているものの、大形の広口壺の頸部中位に、２条の沈線の組み合わせからなる線刻絵画が施される。左下部分を欠くため詳細は不明だが、細い胴部状の表現に向きを違えた弧状の表現が取り付くことから、胴部に鰭を付した龍ないしは龍の記号化した意匠の可能性が高い。　(正岡)

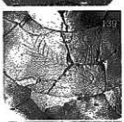
138

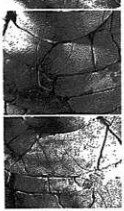


138　絵画土器（龍）　弥生後期

八尾南遺跡　(MD14.8・h15.0)　文献.797

弥生後期前半の竪穴建物の排水溝から出土。外面を下に向け破片の状態で検出された。生駒山西麓産胎土の長頸壺で、体部に龍を意匠とする線刻絵画を施す。絵画は、大きく湾曲した胴部表現と向きを違えて配置される鰭表現の組み合わせから構成される。胴部の一端は円が表現される。龍の意匠によく現れる「玉」を示した可能性があり特筆される。一般的に弥生土器絵画は、精緻な表現から次第に簡略化が進行し記号化すると説かれており、本例は他画題にやや遅れて登場する龍の絵画土器の古い段階のものとみられる。（正岡）





139　絵画土器（龍か）　弥生後期

八尾南遺跡　(MD17.2・h20.0)　文献.797

弥生後期前半の集落を二分する流路付近から出土。

口縁部上半を欠く長頸壺で、138とは異なり精良な白色胎土が用いられている。頸部直下から体部中位にかけて線刻絵画が施される。絵画は、大きく2ないし3面の単位に分割して施され、いずれも下位に向けて頂角をもつ弧状表現の組み合わせからなる。うち1面については、平行する沈線のなかを2分して綾杉状の表現で充填して、これが中途で2ないし3又に分岐する。138のように明らかに龍を表現したものと断定できないが、これを俯瞰すると頸部を基点として湾曲する胴部に取り付く鰭とみることもできる。　（正岡）

140　絵画土器　弥生後期～古墳初頭

八尾南遺跡　(MD27.0・h20.8)　文献.797

弥生後期後半～古墳前期初頭の土器を多く含む溝から出土。底部と口縁部を欠く広口壺で、体部上半に全周する線刻絵画がある。絵画は、単位ごとに空間が設けられ4面に分割されたものと考えられる。線刻は、幅1㎜以下の鋭利な工具で施され、138等の弥生後期前半例が幅2㎜程度である点と明らかに異なる。線刻の表現自体は本数も多く精緻だが、各意匠は抽象化が進んでおり画題の詳細は不明である。下方に凸の弧状表現が多い部分は船、逆L字状の表現が組み合う部分は建物等の表現が抽象化したものであろうか。（正岡）

141

141　絵画土器（弧帯文）　弥生後期

久宝寺遺跡　(RD13.9・H30.9)　文献.759

弥生後期後半の水田を覆う水成堆積物から出土。

完形の広口壺の肩部に３条一組の弧帯文が施される。弧帯文は、組帯状の「単単位文」と束端をもつ「バチ形」文様部から構成される。バチ形表現は、岡山県[illegible]福塚墳丘墓の「弧帯石」を初現とする文様構成が定型化したものとの指摘があり、本例は弧帯文の展開を考えるうえで極めて重要な位置を占める。　(正岡)

142

142　絵画土器　弥生後期

八尾南遺跡　(h3.8・w9.0)　文献.797

弥生後期前半の井戸から出土。短く突出したつまみ部に内湾する体部をもつ壺壺で、内面に線刻絵画が施される。絵画は、２条の沈線の組み合わせによって、中央部に配される円とその周囲の弧状表現の集合から構成される。龍を意匠とした可能性があるが、中央部の円の表現が138などの典型例と大きく異なるため、別のものを考えるべきかもしれない。　(正岡)

143

143　絵画土器（魚）　弥生後期

久宝寺遺跡　(RD11.2・h14.9)　文献.759

弥生後期前半の高まり上から出土。

体部下半を欠く広口壺の頸部に、竹管文とその直下に線刻による絵画表現が全周して配置される。絵画意匠としては魚が描かれており、レンズ状の体部に背鰭、胸鰭、腹鰭が表現され、マスを表現した可能性が指摘されている。弥生後期前半の資料としては、具象表現をとる事例として重要である。　(正岡)

144

144　無文土器系土器　弥生中期

三宅西遺跡（上:w5.6, 下左:w4.8, 下右:w5.4）文献.832

上・下右は弥生前期～中期の堆積層、下左は流路から出土。無文の鉢で、上・下左は口縁部外側に粘土帯を貼り付け、端部を折り曲げる。下右は口縁端部を短く折る。上・下左の胎土は生駒山西麓産である。在地もしくは近接地産ではあるが、口縁部の形態・技法的特徴に朝鮮半島南部の無文土器との共通点や関連性がみられるため、無文土器系土器と呼ばれる。　(福佐)

145

145　外来系高杯　弥生後期

八尾南遺跡　(RD16.4・H11.4)　文献.797

土坑から弥生後期中葉の直口壺、長頸壺、甕と共伴して出土。杯部は皿状で、杯部内面の口縁端部から離れた箇所に粘土帯を一周貼り付け、立ち上がりをもたせる異形の高杯である。このような特徴をもつ高杯は、山城地域に、杯部内面に粘土帯を貼り付けることで二重構造を模すものがみられ、その影響を受けた可能性も考えられるが判然としない。　(福佐)

146

146　北近畿系器台　弥生後期

八尾南遺跡　(rd16.8・H14.8)　文献.797

溝から出土。北近畿地域の影響がみられる器台である。形状は、筒状の脚部から器受部と裾部へと上下に大きく開き、器受部端部を上方につまみ上げる。調整は外面がヘラミガキ、内面はハケメである。弥生後期末～庄内式期前半は、北近畿に近畿南西部から新たな墓制や土器が流入することが明らかにされており、この器台もまた地域間交流の一端を示している。(福佐)

147

147　瀬戸内産器台　弥生後期

勝部遺跡　(rd26.4・h15.1)　文献.625

土坑から出土。吉備など中部瀬戸内地域からの搬入品と考えられる。特徴として、口縁端部を上下に拡張し、外面に鋸歯文を施し、鋸歯文間に円形浮文を貼り付ける。脚裾部にも鋸歯文を施す。胎土は白色である。本遺構からは二重口縁壺や庄内式土器につながる様相を示す鉢や甕が出土しており、中部瀬戸内地域との土器の時間的な併行関係を知るすべとなる。　(福佐)

148

148　瀬戸内産鉢　弥生後期

瓜生堂遺跡　(rd13.5・H8.2)　文献.631

集石遺構から出土。口縁部は端部外面に擬凹線を施し、体部は上半に３条の凹線文をめぐらし、鋭く屈曲する。内面調整はヘラケズリである。このような特徴から瀬戸内地方からの搬入品の可能性が考えられる。集石遺構には搬入品の土器だけでなく、和泉南部方面からもたらされた石も多く含まれ、広範囲な交易ルートをもつ集団の存在が想定される。　(福佐)

149

150

151

152

149　吉備産壺　　弥生後期
久宝寺遺跡　　(RD14.9・H37.8)　文献.759

微高地から出土。吉備地域からの搬入品と考えられる。口縁端部は上下に肥厚し、端面に凹線文を施し、さらに竹管文を３方向に加える。肩部はハケメ調整後に綾杉文を施し、胴部は上部が横方向、下部が縦方向のヘラミガキである。弥生後期前半は畿内と瀬戸内地方との交流が活発化する時期にあたり、吉備からの搬入はその交流活動を示すものである。　(福佐)

150　讃岐産短頸壺　　弥生後期
久宝寺遺跡　　(RD14.8・H19.9)　文献.759

弥生後期初頭の竪穴建物の床面から出土。四国・讃岐地域からの搬入品である。口縁端部を上方に拡張し、外面に擬凹線を施す。体部外面調整は上半がタタキののちハケメ、下半はヘラミガキである。建物床面からは貯蔵・煮沸・供膳具の全器種が出土しており、そのなかに讃岐地域からの搬入品が含まれていたことは在地土器との併行関係を知る資料となる。　(福佐)

151　讃岐産長頸壺　　弥生後期
瓜生堂遺跡　　(RD10.0・h17.7)　文献.631

包含層から出土。讃岐地域からの搬入品である。胎土は角閃石を含み、口縁部から頸部にかけて凹線状の沈線をめぐらし、頸部にはハケメ原体状工具による刻目文を施す特色ある文様をもっている。讃岐地域のなかでも、特に胎土中に角閃石を含むことや特徴ある形態や製作手法の点で強い独自性がみられる、下川津(しもかわづ)B類土器と分類される一群に該当する。　(福佐)

152　讃岐産甕　　弥生後期
瓜生堂遺跡　　(左:H27.0, 右:H28.2)　文献.631

左は弥生後期遺構面上、右は包含層から出土。151と同様の讃岐地域からの搬入品である。形状は口縁部が短く屈曲し、体部は肩の張った倒卵形で、底部は薄く仕上げる。調整は体部外面にハケメ、そののち下半はヘラミガキである。151～153から貯蔵・煮沸・供膳具の器種が揃って搬入されていることになり、讃岐地域からの人々の移動を示唆する資料である。(福佐)

153

154

155

156

153　讃岐産高杯　弥生後期

瓜生堂遺跡　(RD23.6・h10.2)　文献.631

包含層から出土。讃岐地域からの搬入品で、下川津B類土器に該当する。その特徴として、口縁端部を拡張し面を作り、上面に擬凹線を施し、杯部内外面は横位の分割ヘラミガキ調整する点があげられる。杯部と脚部を一体製作する円盤充填法である。弥生後期前半に、このような瀬戸内地方の高杯が近畿地方の高杯の製作に影響を及ぼすことが指摘されている。（福佐）

154　阿波産壺　弥生後期～古墳初頭

瓜生堂遺跡　(rd16.0・H26.3)　文献.631

包含層から出土。明赤褐色系の色調で胎土に結晶片岩を含む特徴から、四国・阿波地域からの搬入品と考えられる。加飾二重口縁をなす口縁部は受口状で、体部は扁球形である。文様は口縁端面と肩部に粗雑な波状文を施す。河内地域への土器の搬入例をみると、東部瀬戸内地方のなかでも特に阿波系が多く、また器種は壺と甕が主体的に持ち込まれる傾向にある。(福佐)

155　土佐産甕　弥生後期

瓜生堂遺跡　(RD16.7・H30.0)　文献.631

包含層から出土。全体が判明する資料で、その特徴として、肩部に最大径をもち、頸部からゆるやかに口縁部へと外反し、口縁部は粘土帯を貼り付けた粘土貼付口縁となる点があげられる。口縁部外面にはヘラ状工具による列点文を施す。本例は156とともに、弥生後期における土佐産「南四国型土器」と称される土器の、近畿への搬入の確認初例となる。（福佐）

156　土佐産甕　弥生後期

瓜生堂遺跡　(rd17.4・h8.5)　文献.631

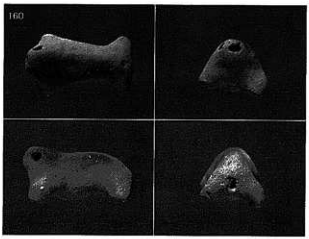
包含層から出土。形態は155と同じ特徴をもつが、異なるのは口縁下端部に刻目を施すことである。155・156ともに胎土にチャートや長石等が多く混入する特徴がみられる。148・151～156資料等の出土から、弥生後期前半において西方の様々な地域からの土器搬入がみられることが判明し、本遺跡が交流拠点として大きな役割をはたしていたと考えられる。（福佐）

157

158

159

160



157　飯蛸壺　　弥生中期

男里遺跡　　(上左：RD4.6・H10.4)　文献.674

大溝から出土。全てほぼ同様の大きさに揃っている完形品であり、溝内にまとめて廃棄された可能性が考えられる。口縁直下に外側から1孔あけられ、丸底である。成形は手捏ねで、指頭によるナデや圧痕が全面にみられる。飯蛸壺は大阪湾沿岸に立地する遺跡から出土する特徴的な遺物で、弥生時代の漁撈技術の発達とともに現れるものである。　(福佐)

158　鋼鏃　　弥生中期・後期

三宅西遺跡(左)・新上小阪遺跡(右)(左:ℓ2.9,右:ℓ2.9)文献.791・832

左は前期～後期の層準から出土。鏃身が概ね三角形の無茎鏃である。先端部には鎬がありやや厚く、基部が扁平で薄い。所々に錆が入る。詳細時期は不明だが伴出品には中期前半遺物が目立ち、古手となる可能性がある。右は竪穴遺物から出土。柳葉状形で、身の一部と基部を欠損する。中央に鎬をもつ。後期後半土器が共伴し、時期特定ができ貴重である。(笹栗・塚本)

159　人形土製品　　弥生前期

池島・福万寺遺跡　　(h2.9・w4.9)　文献.872

縄文晩期～弥生前期の層準において検出された溝から出土。

目は深く刻み込まれ、鼻は立体的に作り出される。口から下は失われる。目の表現や立体的であることから、縄文時代の土偶ではなく、類例の少ない弥生時代のものだと考えられる。同じ層準からは石棒が出土しており、祭祀具の変化の様相が興味深い。　(塚本)

160　動物形土製品　　弥生後期

私部南遺跡　　(H2.5・L5.0)　文献.865

弥生時代の水路の肩から正位置された状態で出土。

全体的なプロポーションからイノシシもしくはイヌ形の製品だと考えられる。円筒の胴部から頭、四肢をつまみ出している。刺突により目と口、さらに肛門を表し、後頭部に細い沈線による文様がみられる。蠱の表現であろうか。弥生後期のものだと考えられるが、当該期の動物形土製品は珍しい。　(塚本)

161

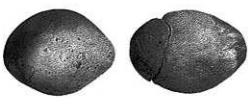
161　匙形土製品　弥生前期

田井中遺跡　(h6.7・w7.2)　文献.753

土坑の底近くから出土。

匙部分は球状をなす。口の径が3㎝と狭く、縁に沈線が4条めぐる。中実の柄が斜め方向に付くが、途中で欠損する。小形であること、またその形態から、実用品としては考えにくい。近辺から土器棺墓が検出されていることからも、祭祀的な意味をもっていた可能性も指摘できる。　(塚本)

162



162　土製投弾　弥生前期

池島・福万寺遺跡　(左:L4.6, 右:ℓ4.2)　文献.872

弥生前期後半の集落を囲む溝の上層から、大量の土器とともに出土。

2点とも、やや短い紡錘(ぼうすい)形のタイプである。左は完形品。重さは36.1ｇと37.8ｇでほぼ同じ。これらは集落域から出土したが、本遺跡では水田域からも投弾が確認されている。武器というよりは、鳥などを獲る狩猟具であった可能性が考えられる。　(塚本)

163

163　土製勾玉　弥生か

久宝寺遺跡　(W2.5・L4.0)　文献.759

古墳時代の流路を埋める砂層から出土。流路は堤で護岸され、堰が設置される。

頭部には、径4㎜の孔が穿孔される。胎土は緻密でナデにより整形される。流路からは弥生時代の遺物も多く出土しており、この資料も同じ時期のものであろう。石製の勾玉の模造品で、祭祀に用いられたものだろうか。　(塚本)

164

164　土製腕輪　弥生前期

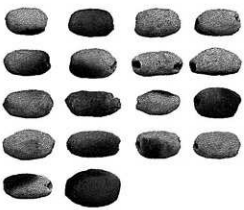
讃良郡条里遺跡　(d10.0・t0.8)　文献.830

弥生前期前半の建物を取り巻くように掘削された土坑群の一つから出土。土坑は周堤を作る際の土取りの穴だと推定されている。

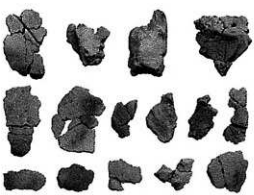
本来は環状であったと考えられるが、半分以上を欠損している。断面三角形で底面が平らとなる。形態から腕輪の可能性が高い。土製の腕輪は縄文晩期～弥生前期にいくつか類例がみられる。　(塚本)

165

166



167



168

165　土製紡錘車　　弥生前期

池内遺跡　　（左上：D4.3・T1.1）　文献.843

弥生前期の環濠集落から出土。

ただし、下層から巻き上がって上層で検出されたものもある。いずれも円板状に整形された紡錘車（ぼうすいしゃ）である。粗粒の砂を多く胎土に含む。大きさにバラエティーがあり、撚りをかける繊維の太さにより使い分けられていたようである。近畿地方でも早い段階の資料として注目される。　　（塚本）

166　管状土錘　　弥生前期

池島・福万寺遺跡　（左上：W3.5・ℓ5.3）　文献.872

弥生前期後半の集落を囲む溝の上層から出土。33点がまとまって、紐で連結されたと考えられる状態で検出された。細長いものとずんぐりしたものの2タイプある。両者は混在していたことから、魚網に装着されてはいなかったと考えられる。同じ層準からは石錘、また、炉跡からコイの骨が出土しており、農耕とともに河川での漁撈も盛んに行われたことが判る。（塚本）

167　壁土状焼土塊　　弥生中期

池島・福万寺遺跡　（左上：w10・ℓ15）　文献.872

弥生中期の土坑から炭とともに出土。表面には簟（たかむしろ）のような植物繊維の痕跡が転写され、木もしくは竹を組み合わせた芯の痕跡が確認される。ばらばらに破損しているが一部接合する。焼け落ちた土壁の可能性があるが、大きさや厚みにばらつきがあるため断定できない。集落から離れた水路脇で出土したことからも、用途を特定することを難しくしている。　　（塚本）

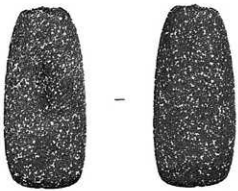
168　焼土塊　　弥生後期

八尾南遺跡　　（中央：w3・ℓ4）　文献.797

弥生後期の集落から出土。建物床面などから検出された。

形状はバラエティーがあり、板状のもの、塊状のものもある。なかには木質の跡が転写された破片もあった。本遺跡では、鉄鏃（てつぞく）が出土し、柱穴の確認できないことから工房と考えられる建物も存在するため、鍛冶（かじ）に関係する資料も含まれる可能性がある。　　（塚本）

169



169　太型蛤刃石斧　　弥生前期

瓜生堂遺跡　　(W6.9・ℓ15.4)　文献.631

包含層から出土。玢岩製で、基端部は破損するがもともと現状に近い大きさと推測される。磨製石斧で、平面形は概ね長方形、断面形は楕円形を呈する。刃部は両刃で、刃縁は体部より幅狭で使用痕がある。太型蛤刃石斧は柱状片刃石斧、扁平片刃石斧と同様に大陸系磨製石器で、伐採から荒削という工程のなかで、斧柄に装着され縦斧として使用された。　(小野)

170

170　扁平片刃石斧　　弥生中期か

池島・福万寺遺跡　　(W4.0・L4.9)　文献.586

包含層から出土。

凝灰岩製の片刃の磨製石斧で、表面は研磨されている。基部の横断面形は長方形をなし、刃面には擦痕が、刃縁には使用痕と思われる刃こぼれと細かい線状痕が残る。扁平片刃石斧は、刃縁と斧主軸が直行する横斧柄に装着され、表面を薄く削ったり細部の調整を行うなど、加工用として使用された。　(小野)

171

171　扁平片刃石斧（石庖丁転用品）　弥生中期

太秦遺跡　　(左：ℓ5.8, 右：ℓ3.5)　文献.715

左は溝、右は竪穴建物の排水溝から出土。石材は左が粘板岩、右が結晶片岩である。ともに石庖丁を転用しており、孔はその名残で、表面を研磨し刃部を新たに作り出している。刃面には細線状痕が残る。本例は横斧柄に装着して使用されたと考えられる。２点とも破損しており、孔を有し、厚さが薄く、石材の関係等で衝撃には耐えられなかったものと思われる。(小野)

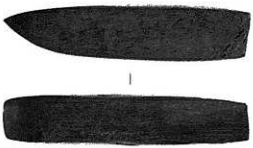
172

172　柱状片刃石斧　　弥生中期

鬼虎川遺跡　　(W3.3・ℓ7.8)　文献.879

ピット付近から出土。磨製石斧で、頁岩製と推測される。柱状片刃石斧は形状によって、抉りを有するものと有しないものに分類できる。本例は現状の基部近くに抉りを入れている。抉り部には側面にいたるまで光沢がみられ、木製の柄に緊縛した痕跡と考えられる。刃部には刃こぼれがあるので、実際に加工用の石斧として使用されたものと思われる。　(小野)

173



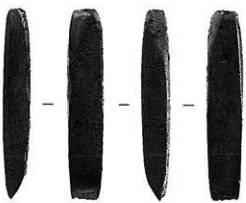
173　柱状片刃石斧　　弥生中期

太樂遺跡　　(W3.6・L15.8)　文献.715

円形竪穴建物の壁溝から出土。

時期は弥生中期後葉である。本例は一部に自然面を残しているが、全面にわたって丁寧に研磨されている。形状は抉りを有しないものである。使用者の利き手によるものか、刃縁は斜めとなっている。本遺跡では他の建物においても、幅狭で小形の柱状片刃石斧が1点出土している。　(小野)

174

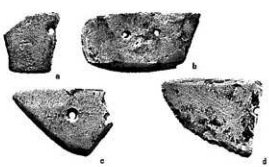


174　小型方柱状片刃石斧　　弥生前期～中期

讃良郡条里遺跡　　(W1.2・L6.4)　文献.830

竪穴建物の主柱穴から出土。172・173より小さい磨製石斧である。石材は蛇紋岩。抉りはない。刃部に刃こぼれがあり、刃縁は斜めに減っている。小型方柱状片刃石斧は、幅・厚さの割に長さがあるのが特徴である。抉りを有する例があり、その有無によって柄にどのように装着され使用されたか課題は残るが、加工工程のなかで使い分けをされたと考えられる。(小野)

175



175　石庖丁・同未製品　　弥生前期

池内遺跡　　(d:w8.6・ℓ6.6)　文献.843

aは溝、bは流路、cは包含層、dは土坑から出土。石材はa・dが凝灰岩、bは頁岩、cは泥質片岩。いずれも磨製である。石庖丁は平面形、特に刃部形により分類され、aは全形不明だが直線刃で両刃、bは長方形直線刃で両刃、c・dは半月形外湾刃で両刃である。dは刃部に打撃痕が残る。未完成で途中段階と考えられるが、使用後新たに再生しようとしたかとも推測される。(小野)

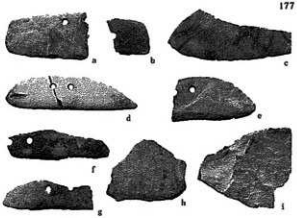
176

176　石庖丁・同未製品　　弥生中期

瓜生堂遺跡　　(左:ℓ17.0, 右:ℓ10.9)　文献.631

左は包含層、右は湿地状の遺構から出土。左は磨製で完形品、右は未製品で破損している。石材は、左が石英片岩、右が緑泥片岩。形態は、左が内湾刃形の片刃、右は杏仁形で、剥離整形段階の製作途中だが片刃を作り出そうとしている。これまで本遺跡では石庖丁未製品の出土はなかったが、市の調査で大型石庖丁の未製品が近年確認され、本例はそれに次ぐ。　(小野)

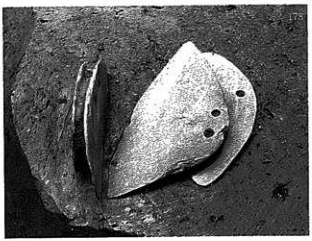
177



177　石庖丁・同未製品　弥生中期

三宅西遺跡　(i:w8.3・ℓ9.6)　文献.832

a・c・f・gは土坑、iは溝の高まり、他は包含層から出土。dのみほぼ完形品、他は破損品。石材はa・gが緑色片岩、他は結晶片岩。形態は直線刃半月形の片刃、杏仁形で両刃気味の片刃などがみられる。a～gは完成品、aの紐孔周囲に穿孔前敲打痕、gの紐孔に紐擦れ痕がある。h・iは剥離成形段階の未製品で、hでは刃を作り出そうとしている。　(小野)



178

178　石庖丁一括　弥生後期

久宝寺遺跡　(中央:W9.7・L19.0)　文献.665

4点がまとまり包含層から出土。2点は刃を下に直立し、その横に2点が水平に重なった状態で検出された。後者は大型石庖丁である。全て磨製である。形態は、直立2点が杏仁形外湾刃と半月形直線刃の片刃、大型石庖丁では、紐孔1孔例は杏仁形の片刃気味の両刃、2孔例は台形状を呈し、外湾刃で両刃である。4点は意図的に集積されたものと考えられる。　(小野)

179

179　磨製石鏃　弥生中期

山賀遺跡　(W1.5・L3.1)　文献.788

大溝から出土。

石鏃には打製と磨製があり、本例は磨製で完形品である。石材は緑泥片岩である。石鏃は、基部の形状と茎の有無によって五つに分類される。本例は基部がくぼむ無茎式である。先端部は両面を鋭利に作り、基部に向かって薄く仕上げている。側辺の加工があまいので、未製品の可能性がある。　(小野)

180

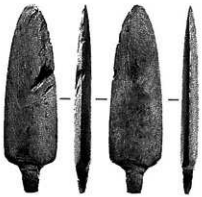
180　磨製石鏃　弥生中期

太秦遺跡　(w2.0・L5.5)　文献.715

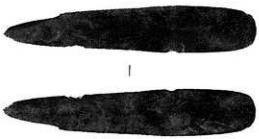
竪穴建物の覆土から出土。

本例は磨製で、石材は粘板岩である。鏃身と茎は明確に分けており、両面は平坦に研磨され、鏃身の中央には鎬が通っていない。側辺は両面から鋭く研磨されている。茎の断面形は長方形をなす。なお、弥生中期の磨製石鏃は、本例と異なり、鏃身の中央に鎬が通り横断面形が菱形をなすものが多い。　(小野)

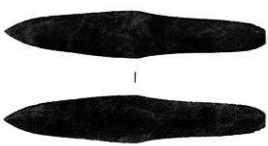
181



182



183



184

181　磨製中型尖頭器　　弥生前期～中期

池内遺跡　　(W2.9・L10.4)　文献.843

包含層から出土。石材は結晶片岩または泥質片岩である。全体的に丁寧な作りで、関と茎を備える有茎式である。刃部は刃と平行か斜め方向に研磨され、茎には横方向の丁寧な研磨がある。鏑は、切先付近は明瞭だが、基部では鈍く丸味をもつ。断面形は先端部が菱形、基部は杏仁形、茎は長方形である。鏃、槍、剣のいずれか不明瞭なので尖頭器としておく。　(小野)

182　磨製石剣　　弥生中期

太秦遺跡　　(W2.7・L14.5)　文献.715

竪穴建物の覆土から出土。

石材は粘板岩である。表裏面には明瞭に鎬が研ぎ出されている。剣身と茎の境は関が作り出されていないので不明瞭であるが、基部の側縁が平坦な面に研磨されているので、側面から見ると区別できる。本例は、関を作り出さない、鉄剣形の磨製石剣の可能性がある。

(小野)

183　磨製石剣　　弥生中期

太秦遺跡　　(W2.8・L15.0)　文献.715

182と同様に竪穴建物の覆土から出土（182とは別遺構）。

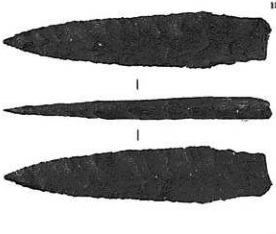
粘板岩製で、磨製の有柄式である。切先・茎の横断面形は鎬が明瞭な菱形で、基部の横断面形は杏仁形である。竪穴建物からは打製石鏃、磨製石鏃（180）、中型尖頭器、石錐、刃器、石庖丁等の石器が多く出土している。　(小野)

184　鉄剣形磨製石剣　　弥生中期

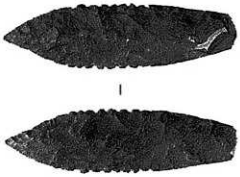
瓜生堂遺跡　　(W3.2・ℓ14.7)　文献.633

包含層から出土。粘板岩製である。写真右の下半端部近くに2孔があるので、鉄剣形磨製石剣と考えられる。剣身・茎境は不明瞭である。横断面形は剣身の切先と基部がレンズ状、下半部は長方形を呈する。下半の両側縁は再研磨された可能性があり、孔の一つはその時に欠けたと思われる。鉄剣形磨製石剣を石戈とみる説もあり、本例も石戈の可能性は否定できない。　(小野)

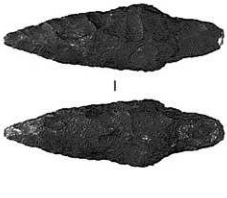
185



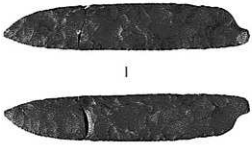
186



187



188



185　打製石剣　　弥生前期

植松遺跡　　(W3.3・ℓ14.9)　文献.858

弥生前期中葉～後葉の水田面を覆う包含層から出土。刃縁はほぼ直線的で、先端部は非常に鋭利である。先端には、何かを突いた際の衝撃で生じたわずかな欠損が認められる。基端部から全長約1／4のところに最大幅があり、そこまでが着柄部とみられる。先端から基端部にかけて徐々に厚みを増すことで、重心を安定させていると考えられる。　(若林)

186　打製石剣　　弥生前期～中期

山賀遺跡　　(W3.8・L13.8)　文献.788

調査区内を南西から北東に向けて平行してのびる、弥生前期～中期初頭の遺物を含む2条の溝に挟まれた、自然堤防状の高まりから出土。先端部に欠損は認められない。側縁なかほどの刃縁にみられる鋸歯状の刻みは、先端には及ばない。写真上段の基部に白っぽく見えるのは研磨面で、鋸歯縁下端から基端部にかけての側面も丁寧に研磨されて平坦面を有する。(若林)

187　打製石剣　　弥生中期

山賀遺跡　　(W3.5・L11.6)　文献.788

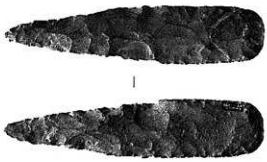
弥生中期の包含層から出土。基端部に礫面が残る。写真下段の基部に素材剥片の段階の剥離面が残ることから、大形の板状剥片を素材とするとみられる。基端部から全長約1／3のところに最大幅があり、その部分が最も厚く、先端部と基端部に向けて徐々に薄くなる。基部は茎状を呈することから、そこに柄を装着したとみられる。先端がわずかに欠損する。　(若林)

188　打製石剣　　弥生中期

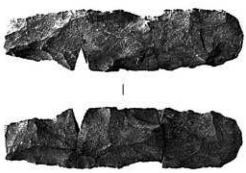
久宝寺遺跡　　(W5.2・ℓ27.6)　文献.759

弥生中期の水田域に隣接する微高地から出土。径約2mの範囲で、打製石剣や磨製石剣が総数33点検出されたうちの1点である。全体に精巧な作りで、厚みもほぼ均一である。もし石剣であれば、大きさからみて身と柄が一体に作られたものといえるが、側縁には明確な刃潰しの痕跡が認められない。基端部の残存箇所に礫面が認められる。　(若林)

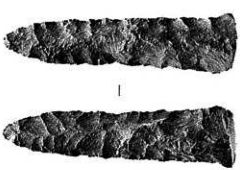
189



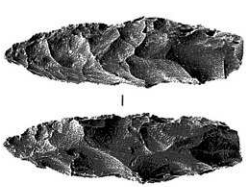
190



191



192



189　打製石剣　　弥生中期

三宅西遺跡　　(W3.7・L15.9)　文献.832

弥生中期の居住域を覆う弥生時代の包含層から出土。剣身と柄が一体のものとみられ、柄の部分のほうが剣身に比べてやや幅広に作られている。柄の側縁部が、剣身より丁寧に作られているように見えるのは、手を保護するために柄に巻かれた素材がきちんと固定されるとともに、縁でこすれても切れにくいようにするためと考えられる。　(若林)

190　打製石剣未製品　　弥生中期

三宅西遺跡　　(W3.5・ℓ13.8)　文献.832

弥生中期の竪穴建物から出土。同建物は2度建て替えられ、埋土から本例も含めて打製石器やその未製品が多数と、石器製作の道具とみられる礫石器が検出された。本例は剥離の単位が大きく、不整形で折損していることから、製作途中で失敗して廃棄された可能性がある。あるいは意図的に分割され、小形の打製石器に作り変えようとしたものだろうか。　(若林)

191　打製石剣　　弥生中期

鬼虎川遺跡　　(W2.2・ℓ9.1)　文献.879

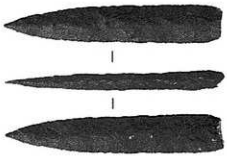
弥生中期の溝から出土。192も同じ遺構から検出された。折損しており、全体の形状は不明だが、折損部付近で幅が拡がっているのが見て取れる。左右対称に幅が拡がっていたとすれば、189と同形態が考えられるが、左右非対称の場合は、戈とみるべきだろう。厚みに対して細身のため、断面形状は円形に近い印象だが、側縁部は丁寧に整形されている。　(若林)

192　打製石剣（状石器）　　弥生中期

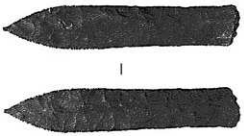
鬼虎川遺跡　　(W2.8・ℓ9.5)　文献.879

弥生中期の溝から出土。平面形態に対して厚みがあり、剥片の単位も大きく、全体に不整形である。何度も打ち欠かれて両側縁とも丸みをおびており、刃縁とするには不適格である。ただ片面の体部中央にわずかに研磨面が残ることから、破損した幅広の磨製石剣を作り変えようとして失敗したか、もしくは石核として転用した可能性も考えられる。　(若林)

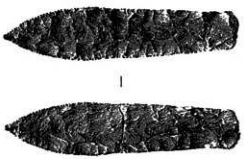
193



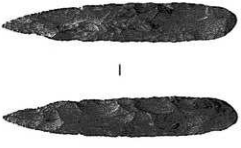
194



195



196



193　打製石剣　　弥生前期～中期

池島・福万寺遺跡　　(W3.0・ℓ17.4)　文献.586

弥生前期末～中期初頭の水田に伴って配置された水路から出土。水田域から完形の打製石剣が出土する例は木遺跡の他資料でもみられるほか、奈良県中西遺跡などでも認められる。打製石剣というと、武器や戦いといった脈絡で語られることが多いが、穂摘みや除草など、農作業で使用されることがあった可能性も考慮すべきかもしれない。　(若林)

194　打製石剣　　弥生中期

池島・福万寺遺跡　　(W3.4・ℓ18.4)　文献.793

弥生前期末～中期初頭の水田面を覆う、中期前葉に堆積した洪水砂層から出土。先端部がわずかに欠損するものの、ほぼ完形である。先端から全長約1／3程度までの部分に、極めて細かい鋸歯状の刻みを入れており、全体的にかなり精巧な作りである。もし前項で述べたような用途があったとしたら、使用痕を調べる必要もあろう。基端部には礫面が残る。　(若林)

195　打製石剣　　弥生中期

池内遺跡　　(W3.3・ℓ14.8)　文献.883

中世の包含層から出土。

検出地点に近接する、弥生時代の集落遺跡から混入したものとみられる。先端部がわずかに欠損するが、ほぼ完形である。基端部には礫面が残る。194と同様に、先端部から全長1／3強にかけての側縁に細かい鋸歯状の刻みを入れる。鋸歯状の部分を機能部と考えると、それより基部側は柄と捉えられる。　(若林)

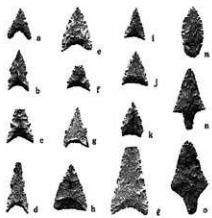
196　打製石剣　　弥生中期

大尾遺跡　　(W3.1・L18.1)　文献.599

弥生時代の墓壙から出土。

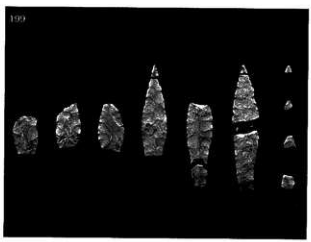
副葬品として打製石剣が墓壙から出土する例は非常にまれだが、本例により、打製石剣が極めて罵人性の高い石器だったことが窺える。側縁はほぼ直線的だが先端部でわずかに屈曲させ、鋭い切先を作り出している。精巧な作りで、埋葬された人にとっては、手放せない一品だったのかもしれない。　(若林)

197



198

199



200

197　打製石鏃（金山産材ほか）弥生前期～中期
池内遺跡　（o：W2.4・L4.7）　文献.843

h・oは古代以降の包含層、g・mは弥生前期～古墳時代の包含層、それ以外は第4面の遺構から出土。うち、e・b・fは同一の遺構から検出されている。

右列以外は全て凹基式であることや、共伴土器からみて、第4面出土例は概ね弥生前期の範疇で捉えることができる。これらには一定量の四国(香川県坂出市)の金山(かなやま)産サヌカイト製品が含まれる。　（若林）

198　打製石鏃（墓関係品）　弥生中期
瓜生堂遺跡（左：L3.8, 中：ℓ3.1, 右：ℓ4.4）　文献.632

右は、方形周溝墓の主体部（埋葬施設部）から出土。被葬者の右脛骨と木棺底板との間の1.5cmほどの隙間にあったことから、被葬者に刺さっていたとみられる。基部と先端が欠損している。中は方形周溝墓の盛土斜面、左は周溝から出土。ともに柳葉形だが、後者は裏面に素材剥片の剥離面を大きく残し薄くてシャープだが、前者は重量感がある。　（若林）

199　打製石鏃（墓関係品）　弥生中期
大尾遺跡　（中央：W1.3・ℓ4.4）　文献.678

弥生中期の墓壙から出土。木棺内にあたるとみられる部分から検出されている。少なくとも8個体分はあるが、いずれも欠損もしくは破損しており、右から2列目の資料は5片に分断されている。おそらくこれらは副葬されたものではなく、被葬者の体に撃ち込まれたものとみられる。いずれも身幅が狭く、柳葉形の平面形態ではないかとみられる。　（若林）

200　打製石鏃　弥生前期
久宝寺遺跡　（W1.6・L6.2）　文献.759

縄文晩期～弥生前期の包含層から出土。

弥生時代のものとみられるが、前期の石鏃としてはかなり長大である。刃縁に鋸歯状の刻みを入れる。先端の細くなっている部分までは刻みが及んでいないように見えるが、ほぼ同じ間隔で微細な剥離を施している。先端にも同様の刻みを入れると先端が折れるおそれがあり、細工を加減したのだろう。　（若林）

201

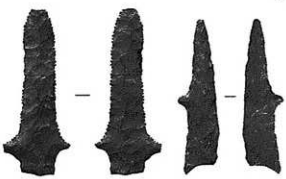
201　打製石鏃　　弥生前期

池島・福万寺遺跡　　(W2.5・L6.4)　文献.761

湿地状の環境下で堆積した縄文晩期～弥生前期の包含層から出土。

200と同様、弥生前期の資料としては長大であるうえに、逆刺と茎が明瞭に作り出される点で注目される。ただ刃縁にゆるいS字状のカーブを作り出す点、茎をやや細目で丁寧に作り出す点で、中期によくみられる有茎式の石鏃とはやや趣を異にする。　(若林)

202



202　尖頭器　　弥生前期～中期

久宝寺遺跡　　(左:ℓ8.8, 右:ℓ6.4)　文献.759

左は縄文晩期～弥生前期の包含層から出土。先端と基部が欠損するほか、横方向の突起から上の部分は中位で折損する。割れ口の形状から、何かを刺突したとみられる。右は古墳時代の流路から出土。下層からの混入品だろう。体部は両面とも何かでこすれたような鈍い艶をおびる。刃縁をねかせて削ぎ切りするような使用方法が考えられる。　(若林)

203

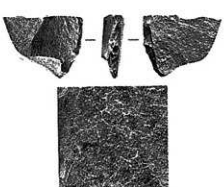
203　石小刀　　弥生前期～中期

久宝寺遺跡　　(w1.9・ℓ6.1)　文献.759

縄文晩期～弥生前期の層準のベース面で検出した溝から出土。

サヌカイト製で先端部を欠損する。やや湾曲し、両刃で鋸刃状に調整される。基部は台形に作り出され、端面に自然面を残す。石小刀は二上山産サヌカイトで作られることが多く、大阪を中心とする近畿地方に集中的に分布する。　(塚本)

204



204　スクレイパー　　弥生前期

池内遺跡　　(W4.5・L3.4)　文献.843

弥生前期の環濠集落のピットから出土。

四国の金山産サヌカイト製で、剥片素材を用いたスクレイパーである。熱を受けており、ポッド・リッド状といわれる破面がみられる。また、表裏に亀裂が観察される。

本遺跡のサヌカイトは金山産のものが高い比率でみられることが注目される。　(塚本)

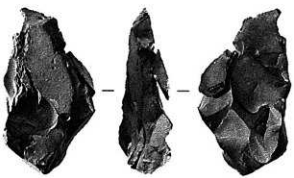
205

205　打製石庖丁　弥生中期

山賀遺跡　(W4.3・L11.4)　文献.788

弥生中期の、複数平行してのびる大規模な溝の一つから出土。サヌカイト製で短冊形である。穿孔はなく、両端に抉りが入る点は打製石庖丁として一般的である。刃部やその左上方の剥離稜線に光沢をもち、穂摘み具として長期間使用されたと考えられる。磨製石庖丁が主体の近畿地方では、サヌカイトの打製のものは珍しい。(塚本)

206



206　サヌカイト接合資料　弥生中期

三宅西遺跡　(w9.7・ℓ17.5)　文献.832

弥生中期の竪穴建物から出土。

3枚の剥片が接合したサヌカイト石核である。側面に自然面を残し、片面から集中して剥離を行っている。石核の大きさは18×10×8cmぐらいに復原できる。この竪穴建物では大量の剥片や未製品が出土しており、集落で石器製作が集中的に行われていたことが判る。(塚本)

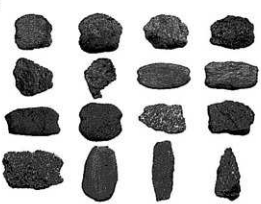
207

207　石製紡錘車・同未製品　弥生前期

池内遺跡　(左:D5.2, 中:D4.9, 右:D5.0)　文献.843

左は5-1区1766溝、中は4-2区1578土坑、右は5-4区3c層から出土。左は結晶片岩製で縁辺部は研磨される。中央に0.8cmの軸孔がある。外縁の一部は欠損し裏面は剥落する。破損のため廃棄か。中は結晶片岩製の製作途上品で表面と縁辺部は丁寧に研磨される。表面中央に径0.8cmの穿孔途中痕がある。右は角閃石黒雲母花崗岩製でほぼ中央で破損する。(入江)

208



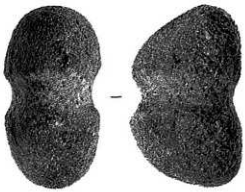
208　石錘　弥生前期

池島・福万寺遺跡　(左上:W6.8・ℓ6.6)　文献.872

15層から、比較的散在した状態で出土。

このうち9点は花崗岩、6点は結晶片岩、1点は砂岩である。通常は砂岩の使用が多いがこれは異質である。大半は両端に打ち欠きがある。おそらく投網の開口部かその他の網に付ける錘と思われる。打ち欠き石錘は縄文早期頃から出現し、弥生時代まで続く。その後は土錘がとってかわる。(入江)

209



209　石槌　　弥生中期

鬼虎川遺跡　　(W4.5・L8.6)　文献.879

13～14層から出土。弥生中期土器が伴出している。円錐状が上下合わさって中央部がくびれた形態を示す。断面形がお結び状で、片側が突出して稜線をもち、他方は直線状をなす。直線状部に凹凸がみられるが敲打痕はない。尖出側は磨かれている。変形した石槌と思われる。なお、高槻市安満遺跡出土の石槌は、上部円錐形、下方が直方体状で形態が異なる。　(入江)

210

210　石槌　　弥生中期

男里遺跡　　(W5.3・L10.4)　文献.674

竪穴建物28・29・30が重複した埋土から出土。どの建物に伴うかは判らない。時期は弥生中期後半頃で、緑色片岩製である。上下は敲頭円錐状で端部は丸みをおび、側面中央部がくびれる。両端部で打撃を行う石槌と思われる。209と比較するならば、両尖端のみを使用するものと、側面と両尖端を使用するものとは、形態も異なり使用方法も違う可能性がある。　(入江)

211

211　砥石加工品　　弥生後期

瓜生堂遺跡　　(右:W5.5・L7.3)　文献.631

左は99-5区第18面の集石遺構1・S 05190（S 05241）の数多く石が集積したなか、右は第18面から出土。左は破片で片面には自然面が残る。やや薄く扁平で一部分が突出している。右は線状痕が認められ非常に平滑である。砥石として使用か。これらは弥生後期前半の層準から出土。砥石は近畿地方でも数遺跡から少量出土するが、性格は明確ではない。　(入江)

212

212　投弾状礫　　弥生前期

瓜生堂遺跡　　(左下:W5.9・L13.7)　文献.631

99-3区第20・21面の集石遺構S 03320から、20点が1箇所に集中して出土。集石遺構はS 03371 B溝の西岸に位置し、さらに西側には平面径約6mの竪穴建物がある。時期は弥生前期前半頃か。通常の一般的な投弾と比べて、大きさや重さがまさる。石に紐を巻き付けて遠心力で飛ばす武器かとも思われるが、確証は得られない。　(入江)

213

213　碧玉製管玉　弥生前期～中期

山賀遺跡　(D0.4・L1.6)　文献.788

03－1－2区第6面の252大溝南法面から出土。周辺から弥生前期～中期後半の土器、石庖丁、打製石鏃などが検出されている。本例は中細形で両側から穿孔される。石質は緻密で碧玉質である。弥生時代の管玉は墓から出土する例があり、通常は少量だが、兵庫県田能遺跡では多量に発見された。この管玉も特殊な役割の人の墓に副葬されていた可能性がある。　(入江)

214

214　勾玉状石製品　弥生前期～中期

山賀遺跡　(W2.2・L3.5)　文献.788

第9層から出土。

緑泥片岩製で、三日月形に両端が尖る形状である。ほぼ中央に径約0.5cmの孔がある。研磨は側面と平面に認められる。三日月形の凹部から孔に紐が掛けられていたようである。酷似する類例はみない。勾玉的な性格はないかと考えられる。厚さなどから石庖丁の転用品の可能性がある。　(入江)

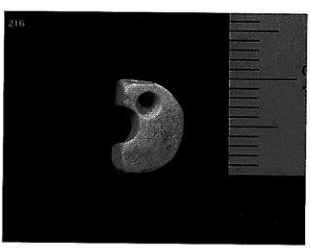
215

215　勾玉状石製品　弥生前期～中期

山賀遺跡　(W1.4・L2.8)　文献.788

第6面の252大溝上層から出土。弥生前期～中期後半の土器、大型石庖丁、磨石などが伴出している。

緑泥片岩製で、214よりくびれの浅い三日月形を示し、孔は小さく片側に寄る。両平面を研磨し、両尖端は少し丸みをもつ。弥生前期を中心に北部九州地域などで分布し、滑石で製作される扁平な板状型勾玉に関連する可能性が考えられる。　(入江)

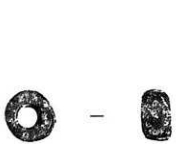


216　翡翠製勾玉　弥生中期

太秦遺跡　(W0.7・L1.0)　文献.715

竪穴建物11・13・14の間の集中ピット群中の1200ピットから出土。付近では平地式建物などが設けられていた可能性がある。白濁色の地に透明感のある薄い緑色が入り、新潟県糸魚川産の翡翠と考えられる。頭部・尾部端には面を作り、背面は角張った稜を少し残す。形態的には、弥生中期に北陸地方南西部で製作されたものと推定される。　(入江)

217

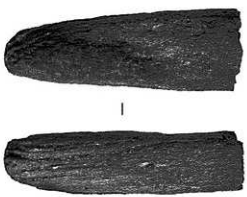


217　石製玉　　弥生中期

弓削ノ庄遺跡　　(D1.2・H0.7)　文献.705

方形周溝墓1の主体部3から出土。この周溝墓は弥生中期後半頃の構築で、土器棺墓1基、土壙墓2基が検出された。主体部3は土壙墓とされたものだが、棺材も人骨等も残らない。その遺構の南東部中央で発見されたものの、これに伴う遺物とは断定できない。石材は不明。玉の両面はやや片側に傾く。穿孔は両面から行っており、側面も上下面も研磨している。(入江)

218



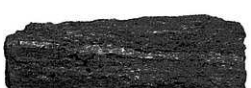
218　石棒　　弥生前期

池島・福万寺遺跡　　(w6.9・ℓ20.0)　文献.872

弥生前期の15層から出土。

結晶片岩製で、断面は楕円形を呈し、全体的に研磨される。幅広い面では、一方の端部は細く作られ丸みをおびる。その反対部は徐々に幅広くなるが破面にいたる。幅狭い面では、先端のみ少し細くなるものの、それ以外の幅はあまり変わらない。細くなった先端から約2cmの位置にわずかな段を作り出す。　(入江)

219



219　石棒　　弥生前期

池島・福万寺遺跡　　(w4.9・ℓ11.6)　文献.872

第15面の弥生前期835溝から出土。

片岩製である。扁平な棒状を示し、片側が少し太い。表面は研磨されず、多少凹凸が認められる。両端部は直線状を示し、中央付近にわずかなくぼみが認められる。石棒としては少し粗雑な作りとなる。あるいは何かの素材として搬入され、錘などとして転用された可能性があるかもしれない。　(入江)

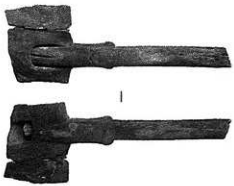
220

220　石棒　　弥生前期

山賀遺跡　　(w3.8・ℓ9.6)　文献.839

土壌化層の13層から出土。弥生前期土器が伴出している。片麻岩製で、断面は、楕円形の箇所と平坦な所やくぼみのある部分とがある。中央部がやや細くなっている。全体をある程度整えているが、研磨は施していない。退化形状の石棒と考えられるが、219と同じく、あるいは何かの素材の可能性もあり判断が難しい。　(入江)

221

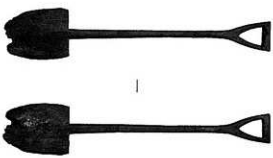


221　組み合わせ平鋤　弥生前期

池島・福万寺遺跡　(w10.7・ℓ28.0)　文献.586

福万寺地区の、弥生前期後葉に堆積したと考えられる13ｂ層の砂礫層から出土。刃部が破損しているので詳しい形態は不明であるが、本例のように、柄から左右に肩が水平にのび屈曲するものを角肩とよぶ。柄が装着された状態で検出され、軸部と柄には紐で結束した痕が残っている。同じ層から226直柄平鍬を含め多数の木製品が出土している。樹種は不明。　(角南)

222

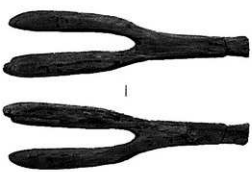


222　一木平鋤　弥生中期

若江北遺跡　(W20.0・ℓ102.8)　文献.863

弥生中期末の、木製品が多数残る溝から出土。鋤以外の遺物の出土状況から、溝は滞水状態であったと考えられる。一木から作り出されているが、221と同様に柄から左右に肩が水平にのびる角肩で、屈曲点からゆるやかなカーブを示して刃部までいたる。把手は、中央を刳り抜いた逆三角形で、現代のシャベルと形状がほぼ変わらない。樹種はアカガシ亜属。　(角南)

223



223　曲柄又鍬　弥生前期

私部南遺跡　(w12.5・ℓ46.8)　文献.865

弥生中期前葉の流路のくぼみを利用して営まれた木器貯蔵用の土坑から、水平の状態で出土。

着柄部の下部（写真左側）がゆるやかに拡がり、角肩をもたない、軸部と刃部の境が不明瞭なタイプである。樹種はアカガシ亜属。紐かけの大きさからみて、同土坑出土の掘りの欠損したサカキ製曲柄の台部が装着されていた可能性が考えられる。　(角南)

224

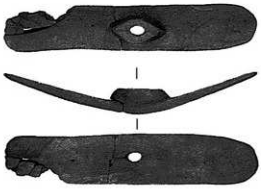
224　曲柄平鍬　弥生後期

久宝寺遺跡　(w11.6・ℓ61.0)　文献.759

弥生後期前半の層から出土。

ナスビ形の軸部表面には、紐で縛った痕が残る。両面に炭化した部分があり、焼損したと思われる。笠部の下のくびれがゆるやかに外反しながら幅を増すタイプである。樹種はアカガシ亜属。このような、弥生中期に瀬戸内地方で発達したナスビ形曲柄鍬は、後期には九州から関東地方にかけて広く普及する。　(角南)

225



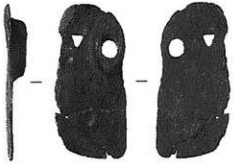
225　諸手鉞　　弥生前期

久宝寺遺跡　　(W11.2・L57.5)　文献.759

弥生前期の、竪穴建物に隣接する井戸の底部付近から出土。同じ遺構から一木鋤も出土しており、どちらも使用後、井戸に廃棄されたものと考えられる。

身は約145度に屈曲している。内側中央には、上下ともほぼ均等に尖った船形突起をもつ。弥生前期に九州から東海地方にかけて広く普及する形態の諸手鉞である。樹種はアカガシ亜属。　(角南)

226



226　直柄平鉞　　弥生前期

池島・福万寺遺跡　　(w14.5・ℓ29.9)　文献.586

221と同じ福万寺地区の、弥生前期後葉に堆積したと考えられる13ｂ層の砂礫層から出土。

直柄を挿入する船形突起は、上下とも均等に尖った紡錘形をなす。隆起の横に三角形の穿孔が1箇所、また側部にはくびれが残存する。穿孔は左右対称にあったと考えられ、泥除けを装着する際に用いられたと想定される。樹種は不明。　(角南)

227

227　直柄平鉞未製品　　弥生中期

山賀遺跡　　(W18.4・L38.4)　文献.788

03-1-2区第10面の1014溝下から出土。

他の出土遺物より判断して、弥生中期初頭の時期が考えられる。鉞身の幅が狭いため、平鉞のなかでも狭鉞に細分される。柄孔隆起部は、長くのびる逆水滴形を呈する。アカガシ亜属の板目材を用い、頭部は左右に切り込みを入れ笠状に仕上げるが、柄孔部と刃先は未加工のままである。　(角南)

228

228　直柄平鉞　　弥生後期

池島・福万寺遺跡　　(w13.2・ℓ28.0)　文献.586

福万寺地区の、弥生後期の第11-2ａ面、堰16の下流側水路38層部から、柄と泥除けが装着された状態で出土。鉞身背面（使い手とは反対側）には、円形の柄孔突起がある。前面（手元側）の柄孔上部には蟻溝が設けられており、蟻柄をもつ泥除けが装着されていた。一部は炭化しているので、焼かれた後、廃棄されたものかもしれない。樹種は不明。　(角南)

229

229　直柄平鍬　　弥生後期

若江北遺跡　　(w7.2・ℓ11.6)　文献863

弥生後期の流水堆積した滞から出土。柄と身が組み合った状態で検出されている。

228と同じように、前面（手元側）には蟻溝が残っており、当初は平鍬であったが、上辺と側面を切断し、最終的に狭鍬に転用されたかとも考えられる。隆起部は、短い逆水滴形である。樹種は、柄はサカキ、身はアカガシ亜属。　　(角南)

230

230　横鍬　　弥生後期

池島・福万寺遺跡　　(w19.6・ℓ14.5)　文献586

福万寺地区の、弥生後期の第11－2ａ面、堰10から出土。柄の一部が残存するが、炭化が著しい。本来、鍬は刃先に向かい刃部は薄くなるが、本例は分厚いままである。柄孔が中央にあることを勘案すると、刃部が欠損した状態とも考えられるが、それでも分厚い。重量を利用した別の道具である可能性も考えられる。樹種は不明。　　(角南)

231

231　泥除け　　弥生中期～後期

池島・福万寺遺跡　　(w29.9・ℓ15.4)　文献761

池島地区の、弥生時代末頃の11ｂ層から出土。

柄孔のほか、下辺に柄と泥除けをつなぐ小さな方形穿孔があることから、上辺に蟻枘をもつタイプと考えられる。補修用と考えられる小円孔が残存部の上辺端に4箇所ある。小孔は一列には並ばず段違いになっている。樹種はアカガシ亜属、木目が横方向に通る。

(角南)

232

232　泥除け　　弥生後期

池島・福万寺遺跡　　(W23.2・ℓ13.5)　文献586

福万寺地区の、弥生後期の第11－2ａ面、堰12から出土。

加工痕が一部残り、部分的に炭化している。木目は横方向に通る。断面は扁平な板状で、上端に長い蟻枘を作り出す。柄に通し、蟻溝をもった鍬身に嵌め込み接合する。近畿・東海地方で、弥生後期に特徴的に出土するタイプである。樹種は不明。　　(角南)

233

233　田下駄　　弥生中期

瓜生堂遺跡　　(w11.1・L23.6)　文献.631

弥生中期の集落域と考えられる地区の溝から出土。

円形の孔が4箇所に穿たれ、紐を通し足に縛る。足が直接載る板部材だけの、いわゆる枠なし形式。粘質の土壌では板から土が離れにくくなるものの、湿田作業用に使用され、身体の沈み込み防止を図ると考えられる。また、作業時の足裏保護にも一役かっていたとも理解されている。樹種はエノキ属。　(角南)

234

234　田下駄　　弥生前期～中期

讃良郡条里遺跡　　(W22.2・L25.9)　文献.831

3（-3a）層から出土。

同層の伴出遺物より、弥生前期～中期頃のものと考えられる。写真の右上孔の右下から、右下孔の右上にかけての材と、残りの2/3の材に割れており、やや離れた2箇所から出土したものが接合した資料である。233と同じく、枠なし形式である。樹種はヒノキ。　(角南)

235

235　木庖丁　　弥生中期

讃良郡条里遺跡　　(w9.0・ℓ6.1)　文献.831

堆積層から出土。やや厚みをもつ不整楕円形の木製品である。2箇所に穿孔があり木庖丁かと推測されるが、確定は難しいかもしれない。木庖丁は、弥生中期以降には北部九州から東海地方にかけて類例が増加するが、本例を木庖丁と断定ができない理由として、形態的な特徴が、土器の表面調整工具にも類似するためである。樹種はコナラ属アカガシ亜属。　(角南)

236

236　竪杵　　弥生前期

池島・福万寺遺跡（上:L121.0, 下:L159.2）文献.872

弥生前期の木製品水没け遺構から出土。ともに握り部2箇所に節帯をもつタイプに相当する。搗き部端の片側は丸く仕上げ使用痕がある。他方は平坦となる。下例は握り部との境近くに沈線が1条めぐり、類例が茨木市東奈良遺跡にある。大きさや形態は和泉・泉大津市池上曽根遺跡や奈良県唐古・鍵遺跡の例と類似する。樹種は、上がヤブツバキ、下がコナラ亜属。(角南)

237

237　横槌　弥生中期

讃良郡条里遺跡　(D5.3・L20.0)　文献.831

弥生中期の微高地１を形成する、調査範囲東寄りの箇所から出土。

把手の一部を欠くが、把手と叩き部の太さに差があり、段で境界が明確に区分できる。また、全体的に精緻な加工が施されている。樹種はマツ属複維管束亜属で、心持ち材を加工している。

(角南)

238

238　横槌　弥生中期

瓜生堂遺跡　(MD6.2・L23.6)　文献.631

233 田下駄が出土した弥生中期の溝に近接する井戸から、ほぼ完形で出土。

アカガシ亜属の心持ち材で、237 横槌よりも棒状に近く、把手と叩き部の境がゆるやかに変化する。和泉・泉大津市池上曽根遺跡に類品がある。横槌は、弥生前期に北部九州から近畿地方で現れ、中期には関東地方まで普及する。　(角南)

239

239　木製高杯　弥生前期

池島・福万寺遺跡　(rd29.6・H16.2)　文献.761

池島地区の、弥生前期末頃～中期初頭の砂礫～小礫堆積物で構成された層から出土。弥生時代を代表する器種である高杯は、近畿地方では土器以外に木製のものが比較的早い段階に一定量が普及する。本遺跡からも、赤や黒の漆で彩られた彩文高杯が出土している。当例には工具痕が多数残るが、縄属時期を考えると、石器での加工が想定される。樹種はヤマグワ。(角南)

240

240　木製高杯　弥生前期～中期

山賀遺跡　(rd29.0・h21.5)　文献.788

03-1-2区第９面の 1397 溝上半から出土。

溝の伴出品によると下限時期が中期初頭と考えられる。一木で作り出された大形品である。椀形杯部はほぼ同じ厚みを保ち曲線的に開く形に仕上げられている。脚柱は円柱状に長くのび、裾で屈曲し横に拡がる。脚部中央は彫り込んでくぼませている。ヤマグワの横木取りで、木目が美しい。　(角南)

241

241　木製高杯未製品か　弥生前期

山賀遺跡　(H18.0・W33.2)　文献.788

弥生前期の不定形土坑から出土。

樹種はケヤキである。ずんぐりした形を呈しており、全体に加工痕跡が粗々しく残っている。また、横木取りで、力のかかる中心に木心が位置していないため、白としては不適である。このことから、高杯の未製品、土器台などの可能性が示唆される。

(佐藤)

242

242　木製鉢　弥生前期

池島・福万寺遺跡　(w15.5・ℓ30.8)　文献.861

弥生前期の河川から出土。

ヤマグワ製の鉢で高台がある。被熱して炭化している部分がある。伴出遺物は、完形の壺、籠目の痕跡が認められる壺体部破片などの土器、斜方輝石安山岩製の石斧破片、無斑晶安山岩製の砥石である。共伴した壺の形態から、時期が断定された。帰属期の判明する資料として貴重である。

(佐藤)

243

243　木製合子　弥生前期～中期

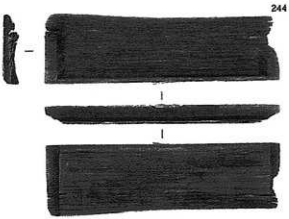
山賀遺跡　(H12.0・w22.6)　文献.788

溝から出土。

一木作りの合子(ごうす)の身。通常、鍋の把手のように口縁と水平に付く紐孔突起は、本例では垂直（縦）方向に作られ、その直上の体部にも孔があけられる。底部の２脚はカーブをもつ長方形でハの字形に付き、推定４脚に復原される。共伴土器から時期が概ね判る木製合子として貴重である。

(佐藤)

244



244　木製槽　弥生

池島・福万寺遺跡　(w26.1・ℓ83.8)　文献.586

弥生時代の水田耕作に伴う流路から出土。

群細時期は不詳。ヒノキ製で、脚は欠失して痕跡のみ残存している。槽は、製作技法から刳物(くりもの)と呼ばれる。具体的な使用方法は不明である。小形甕、甕、鉢、壺、手焙(てあぶり)形、高杯、長頸壺などの土器、直柄横鍬、鋤、棒状品、石鏃、石錘、スクレイパー等が共伴している。

(佐藤)

245

245　杓子・不明品　　弥生前期

讃良郡条里遺跡　（中:H9.2・L24.2）　文献830

3-286土坑から3点まとまって出土。左・中は、船底状底部から両側が外上方にのび、側面に穿孔が施されており、不明木製品である。右の側面には穿孔がなく、横杓子と考えられる。樹種は全てクルミ属。横杓子は縄文時代からみられ、身口縁と柄付け根の上面が水平か鈍角をなす形態、または山形に湾曲した柄が取り付くものがある。（陣内）

246

246　縦杓子未製品　　弥生前期

池島・福万寺遺跡　（w12.2・ℓ16.7）　文献586

10b層から出土。伴出土器等から弥生前期と推定。柄幅は4.8cm。245と異なり、身の口縁に対して柄が直角に取り付く縦杓子状で、身の上面は平らにしているが、まだ刳り抜かれてはいない。樹種はヤマグワ。縦杓子は弥生時代に入って出現したもので、身が縦木取りの心持ち材であることが一般的である。一方、横杓子は身が木心をさけた横木取りの例が多い。（陣内）

247

247　木製匙　　弥生前期

山賀遺跡　（w3.0・ℓ20.9）　文献788

11-2層から出土。

身の口縁を柄の付け根より高く作り、口縁と柄が鈍角に取り付く、弥生前期に類例の多いものである。身の口縁と柄の付け根の上面とがほぼ一直線をなすものと、身の口縁と柄の付け根の上面との間に段差がなく両者が鈍角に取り付くものは、弥生中期以降のものである。樹種はヤマグワ、横木取り。（陣内）

248

248　腰掛座板　　弥生末～古墳初頭

小路遺跡　（w11.9・L49.5）　文献669

第6面の22・23流路から出土。長方形の板材を使用し、長側縁はやや湾曲する。両端部にはほぼ正方形の穿孔があり、脚部を組み合わせるための柄孔（えだあな）と思われ、指物（さしもの）（別材を組み合わせたもの）腰掛と考えられる。刳物（座板と脚とを一木で作り出したもの）腰掛は弥生前期から認められ、指物腰掛は弥生後期から各地で出現するものである。（陣内）

249

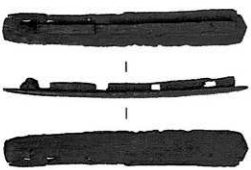
249　鍑（槌）　弥生中期

瓜生堂遺跡　（上：ℓ29.6、下：ℓ26.8）　文献.631

第３面の溝Ｓ 10400 から出土。

鍑は、基本形状として、下面が曲面をなす磨り板と把手からなり、苗代作りで表面をならすものである。両者とも、２cm前後の方形の把手孔が１孔確認できる。下例に残る磨り板の下面は、曲面を呈している。上下２資料を同一個体と考えるなら、後述の 250 のように槌の可能性もある。樹種はニヨウマツ類。　（陣内）

250



250　槌　弥生中期

若江北遺跡　（W12.7・L84.7）　文献.863

第４ａ－３面の 12－２溝上層から出土。

心持ち材を用い滑板と上面の隆起を作り出している。隆起上面がほぼ平坦であるので、横桟を２枚の滑走台の上に置き、隆起に施された４個の縦孔で左右に連結したものと考えられる。槌は、主に水田農作業に使った可能性のある運搬用具である。樹種はスギ。槌は他に、隆起上面が連続する山形の例もある。（陣内）

251

251　背負子　弥生中期

若江北遺跡　（W3.8・ℓ43.4）　文献.863

第４ａ－３面の 12－２溝上層から出土。

背負運搬具の一種である。分かれた枝を利用したもので、部分的に樹皮が残存している。民具の背負子には、角材を長方形あるいは台形に組んで数本の横桟を枘組みして梯子形にしたもの（無爪型）と、その背後に荷受の爪木（腕木）が突出したもの（有爪型）がある。本例は有爪型。樹種はサカキ。　（陣内）

252

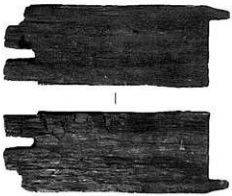
252　一木梯子　弥生後期

瓜生堂遺跡　（W23.3・ℓ81.8）　文献.631

99－５区第 18 面の集石遺構１関係面から出土。

足掛けが２段で、間隔は約 39cm、踏み面の奥行きは約８cmである。垂直に立てると、足掛けの部分が水平で、下部は斜めに切り込まれている。下端はやや丸みをもっておわり、裏面は平坦に仕上げられている。樹種はヒサカキ。梯子は、心持ち材を削り込んだ本例のような一木梯子が一般的である。　（陣内）

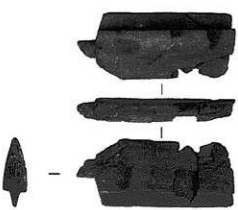
253



254

255

256



253　扉板　　弥生中期

瓜生堂遺跡　　(w27.2・ℓ75.2)　文献.632

6－2層から出土。上端（写真左側）を欠損、下端片側に、断面が半楕円形を呈する軸部が残存する。扉材は、一方の長側辺の上下に、榫（ほぞ）・蟻（あり）放し（扉板の上下面にあり扉軸孔をもつもの）の軸孔に嵌め込む軸を作り出す。扉材の出土例は古墳時代のものが多い。6－2層は弥生中期に形成されたと考えられ、貴重な出土例である。樹種はスギ。　(陣内)

254　木樋　　弥生末～古墳初頭

小路遺跡　　(w23.0・ℓ60.0)　文献.669

27溝から出土。前後2本から構成され、つなげて導水管が組まれていたと思われる。本例はそのうちの東側例。27溝は、木樋を挟んで上流側が池状、下流側が溝状を呈する。溝部は北西側へ水を供給するための水路であったと思われ、木樋は池と溝とを隔てながら接続する役割をはたしていたと思われる。樹種はヤブツバキ。　(陣内)

255　紡織具　　弥生後期

久宝寺遺跡　　(W5.8・L97.4)　文献.759

6－2層から出土。心持ち材で、両端を丸く作り出すために抉りを入れ、わずかに湾曲する。中心部の断面は六角形。織機に最低限必要な構成部材は、経送具（たておくり）、開口具（かいこう）（経糸（たていと）を開口する道具）、綜越具（そうえつぐ）（綜糸（そうえつい）を通す道具）、綜打具（そうだぐ）（通した綜糸を手前に寄せる道具）、布送具（ぬのおくり）である。本例は256のような布送具に相対する経送具の可能性がある。樹種はマツ科。　(陣内)

256　布送具　　弥生中期

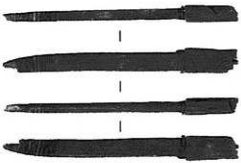
新上小阪遺跡　　(w7.5・ℓ17.3)　文献.601

7b層から出土。経送具は経糸を固定する道具、布送具は織りあげた布を順次送る道具だが、断片だけでは区別しにくい場合がある。本例は一木造りで、長い板の両端が把手状にのびる形式の布送具と考えられ、把手・板状部分の一部が残存。身の断面は矢尻状で、身の片面には横方向と一部斜め方向の擦痕がある。他面は全体に炭化している。樹種はヤマグワ。　(陣内)

257

258

259



260

257　木鎌　　弥生中期・後期

久宝寺遺跡(上)・新上小阪遺跡(下)(上:ℓ7.1, 下:L10.4)文献.759-791

上は6-2層から出土。三稜鎌で、先端が欠損している。身の断面は三角形で、身・茎境にわずかな段を設ける。茎部に桜皮を黒漆で縛り付けている。三稜鎌は弥生後期を主体として出土する。下は11層から出土。細身鎌で、身断面はほぼ円形をなし、茎部に巻かれた樹皮が残存する。細身鎌は弥生前期から5世紀の時期にみられるが、本例は弥生中期に属する。(陣内)

258　木製刺突具　　弥生後期

池島・福万寺遺跡　　(w1.1・ℓ14.3)　文献.861

11-2a層から出土。本例は茎をもつもので、木鎌の細身鎌とも考えられる。ただ一般的な木鎌と違って、中央部が一番太く基部が長い。樹種はヒノキ。漁撈具のヤスの可能性も考えられるが、ヤスは長い棒の一端もしくは両端を尖らせただけのものである。ヤスには先端が1本の単式ヤスと複数の複式ヤスがある。木鎌や針とよく似た形態をもつものもある。　(陣内)

259　刀子状木製品　　弥生中期

新上小阪遺跡　　(w1.7・ℓ16.2)　文献.601

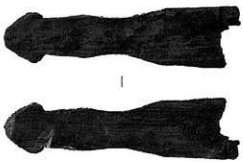
6b層から出土。祭祀具と考えられるものである。先端の一部と、柄の基部が欠損している。一段薄く削りだした刃部先端には、幅2㎜ほどの樹皮が巻かれた状態で一部残存する。本来は鞘として隙間なく施されていたものと考えられる。逆刃である。逆刃の刀子状木製品は、東大阪市鬼虎川遺跡で1点出土している。樹種はカヤ。　(陣内)

260　垂飾形木製品　　弥生前期

山賀遺跡　　(W5.6・L6.3)　文献.788

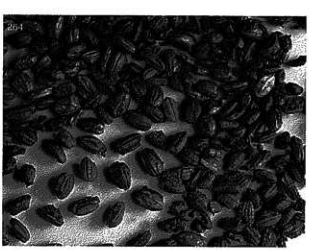
1400土坑1層下部から出土。刻物で縦孔があるつまみ状部が付き、体部下半に深い切り込み、側面に左右に貫通する抉り孔がある。両表面には突帯4本が流水文状に浮かし彫りされ、側面には沈線文4条が施され、生漆が塗布されている。下部の切り込みの奥には円形の極小穴が10数個やや不規則に2列に並び、開口方向へ放射状にあいている。樹種は広葉樹。(陣内)

261



262

263



261　鳥形木製品　　弥生中期

讃良郡条里遺跡　　（ℓ33.2・T1.6）　文献.825

16層に相当する粗砂層から出土。

鳥形木製品には、立体鳥形と平面鳥形がみられる。本例は平面鳥形に相当し、平面・側面観を板状材に表現する。頭部と体部の間には明確な頸部が作り出されている。体部にある孔は欠損しているが、竿を差し込む孔か翼を取り付ける孔かと考えられる。破断面近くに主軸に直交する浅い溝がある。　（陣内）

262　円形頭部板状木製品　　弥生後期

瓜生堂遺跡　　（w10.6・ℓ41.4）　文献.631

99－5区第18面の集石遺構1から出土。円形の頭部、頸状のくびれ部分、長方形の板部からなる。円頭部の中心に2.2×5.0cmの横長方形の孔が、両側から穿孔されている。長方形の板部の上方にある不整形の孔は片側からの穿孔である。両面とも多数の細かい傷がある。祭祀具と考えられる。樹種はヤマグワ。奈良県芝遺跡等から類似した資料が出土している。　（陣内）

263　不明木製品　　弥生後期

瓜生堂遺跡　　（w10.5・ℓ92.5）　文献.631

99－5区第18面の集石遺構1から出土。10個以上の長方形の穴をもつ板状木製品である。穴はすべて貫通せず、1～2cm程度くぼませただけである。樹種はケヤキ。未製品として考えると、鳥籠（とりかご）の形態に似ているが、断面が台形～三角形状を呈し厚みも薄い。民具や絵画資料等々を参照するならば、用途不明品の機能を発見できることもあるので今後に期したい。（陣内）

264　炭化米　　弥生前期

讃良郡条里遺跡（各粒概数：W0.3・L0.5）　文献.830

6－143土坑から出土。遺構底面に炭化物や灰が堆積しており、灰中から炭化米、植物種子類のほかイネ属の珪酸体（けいさんたい）が確認された。炭化米は炭素年代測定を行い、炭素年代で2450±25年（較正年代・2σ：B.C.5～7世紀）の数値が得られている。同遺構から出土した土器は弥生前期でも最古相の資料で、その時期に稲作が伝わっていたことの傍証になる。　（陣内）

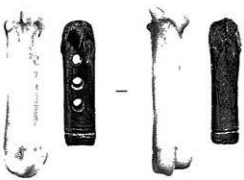
265

265　イノシシ牙製装飾品　　弥生前期～中期
山賀遺跡　　(w1.5・ℓ8.5)　文献.788

東西方向にのびる溝の下部から出土。同遺構からは弥生前期～中期土器や石器、木製品などの多様な遺物が検出されている。

湾曲したイノシシの牙に孔をあけて、アクセサリーにしたものである。この遺物などから、弥生時代の人々が、牙製装飾品や玉などを身に付けて着飾ったと考えられる。　(山口)

266



266　イノシシ中手骨製弓弭状品　弥生前期～中期
山賀遺跡　　(W1.5・L5.2)　文献.788

弥生前期土器が主体として検出される包含層から出土。弓の両端で弦(つる)の輪をかける部分である弓弭(ゆみはず)の形状に類した骨角器である。弥生時代の人々が、骨製の道具を使用したことが良く判る一例である。これは、イノシシの中手骨の部分を加工して製作したもので、写真で白く見えるものは同部位の現生標本を参考に示している。　(山口)

267

267　サメ椎骨加工品　　弥生前期～中期
山賀遺跡　　(MD2.8・H1.4)　文献.788

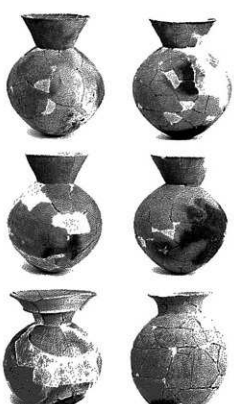
弥生前期～中期初頭の土器が主体として検出される包含層から出土。発見された椎骨(ついこつ)は、脊椎動物の脊柱を連接して構成する骨の一つで、管状の形状が特徴である。この管状骨を詳しく調査した結果、サメの骨であることが明らかとなった。その椎骨の中央の孔が径約3.5㎜と自然の状態よりやや大きく、人為的に加工された遺物のようである。　(山口)

268

268　土器棺墓人乳歯　　弥生中期
岩田遺跡　　(中右:h0.4・W0.8)　文献.875

弥生中期後半の壺と甕と石を組み合わせた土器棺墓から出土。土器棺内で発見されたこれら人歯の鑑定の結果、左上顎の第1乳臼歯、第2乳臼歯、左下顎の第1乳臼歯、右下顎の第1乳臼歯と判明した。歯の状態から、生後6箇月前後の年齢であった。土器棺に納めるということは、子どもの命を聖なるものとみなして崇拝し、重要視したと考えられる。　(山口)

271



269　古墳出土土師器集合　　古墳初頭

久宝寺遺跡　(前中:RD18.2・h28.4)　文献.698・759

29号墳の埋葬施設の上部および周溝から出土。器種には弥生形甕、庄内形甕、直口壺、複合口縁壺、加飾性複合口縁壺などがある。これらの土器は埋葬主体に伴うもののほか、葬送儀礼にかかわる土器も含まれると考えられる。後者に関しては、底部などに穿孔を行った形跡は本資料ではみられない。墳丘における葬送祭祀の初期的様相を示すものであろう。　(西村)

270　古墳出土土師器集合　　古墳前期

久宝寺遺跡　(右端:RD17.3・H35.5)　文献.698・759

15号墳の周溝内を中心に出土。直口壺、複合口縁壺、加飾性複合口縁壺などの器種がある。中・大形の壺では、底部に円形の穿孔をもつものが多い。穿孔は儀器化のために行われるもので、本来は葬送儀礼に伴うものとみられ、墳頂部から周溝に転落した土器であろう。これらには古い要素が多く残され、また器種の多様性が大きな特徴である。　(西村)

271　古墳出土土師器集合　　古墳前期

久宝寺遺跡　(左上:H32.7, 左中:H34.2, 左下:H35.1, 右上:H33.6, 右中:H33.2, 右下:h25.0)　文献.628

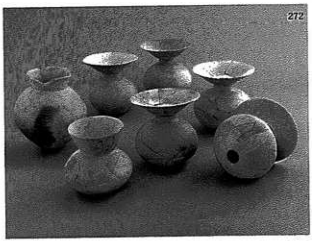
1号墳の墳丘部から出土。

上・中段の直口壺4点は小形方墳の墳頂部四隅に置かれて、いずれも底部付近に小孔が穿たれていた。底部穿孔を施し儀器化した土器を用いて主体部を囲む土器の配置は、後の埴輪祭祀につながる初期の葬送儀礼の姿を表わすものといえる。

久宝寺古墳群では、他にも同様の土器と考えられるものがあるが、その多くが周溝内に転落した状態で検出されている。ほぼ原位置をとどめた本墳は、その使用実態を解明する貴重な事例である。

下段の複合口縁壺と広口壺は、小形の土器棺として転用されたもので、墳裾付近に埋設されていた。

(西村)



272

273

274

275

272　古墳出土土師器集合　古墳前期
久宝寺遺跡　(左端:RD12.8・H23.7)　文献.698・759

22号墳の周溝内を中心に出土。直口壺、複合口縁壺などの器種があり、弥生系のものと布留系の精製のものに大別できる。布留系の直口壺、複合口縁壺は底部に円形穿孔をもち、一部に朱彩が残る。精製品は墳頂部における葬送祭祀に用いられたとみられ、15号墳（270）と比べ安定して複合口縁壺が含まれる。これらは後に朝顔形埴輪に変性して存続した。　(西村)

273　土師器（複合口縁壺）　古墳初頭
小路遺跡　(左:h21.2, 右:h17.0)　文献.638

前方後方形周溝墓の周溝から出土。直線文、波状文、円形浮文など弥生系の古い意匠で口縁部や肩部を飾った加飾性複合口縁壺である。弥生後期にみられる複合口縁壺は、古墳時代初頭から前期にかけて形態も洗練されていく。特に葬送祭祀と強くかかわりながら発達をとげる特徴的な器種である。本例は無文様化にいたるまでの途上段階を示すものである。　(西村)

274　東海産壺・阿波産壺　古墳初頭～前期
小阪合遺跡　(左:H31.5, 右:H36.0)　文献.641・704

左は包含層、右は土坑から出土。ともに他地域から畿内地方に搬入された外来系土器である。左は柳ケ坪型壺と呼ばれる東海地方の有段口縁壺で、口縁部内外面は羽状の列点文、肩部は櫛描直線文で飾る。右は阿波系の複合口縁壺である。古墳時代初頭以降、人の移動を含めた文化交流が活発となり、畿内には西日本を主とした各地から土器が搬入、集積される。　(西村)

275　北陸産壺・阿波産壺　古墳初頭～前期
久宝寺遺跡　(左:H27.8, 右:H16.9)　文献.665・759

左は井戸、右は土坑から出土。

ともに他地域から畿内地方に搬入された外来系土器である。左は北陸系の複合口縁壺である。口縁部外面は直線文で飾る。右は阿波系の広口壺である。両者とも古墳時代初頭の畿内系土器群中に含まれる。一括資料内の共伴土器を比較検討することにより、遠隔地間の土器の時間的な併行関係が明らかになる。　(西村)

276

277

278

279

276　讃岐産複合口縁壺　古墳前期
小阪合遺跡　(RD25.8・h56.9)　文献.704

土坑から出土。讃岐地域から搬入された大形の複合口縁壺である。本器種の主要な用途は、乳幼児用の棺体で、畿内地方でも広く用いられた。讃岐はその重要な供給地である。本例は土坑内に口縁部を下にした状態で埋められていた。体部上半部には、焼成後穿孔の円孔が5箇所ある。この場合の用途は明確ではないが、何らかの祭祀にかかわるものであろう。　(西村)

277　讃岐産複合口縁壺　古墳前期
久宝寺遺跡　(RD22.4・H61.6)　文献.628

1号墳の墳頂部に設置された3基の主体部中の一つ、3号主体部から出土。讃岐地域から搬入された大形の複合口縁壺で、乳幼児用の土器棺として用いられたものである。体部中央に小さな孔を穿つ。これを棺体とし、庄内系大形甕の上半部を打ち欠いたものを被せて棺蓋として組み合わせ、墓壙内にほぼ横倒しの状態で埋設されていた。　(西村)

278　讃岐産複合口縁壺　古墳初頭〜前期
久宝寺遺跡　(rd22.1・H72.0)　文献.759

溝から出土。

胎土は香川県香東川下流域産の土の特徴があり、讃岐地域から搬入された大形の複合口縁壺である。破砕を受けた状態で溝内から検出された。この種の壺の一般的な用途は土器棺であるが、本例は出土状況からみて、八尾市小阪合遺跡例(276)のように何らかの祭祀行為に関連した可能性がある。　(西村)

279　異種胎土使用壺　古墳前期
三宅西遺跡　(md14.1・h4.9)　文献.832

南から北へのびる溝から出土。

通有の複合口縁壺は緻密な粘土を用い、明橙色を呈する個体が多い。しかし本例は、角閃石を含む生駒山西麓産の胎土と、角閃石を含まない胎土を交互に用いている点において特異である。同様の例は八尾市亀井遺跡、藤井寺・柏原市船橋遺跡などで散見される。在地で生産された作例であろう。　(西村)

280

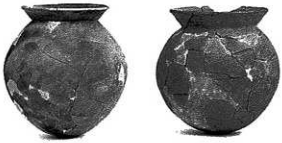
280　土師器（弥生形台付甕）　古墳初頭

久宝寺遺跡　(rd12.2・H22.1)　文献.665

井戸から出土。

通有の畿内系弥生形甕に脚台を付加した器種である。本器種出現の背景には、この頃から活発化する各地の土器交流、特に東海系台付甕などの影響や、煮炊き法の変化などの要因が考えられる。古墳時代初頭の古い段階にみられるが、安定した器種としては定着しなかったようである。　(西村)

281



281　土師器（庄内形甕）　古墳前期

久宝寺遺跡　(左:H28.8, 右:H20.4)　文献.628

1号墳の周溝から出土。庄内形甕は古墳時代初頭(庄内式期）に出現し、古墳前期（布留式期）中段階まで存続する。活発化する各地の土器交流を象徴するように、畿内系甕と吉備系甕の技法の融合により誕生した器種とされる。製作にあたっては、生駒山西麓で産する角閃石を多く含んだ粘土が選択的に用いられた。器壁が薄く煮沸性能に優れている。　(西村)

282

282　阿波産甕　古墳初頭

久宝寺遺跡　(RD13.2・H25.4)　文献.759

土器集積から出土。

阿波地域から搬入された外来系土器である。庄内式土器のほとんど存在しない、弥生系の土器群中に含まれていた。外面ハケメ、内面ケズリで仕上げた通有の甕である。古墳時代初頭前後には瀬戸内地方東部の土器が畿内地方に流入するが、これもその一つである。　(西村)

283

283　讃岐産甕　古墳初頭

久宝寺遺跡　(rd12.6・h14.9)　文献.759

流路から出土。

讃岐地域から搬入された外来系土器である。外面ハケメ、内面ケズリで仕上げた通有の甕である。同流路内からは、讃岐のほかに山陰、近江、東海等の地方から搬入された外来系土器が出土しており、当時の文化交流の範囲の一端を窺うことができる。　(西村)

284

284　東海産甕　古墳初頭

久宝寺遺跡　(rd15.6・H24.4)　文献.759

49号墳の周溝から出土。

東海地方から搬入された外来系土器である。断面形がSの字状に湾曲した口縁部（S字状口縁）をもつ。また体部外面はハケメで仕上げ、底部に脚台を備えている。畿内系の伝統的な甕は基本的に脚台をもたないが、東海から東日本にかけての地方では脚台付きの甕を用いた。　(西村)

285

285　阿波産甕　古墳前期

小阪合遺跡　(rd15.0・H21.8)　文献.641

包含層から出土。

阿波地域から搬入された外来系土器である。外面はハケメ、内面はケズリで仕上げた通有の甕である。古墳時代初頭前後には瀬戸内地方東部の土器が畿内地方に流入するが、これもその一つである。備讃瀬戸を含む瀬戸内東部域の土器の動態と、庄内式の成立とは密接な関係性がある。　(西村)

286

286　吉備産甕　古墳初頭

小阪合遺跡　(左:rd14.0, 右:rd13.2)　文献.641

包含層から出土。吉備地域から搬入された古墳時代初頭の外来系土器である。櫛描平行文で飾る立ち上がった口縁部と、体部内面ケズリが特徴である。古墳時代初頭の畿内地方において、吉備系土器の存在は古式土師器の成立に多大な影響を与えた。吉備系甕は畿内各地で出土するが、特に中河内地域での出土量は突出している。　(西村)

287

287　山陰産甕　古墳前期

小阪合遺跡　(rd14.4・H21.6)　文献.641

包含層から出土。山陰地方から搬入された外来系土器である。内面ケズリの複合口縁壺で、肩部を波状文で飾る。畿内地方の古式土師器の成立には、特に古墳時代初頭（庄内式期）は吉備系の、前期（布留式期）は山陰系の影響が強い。これらは畿内での変化であり、吉備・山陰地方における在地の土器そのものに大きな変化はみられない。　(西村)

288

288　土師器（有稜高杯）　古墳初頭
久宝寺遺跡　（RD22.8・H15.9）　文献.759

6.8 × 7.5 mを測る隅丸方形墳墓である48号墳の北西周溝から出土。明瞭な段をもって屈曲しながら開く杯部は、内面の下段に横方向、上段に放射状の細かいミガキを施す。また、見込みには脚部への貫通孔が焼成前に穿たれており、当初から非日常用器として製作されたことが判る。庄内式期新段階を代表する典型的な高杯の形状である。（亀井）

289

289　土師器（椀形高杯）　古墳初頭
久宝寺遺跡　（RD12.0・H11.1）　文献.759

一辺約3.5 mを測る方形墳墓である34号墳の北西周溝付近から出土。他の多数の土器とともに破砕された状態で見つかった。半球形の小振りな杯部に、やや反り気味に大きく開く脚裾部をもつ。内外面ともに縦方向のミガキ調整を施し、脚端部に刺突文をめぐらせる。第Ⅴ様式（弥生後期）系甕が多く共伴しており、庄内式期古段階のものと考えられる。（亀井）

290

290　東海産（系）高杯　古墳初頭
久宝寺遺跡　（RD20.9・H14.9）　文献.665

4.6 × 4.3 mを測る隅丸方形の井戸から出土。井戸は深さ1.4 mで、擂鉢（すりばち）状にくぼみ、埋土の中層から大量の土器、下層からは木製品や石製品が見つかった。

稜線をもちながら直線的に開く杯部に、わずかに膨らむ円錐形の脚部が取り付く。このような特徴的な形状は、東海系の影響を強く受けたものである。

（亀井）

291

291　東海産高杯　古墳初頭
久宝寺遺跡　（rd9.7・h10.0）　文献.759

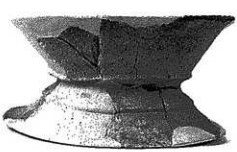
包含層から出土。底面を水平に整形した特異な形状の椀形杯部と、扁平に大きく開く脚部をもつ。杯部外面に沈線文帯と刺突鋸歯文、脚部外面に沈線文帯を施す。杯部と脚部は直接接合しないが、胎土や文様から同一個体と判断した。在地土器と異なる乳白色の特徴的な胎土から、西濃地域産の搬入品と判った。上例とともに地域間交流を考えるうえで重要である。（亀井）

292

293

294

295



292　土師器（加飾有段器台）　古墳初頭
八尾南遺跡　(md16.3・h15.0)　文献.797

一辺 4.6 ～ 4.7 m の方形周溝墓 14 の東側周溝中層から出土。杯部下半に直線文と波状文による加飾を行う。口縁端部と脚裾部を欠損するが、同一個体の可能性がある鋸歯様の波状文を施す口縁部が別に出土する。弥生時代末に出現する加飾性豊かな土器群のなかの一つであり、当時の社会や精神文化を知るうえで貴重な資料である。　(亀井)

293　淡路産器台　古墳初頭
八尾南遺跡　(rd16.5・H20.0)　文献.797

径 6.3 ～ 7.5 m の円形周溝墓 22 の東側周溝中層から出土。外面に擬凹線を施す受部が二重口縁状に立ち上がり、直線的に長く開く脚部をもつ。特異形状と胎土により淡路地域からの搬入品と考えられる。墳墓出土の他の庄内式期古段階の遺物に比べてやや時期が新しいことから、造墓完了後も一定期間、継続的に儀礼行為の行われた可能性があると考えられている。(亀井)

294　北陸産装飾器台　古墳初頭
久宝寺遺跡　(rd19.9・h11.7)　文献.759

墳墓盛土の除去面から出土。遺構は確認できなかったが、大量の土器が狭い範囲で一括出土したので、土坑内に集積された遺物群の可能性が高い。復原の結果、脚部を欠損した器台の受部と判明した。わずかな破片のみだが、受部の 2 段整形や涙滴状の透かし孔、下段受部の垂下口縁、胎土の特徴から、北陸地方からの搬入品と考えられ交流を知る貴重例である。　(亀井)

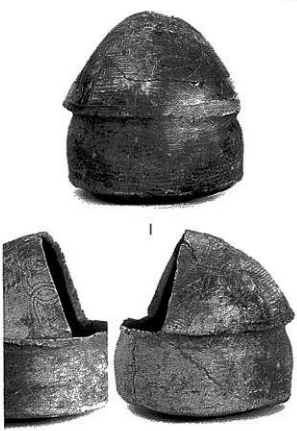
295　山陰産（系）鼓形器台　古墳初頭～前期
尺度遺跡　(rd17.1・H8.7)　文献.635

深さ約 1.3 m を測る長楕円形の 43 井戸の中層から出土。本器種は、弥生時代末から古墳時代初頭にかけて、山陰地方を中心に特徴的に現れることから、出土地は同地方とのかかわりがあったと考えられる。同時期に吉備地域で発達する特殊器台とあわせ、円筒埴輪の出現や古墳時代の始まりを考えるうえで重要である。　(亀井)

296

297

298



296　近江産鉢　古墳初頭
讃良郡条里遺跡　(RD17.4・H13.6)　文献.830

包含層から出土。体部中位に1条の貼付突帯をもち、そこから受口状口縁にかけて、列点・沈線・波状文の加飾が施される。その特徴的な形態により、近江地域からの搬入品と考えられる。出土地周辺は当該期に湿地化したと考えられ、隣接する微高地上に祭祀行為の痕跡があることから、他地域との交流や当時の祭祀方法を考えるうえで注目すべき遺物である。　(亀井)

297　外来系台付鉢　古墳初頭～前期
久宝寺遺跡　(RD30.4・H16.8)　文献.759

全長約33.5mを測る前方後方形を呈する44号墳の西側周溝付近から出土。内外面ともにミガキ調整を施す精緻な大形台付鉢である。口縁部内外面が段状に肥厚し、外面には12条の沈線と、わずかに突出した下端部に刺突文をめぐらせる。管見では同一形態鉢の出土例がなく、類似した施文が丹後～北陸地方に多くみられることから、それらの模倣品と推測する。(亀井)

298　線刻画のある土師器(手焙形)　古墳初頭
久宝寺遺跡　(RD14.7・H16.0)　文献.720・721・759

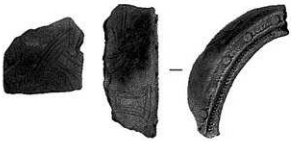
297と同じ前方後方形である44号墳の周溝肩や周堤から出土。

全体をタタキにより整形した後、覆部の端部に櫛歯文、全体に線刻画で加飾する。線刻画は3種の事物に分けられる。

覆部の前方縁辺は、撥(ばち)形と縄紐形を交互に連続して描いており、柵状のものを表現していると考えられる。覆部の中央付近には、入れ子の曲尺(かねじゃく)文を交互につなげた板状のものが描かれており、板橋や桟橋を表現していると推測する。この左右には、長く湾曲する嘴をもつ鳥形が描かれており、人里の水辺に住む種類としてはトキを描いたものである可能性が高い。また、左右2羽の形態が異なる点は、立姿と伏姿を描き分けたものと考えられる。当時の生活環境や人々の感性を知るうえで非常に貴重な絵画資料といえる。

(亀井)

299



299　線刻画のある土師器（手焙形）　古墳初頭
久宝寺遺跡　(h10.1・w5.0)　文献.759
前方後方形を呈する44号墳の墳丘盛土を除去した下面から出土。覆部の破片が2点であるが、線刻の状態から同一個体と推測できる。そのうち覆部前端部の破片（右）は、細い端面を沈線で縦に区分し、内側に2列の竹管文、外側に竹管文と浮文を交互に施す。外面は頂部付近に鋸歯文と、その周囲に他の破片（左）と同様の文様が入った撥形を描く。　(亀井)

300

300　線刻画のある土師器（手焙形）　古墳初頭
池島・福万寺遺跡　(RD21.6・h11.6)　文献.761
自然地形である3低地の埋土から出土。身部を欠損する覆部のみであるが、外面のほぼ全体に波状文、直線文、曲線文で加飾する。円形や蕨手状、区画や対称などの文様構成は認められるが、具体的な図像ではなく、抽象的なものと考えられる。298・299と同様、文字をもたない時代を知るうえで重要な手掛かりとなる資料である。　(亀井)

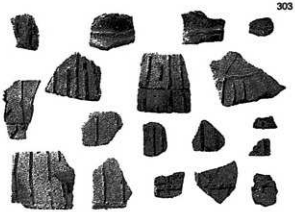
301

301　皮袋形土器　古墳初頭
久宝寺遺跡　(h6.0・w11.5)　文献.759
弥生時代末～古墳時代初頭の落込みから出土。上部に口をもち、側面観は裾へ拡がる撥形をなす。下端に粘土の合わせ目を故意に残すなど、原形を忠実に再現する。片方の隅には注口（吸口）の小孔がある。本遺跡では他に、同型同大品と、上部に皮紐じ痕を表現した別型例が各1点出土している。通常では残存しがたい皮袋の形状や種類を知るうえで貴重となる。(亀井)

302

302　三連壺　古墳前期
池島・福万寺遺跡　(rd5.0・h4.5)　文献.862
深さ約30cmを測る東西に長い687落込みから出土。本例は二連分の体部のみの破片であるが、その中位に認められる穿孔の位置から、三連壺に復原が可能である。小形品で特異な形状や複合口縁を呈すること、また、他の事例では墓域からの出土が多いことから、葬送儀礼などのような祭祀に使用された特殊な土器と考えられる。　(亀井)

303



303　被籠状突帯壺　古墳初頭

八尾南遺跡　(rd16.0・h14.8)　文献.797

深さ約 20cmを測る落込み 2 から出土。細片のみの出土であるが、復原により、直線的に開く口縁部と円形体部を有すると考えられる。頸部に鈍い突帯と肩部に直線文をめぐらせており、体部外面に刻目突帯が格子状に配されることから、「被籠状」と呼称される。東日本を中心に 20 数件の出土例が知られるのみであり、近畿地方や府下では貴重な資料といえる。(亀井)

304

304　籠目土器（土器棺転用）　古墳初頭

久宝寺遺跡　(rd13.4・H42.8)　文献.759

密集する墳墓間の土器棺墓から出土。本例を棺身、他の壺体部片を棺蓋として使用されていた。体部外面に残存する調整の痕跡から、籠容器により底部を成形した状態のまま、タタキ締めながら体部を成形し、籠に覆われていない下半部のタタキメを磨り消したが、上部の重みに耐えられず、籠がひしゃげたと推測できる。一連の製作過程が判る貴重な資料である。(亀井)

305

305　籠目土器　古墳初頭

久宝寺遺跡　(rd13.7・H5.6)　文献.665

最深部で約 2.2 m を測る自然流路を利用した 405 大溝から出土。

底面は 2 本 1 単位の綯代(あじろ)編み、体部外面は「ヨコ添えもじり編み（右撚り）」の籠目圧痕を残す鉢である。溝内からは大量の遺物が出土したが、特に北西岸と溝底の一帯では、同じ庄内式古段階のおびただしい数の土器や木製品が見つかった。　(亀井)

306

306　籠目土器　古墳初頭か

八尾南遺跡　(rd19.6・H7.6)　文献.797

深さ 20 ～ 40cmを測る大形土坑の、焼土塊を含む埋土から出土。底部は一辺約 4.5cmの正方形、口縁部はほぼ正円形を呈する鉢である。底面では不明瞭だが、体部外面の全体に「左上がりヨコ添えもじり編み」の籠目圧痕が遺存する。305 と同様、焼成前に編み籠を用いて土器を成形製作した痕跡であり、当時の土器作りの一端を窺い知る貴重な資料である。　(亀井)

307

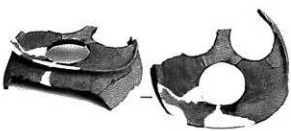
307　土師器一括　古墳中期

小阪合遺跡　（中央奥:RD28.6・H21.8）　文献.641

古墳時代の遺構面に土器が集積された状態で出土。

須恵器の細片をのぞくと、土師器の甕と高杯のみで構成される土器群である。高杯は脚を欠く個体が主体であり、大形の杯部内に小形の杯部を重ねるなど、意識的な土器の配置が復原される。同種の土器を複数用いており、祭祀的な性格が推測される。同じ時期の土師器の組成を知るうえでも重要である。　（森本）

308



308　土師器（移動式三口竈）　古墳中期

讃良郡条里遺跡　（h18.0・w48.0）　文献.825

谷部傾斜地から出土。残存部位は、掛口(かけぐち)が配される天井部から胴部上半。平坦な天井部の端部に凸状の縁をめぐらし、焚口(たきぐち)では庇(ひさし)となる。掛口は焚口側に1箇所、奥側に並列して2箇所、計3箇所に配される。掛口の径はいずれも15cm前後と小振りで、小形製品用の竈(かまど)と推定される。類例を知らないが、その系譜については朝鮮半島にある可能性が高い。　（岡戸）

309

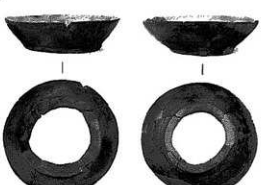
309　土師器（須恵器模倣器台）　古墳中期

上私部遺跡　（md13.0・h17.0）　文献.754

古墳中期の集落域に設けられた溝から出土。

土師器の器台とされる。幅広の突帯で区画される円筒部分に、方形の透かし孔を4方向、交互に配している。須恵器の筒形器台を模した可能性があるが、突帯の様子や表面調整などは大きく異なる。同じ溝からは初期須恵器の315高杯形器台や土師器高杯がまとまって出土しており、祭祀的性格が認められる。　（森本）

310

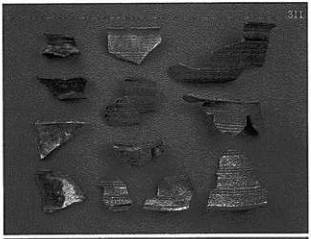


310　土師器（不明台形）　古墳中期～飛鳥

有池遺跡　（左:RD26.8, 右:RD28.0）　文献.755

古墳中期～飛鳥時代初頭の竪穴建物から、土師器甕などとともに出土。

土師器の一種といえるが、底部の抜けた浅い鉢形の器形で、類例をみない形態といえる。輪台状の底面は平坦であり、据え置いての使用が想定される。また外面には煤の付着があり住居内での火処に据えられたとみられるが、具体的な用途などは不明である。（森本）



311　須恵器一括　古墳中期

上の山遺跡(右列一部)・茄子作遺跡(他)(右端:rd48.5)文献.758・799

茄子作遺跡と上の山遺跡間の谷を中心に初期須恵器がまとまって出土。写真の大甕、壺、高杯形器台のほか、鉢、把手付椀など多種にわたる。溶着資料や焼台なども出土し、近接地に窯跡の存在が推測される。列島での須恵器生産が始まって間もない5世紀前半に、小規模な須恵器窯が各地に点在していたことを示す資料といえる。　(森本)

312　須恵器・陶質土器・土師器一括　古墳中期

三宅西遺跡　(右奥:rd18.0・H30.2)　文献.832

古墳中期の流路から、5世紀中葉を中心とする土器、木製品がまとまって出土。

初期須恵器の蓋杯、高杯、甕、鼓、土師器の高杯、壺、甕、韓式系土器の甕、百済系陶質土器の瓶など、多様な器種構成をみせる。近傍に集落遺構はみられないが、完形に復原された土器が多く、流路にかかわる祭祀に用いられた可能性も指摘される。　(森本)

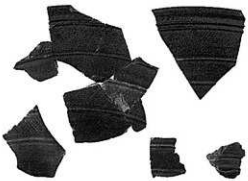
313　古墳出土品一括　古墳後期

奥山遺跡　(右奥:RD22.3・H49.1)文献.762

古墳後期の横穴式石室墳（1号墳）から出土。

装身具類、武器類、馬具類、農工具類、土器類があり、一般的な後期古墳の副葬品組成を示す。装身具には耳環、管玉、ガラス玉があり、耳環は合計11点あることから6体以上の埋葬が想定される。武器には鉄鏃や大刀の鍔のほか、鉄鏃とともに弓の弭付近に装着された両頭金具があり、弓の副葬を具体的に示す資料として貴重である。馬具には鉄製の素環鉸板や貫金具などがある。土器類は須恵器と土師器があり、須恵器の量が多い。なかでも有蓋高杯が多く出土しており、葬送儀礼における中心的な土器であったことが推測される。須恵器の甕は周溝から出土しており、石室の閉塞儀礼に用いられた可能性がある。追葬時の副葬品の片付けや後世の石室の破壊に伴い、それぞれの遺物は原位置を保った出土状況を示しているとはいいがたいが、追葬が顕著にみられる後期古墳の副葬品組成を知るうえで貴重な資料となる。　(森本)

314



314　須恵器（高杯形器台）　古墳中期

勝部遺跡　(rd37.8・h17.7)　文献.625

古墳時代の集落域上層の中世作土層から出土。

初期須恵器の高杯形器台で、杯部が残存する。焼成の良好な個体で、口縁端部を上方へつまみ上げる形態や、外面の突帯構成、杯部外面に鋸歯文や斜格子文の繊細な文様を施す点において、韓国の陶質土器器台との類似をみることができる。最古段階の高杯形器台の一つである。　(森本)

315

315　須恵器（高杯形器台）　古墳中期

上私部遺跡　(rd38.0・h17.2)　文献.754

309と同じ溝から出土。初期須恵器の高杯形器台で、杯部のみ遺存する。外面はあまりシャープでない突帯により区画され、該期に特徴的なヘラ描きによる鋸歯文、格子文が施されるが、314と比べても全体的に造形、施文はあまく、焼成もやや軟質である。生産地など不明であるが、須恵器定型化以前の多様な様相を示す資料といえる。　(森本)

316

316　須恵器（高杯形器台）　古墳中期

私部南遺跡　(rd35.4・h12.8)　文献.865

古墳中期～後期の居住域に接する谷から出土。

初期須恵器の高杯形器台で、杯部と、同一個体とおぼしき脚端部がある。直線状に開く杯部外面には、ゆるやかな突帯で区画した文様帯に鋸歯文と平行文が配置される。脚部もゆるやかな突帯で区画され、波状文が施される。初期須恵器段階には、居住域の祭祀に器台が用いられる例が多い。　(森本)

317

317　須恵器（高杯形器台）　古墳中期

讃良郡条里遺跡　(左:h9.0, 右:h10.8)　文献.825

古墳中期～後期に営まれた居住域縁辺の谷状地形から出土。初期須恵器の高杯形器台で、ともに脚部に近い杯部の底付近にあたる。右例には、上向きの鋸歯文と円形文が交互に配置され、左例には、波状文の下位に列点文が綾杉状に施される。波状・列点文による加飾は311中の器台や大東市堂山1号墳例にもあり、北河内地域で生産された須恵器の可能性が高い。(森本)

318

319

320

321

318　須恵器（筒形器台）　古墳中期
池島・福万寺遺跡　（rd14.3・H43.4）　文献.586

平安時代の作土層から出土。

ほぼ完形に復原された須恵器の筒形器台で、筒部には方形透かし孔を４段８方向に、脚部は方形１段、三角形２段の透かし孔を４方向に配する。下層で確認された古墳時代集落に伴う土器と考えられ、他に高杯形器台も確認されている。須恵器器台は古墳からの出土が一般的で、集落からの検出は珍しい。　（森本）

319　須恵器（高杯形器台）　古墳後期
駒ヶ谷遺跡　（RD39.4・H48.2）　文献.603

古墳後期の前方後円墳、蔵塚（くらづか）古墳に近い溝から出土。ほぼ完形に復原された須恵器の高杯形器台で、椀形の杯部に長脚化した脚部をもつ。突帯で区画された文様帯に施された脚部の透かし孔は、上３段が方形、下１段が三角形で、６方向に配される。蔵塚古墳と時期的には齟齬はなく、その葬送儀礼に用いられた須恵器の可能性が高い。　（森本）

320　須恵器（土師器器形壺）　古墳中期
讃良郡条里遺跡　（RD17.6・H39.4）　文献.831

323と同じ流路から出土。口縁ならびに体部の一部を欠く須恵器であるが、その形態は土師器の二重口縁壺に近い。体部の成形にタタキを用いた後すり消しており、須恵器と土師器の成形技法が混在する。窯（かまど）で焼成された土師器ということができ、新来の須恵器生産に在来の土師器工人も参画し、本来土師器である器形もわずかに窯で生産されたようである。　（森本）

321　須恵器（甕・井戸枠転用）　古墳中期
私部南遺跡　（RD53.5・h97.2）　文献.865

古墳中期～後期に営まれた居住域の縁辺に位置する土坑から出土。須恵器の大甕で、底部を欠いており、井戸枠として土坑内に設置された可能性がある。頸部外面にはハケメ、体部外面にはタタキ痕跡を残すが、内面の当て具痕は丁寧に消されている。須恵器の大甕は貯蔵具として重宝されたが、再利用も行われていたことが判る資料である。　（森本）

322

322　須恵器（土師器等器形甕）　古墳中期
上私部遺跡　(RD20.8・H30.1)　文献.754

6世紀代の掘立柱建物群で構成される居住域を区画する溝から出土。須恵器の甕と呼ぶべき器形を示すが、その形態は土師器あるいは韓式系土器の長胴甕に類似し、須恵器の形態ではない。体部をタタキにより成形しているものの、器壁は厚いままで、あくまで土師器ないしは韓式系土器の形状のみを模した須恵器として製作されたものとみなされる。　(森本)

323

323　須恵器（有蓋高杯）　古墳中期
讃良郡条里遺跡　(RD10.0・H10.7)　文献.831

流路に投棄された状態で出土。口縁の一部を欠くほかは完形で遺存する。短く立ち上がる口縁部をもつ杯部と、ゆるやかな突帯をめぐらし三角形の透かし孔を3方に配する脚部からなる。日本列島で生産された初期須恵器と考えられるが、類似する形態は朝鮮半島加耶地域にもあり、瀬戸内海沿岸にも類例が分布する。生産地についてはさらなる検討を要する。　(森本)

324

324　須恵器（無蓋高杯）　古墳中期
小阪合遺跡　(rd15.3・H10.0)　文献.641

古墳時代～古代の包含層から出土。

須恵器の無蓋高杯で、詳細な時期は不明だが、初期須恵器段階のものである。杯部と脚部の外面には明瞭な突帯をめぐらすが、脚部には透かし孔を施さない。初期須恵器の無蓋高杯には波状文などで加飾する装飾性の高いものが目立つが、本例のような突帯以外に装飾のない簡素なものも認められる。　(森本)

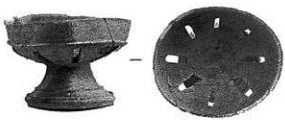
325

325　須恵器（無蓋高杯）　古墳中期
太秦古墳群　(左:H10.2, 右:H9.2)　文献.801

初期群集墳の周溝から出土。

ともに初期須恵器に属する高杯で、左は324に類似する簡素な作りの無蓋高杯である。右は椀形の杯部に突帯のない脚部をもち、同時期の土師器高杯に類似した形態を示す。土師器を模した須恵器の一種で、北河内地域に類例が多い。窯跡は未確認だが、周辺域で生産された須恵器の可能性がある。　(森本)

326



326　須恵器（異形無蓋高杯）　古墳中期
太秦古墳群　（RD12.2・H7.8）　文献.624

初期群集墳中の方墳（Ｋ３号墳）周溝から完形で出土。須恵器の高杯で、須恵器杯身・杯蓋などとともに墳丘上に配置されていたものが、周溝に転落したか。脚部に透かし孔はないが、杯部の底部にややいびつな長方形のスリット８個を放射線状に施している。飲食物の供膳には適さない器形であり、特殊な高杯といえる。（森本）

327

327　須恵器（鼎）　古墳中期
私部南遺跡　（rd10.2・H15.2）　文献.857

溝から出土。体部は完形で、上半部に自然釉が認められる。内面に回転ナデ、外面に回転ナデ、タタキを施す。口縁部下半および胴部の外面は波状文で丁寧に加飾される。胎土は枚方市茄子作窯（推定）のものに類似している。溝から見つかった須恵器には、他に樽形鼎や把手付鉢などの器種がみられる。また韓式系土器の甕、鍑などもこの溝から出土している。（飯田）

328

328　須恵器（把手付椀）　古墳中期
私部南遺跡　（RD15.0・H18.7）　文献.865

初期須恵器が多く見つかった谷部にある土坑から出土。完形品で、土坑の帰属時期を示す資料である。体部には３条の凸線をめぐらせる。底部外面には手持ちで横方向のヘラケズリを施したのちナデを施し、内面はナデで調整する。調査地では韓式系土器や、鍛冶工房を伴う竪穴建物が検出されており、古墳中期を通して渡来人の存在が窺われる。（飯田）

329

329　須恵器（把手付椀）　古墳中期
上の山遺跡　（左:h7.3, 右:h6.7）　文献.758

ともに流路から出土。左は、把手と口縁の一部を欠損。外面中央には突帯とヘラ描き沈線で区画した文様帯に列点文を施す。底部に植物の繊維痕が残る。右は、外面にヨコナデを施し波状文などはみられない。なお、本遺跡や西接の枚方市茄子作遺跡ではＴＫ73型式期の須恵器に焼け歪みや溶着のある例が出土し、近隣に窯が存在する可能性が指摘されている。（飯田）

330

330　須恵器（把手付椀）　古墳中期

讃良郡条里遺跡　(rd11.9・H13.2)　文献.860

竪穴建物の床面直上から出土。把手部と体部の半分弱を欠く。体部外面には、5本単位の櫛描波状文を沈線で区画された文様帯に各2段施し、最下段のみは施文後に把手を付けるための回転ナデ調整により波状文が消えている。なお、この須恵器が出土した竪穴建物は面積約44㎡をはかり、近隣の四條畷市部屋北遺跡例を含めても大形の部類に属する建物である。(飯田)

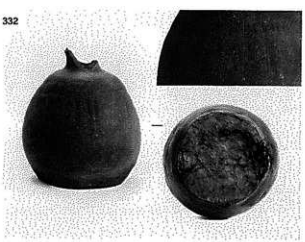
331

331　陶質土器　古墳前期

池島・福万寺遺跡　(rd13.9・H16.9)　文献.872

井戸の最下層から出土。やや丸みをおびた平底を呈する。外面は、口縁部から頸部にはヨコナデ、肩部から胴部にはカキ目状の調整痕がみられ、下半部はタタキの後、ナデを施す。内面はナデで調整し、体部上半には当て具痕がわずかに残る。検出時には、4世紀後半の土師器甕が上に載っていた。朝鮮半島南部の釜山や金海地域に類例が求められるようである。　(飯田)

332



332　陶質土器（百済産）　古墳中期

三宅西遺跡　(bd9.6・h14.4)　文献.832

流路から出土。ほぼ完形だが、口縁部を欠く。外面は、タタキと思われる縦方向の調整をした後ヨコナデの調整を施し、底部付近ではヘラケズリによる調整を行う。内面はナデで仕上げる。朝鮮半島の百済地域の古墳出土品に類例があり、百済地域から持ち込まれたものと考えられる。なお、流路出土の須恵器にはＴＫ216～ＴＫ208型式期のものが多くみられる。(飯田)

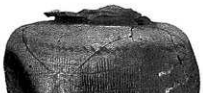
333

333　陶質土器（鳥足文タタキ）　古墳中期

讃良郡条里遺跡　(左:h8.5, 右:h9.0)　文献.825

2片とも落込みから出土。甕の体部片と考えられ、外面には鳥足文のタタキを施している。共伴した須恵器により5世紀後半のものと考えられる。なお、落込みからは他に、平底鉢などの韓式系土器が多数出土している。ただし付近では、当該期には2棟の建物と井戸や溝が確認されているのみであり、明確な集落が形成されるのは6世紀になってからである。　(飯田)

334



334　須恵器（甕・韓式系）　古墳中期
讃良郡条里遺跡　(md26.2・h20.2)　文献825

333と同じ落込みから出土。口縁部と底部を欠く。肩部には波状文をめぐらす。胴部には縦方向の平行タタキを施した後に、横方向に4条沈線を螺旋状にめぐらす。このような調整の特徴をもつ土器は、近隣の四條畷市鄙屋北遺跡でも出土している。なお、落込みからは朝鮮半島系土器のほか、折り曲げられた鉄鏃など祭祀関連の遺物が少なからず出土している。（飯田）

335

335　須恵器（甕・韓式系）　古墳中期
讃良郡条里遺跡　(RD14.5・h31.0)　文献831

流路から出土。胴部の一部などを欠くがほぼ完形に復原できる。口縁部はあまり外反せず、体部は球形を呈する。体部外面には格子目タタキを施し、内面にはナデやヨコナデの調整を行っている。陶質土器に近似する形態を残す須恵器といえる。なお、流路からは他に土器や木製品など5世紀中葉～6世紀前半頃の遺物が大量に出土している。（飯田）

336

336　須恵器（甕・韓式系）　古墳中期
植松遺跡　(RD17.1・H29.0)　文献789

自然流路の堆積砂層から出土。ほぼ完形だが、口縁の端部を一部欠く。外面には底部付近から上部にかけ全体の約3／4の範囲に格子目タタキを施し、内面には縦方向に板でナデを加える。内面には炭化物の付着が認められる。本遺跡では他にも韓式系土器や陶質土器が少なからずみられる点は、近隣の八尾市久宝寺遺跡などの同時期の様相と類似している。（飯田）

337

337　須恵器（甕・韓式系）　古墳中期
植松遺跡　(RD17.0・H27.9)　文献789

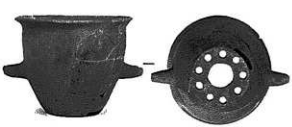
流路堆積砂層から出土。焼け歪みで口縁が湾曲し、体部下半にくぼみが認められる。外面は縦方向の平行タタキを施した後、体部下半には横方向に5条沈線を螺旋状にめぐらす。前出の讃良郡条里遺跡や四條畷市鄙屋北遺跡でも、334等のように、外面にこの類の調整をもつ例が確認されている。内面は回転ナデで仕上げ、タタキの当て具痕などは認められない。（飯田）

338

339

340

341



338　韓式系土器（長胴甕）　古墳中期
讃良郡条里遺跡　(RD17.2・H30.7)　文献.831

335と同一の流路から出土。

一部を欠くがほぼ完形に復原可能である。口縁部は外反し、端部は面をもつ。口縁部下から底部付近にいたるまで、外面には平行タタキを施し、螺旋状沈線をめぐらす。外面に煤が顕著に付着する一方で、内面には煤やコゲなどは認められないことなどから、湯沸しに用いられたようである。　(飯田)

339　韓式系土器（甕）　古墳中期～後期
讃良郡条里遺跡　(RD18.0・h24.6)　文献.831

335・338と同一の流路から出土。

口縁部は外反し、端部に面をもつ。外面には底部付近をのぞき格子目タタキを施しており、内面にはナデ調整が認められる。内面の底部付近にはスリケシを丁寧に施している。外面には煤が層状をなして付着し、内面にはコゲが認められることなどから、炊飯等に複数回用いられたようである。　(飯田)

340　韓式系土器（鍋）　古墳中期
讃良郡条里遺跡　(rd27.2・h23.9)　文献.825

333・334と同一の落込みの最下層から出土。

全体の1／4程度が残存。胴部には牛角状の把手をもつ。外面には縄席文(じょうせきもん)のタタキを施す。本例を含む土器群には、他に韓式系土器の平底鉢や東海系の甕などもみられる。また土器群付近で見つかった植物遺体からは、自然科学分析により、イネのほかコムギが大量に確認されている。　(飯田)

341　韓式系土器（甑）　古墳中期
小阪合遺跡　(rd28.2・H23.7)　文献.641

土器溜りから出土。全体の半分弱程度が遺存。胴部外面には縄席文のタタキがみられ、内面には指オサエが認められる。把手は牛角状を呈し、上面には切り込みを施している。底部の蒸気孔は、中央に円孔を一つ穿ち、その周囲に9箇所の小円孔をめぐらせるものである。土器溜りではこの甑(こしき)以外に、格子目タタキのみられる韓式系土器の破片も出土している。　(飯田)

342

342　韓式系土器（平底鉢）　古墳中期
讃良郡条里遺跡　（RD12.4・H12.0）　文献.860

幅 1.2 mの溝から出土。口縁の一部を欠く。外面に格子目のタタキを施す。口縁から頸部にかけてはさらにヨコナデを強く施し、頸部に段を生じさせる。内面はヨコナデで調整している。底面にはナデを施し、わずかに「ゲタ」の痕跡も認められる。出土した溝は、近隣の四條畷市蔀屋北遺跡の例などから、渡来系集団の集落域を区画するものだったと考えられる。（飯田）

343

343　韓式系土器（平底鉢）　古墳中期
讃良郡条里遺跡　（rd15.9・h14.4）　文献.831

335・338・339 と同一の流路から出土。

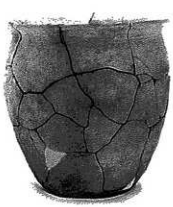
口縁部は外反し、底部は径が小さく、全体は逆砲弾形を呈する。外面はハケメを施し、内面はナデが認められる。韓式系土器であるが、同土器に特徴的なタタキ調整がみられない。なお、流路については、四條畷市蔀屋北遺跡で検出されている集落西端を区画する大溝につながる可能性が指摘されている。　（飯田）

344

344　韓式系土器（平底鉢）　古墳中期
高宮遺跡　（左：H9.0, 右：h6.6）　文献.856

ともに竪穴建物の埋土上層から出土。左は口縁部から底部まで残存。胴部から底部にかけて丸みをおびる。外面に縄蹯文タタキ、内面にナデを施す。右は胴下部から底部まで遺存。胴部は直線的に立ち上がり、底部は角張る。外面に格子目タタキを施す。内面は摩滅で調整が不明である。なお、建物内からは他に、韓式系土器の甑や移動式竈も出土している。　（飯田）

345



345　韓式系土器（平底鉢）　古墳中期
上私部遺跡　（RD16.8・H17.1）　文献.754

竪穴建物の竈の隅で出土。ほぼ完形である。外面は上半に格子目タタキを施し、下半はタタキを施した後、ナデで消している。内面および口縁部外面はナデで調整される。調査区では同時期の竪穴建物が当建物を含め 11 棟検出され、本例鉢のほか韓式系土器を模倣した土師器も出土している。この建物群と渡来系集団との密接なかかわりが推測される。　（飯田）

346

347

348

349

346　韓式系土器（壺・瓦質）　古墳中期
三宅西遺跡　（MD25.8・h20.6）　文献.832

5世紀中葉の遺物を含む溝から出土。肩の張る壺で、肩直下に凹線と波状文がめぐる。本例は極めて特異で、器形はＴＫ216型式頃の須恵器にやや近似するが後世の瓦質（ぎしつ）土器によく似た胎土をもつ。朝鮮半島では陶質土器以外に瓦質の土器が存在し、兵庫県神戸市で飲期の瓦質土器窯が発見された点などから、本品も韓式系土器の一種に位置付けるべきとされている。（秋山）

347　韓式系土器（高杯・黒色研磨）　古墳中期
小阪合遺跡　（rd14.6・h5.4）　文献.641

自然河川から出土。高杯杯部で、受部状口縁のため有蓋とされる。杯部外面は不定方向ヘラミガキが施され、内外断面とも黒色を呈する。本遺跡の従前調査で全形判明の類品が出土している。その脚部は回転力利用で成形され、裾外面に須恵器によくある突帯が1条めぐる。脚柱部調整は縦ヘラミガキ、透かし孔は推定3方向である。この特徴から韓式系とされる。（秋山）

348　角杯形須恵器　古墳中期～後期
私部南遺跡　（h7.0・t0.6）　文献.865

中近世土器を含む溝から混入品として出土。角杯（かくはい）形土器は、ウシ科の角の角質鞘部を利用する容器を模した焼物で、国内では古墳後期の須恵器製品がある。本例は破片だが稀少品となる。外面は細かいヘラケズリの可能性があり、内面は工具痕やナデがみられる。須恵器角杯の生産地には6世紀前半の福井県興道寺（こうどうじ）窯跡があり、本例は問窯品に調整等が類似する。（秋山）

349　土師器模倣須恵器（高杯）　古墳中期～後期
高宮遺跡　（RD13.5・H10.1）　文献.856

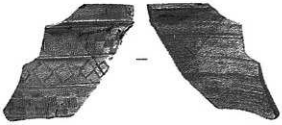
5世紀前半の竪穴建物から土師器、韓式系土器、鉄鏃（てつぞく）（385右）とともに出土。ほぼ完形の高杯で、杯部は浅い半球状を呈し、脚部に突帯や段をもたない。本形状は土師器の特徴を示し、それを須恵器として焼成したものである。この種の須恵器が北河内地域で比較的多く出土する。枚方市茄子作に推定される窯も候補に含め、今後、当地での産地が判明しよう。（秋山）

350

350　関東系土師器（杯）　古墳後期
池島・福万寺遺跡　（rd12.8・H3.8）　文献.761

土坑から土師器直口壺・杯、須恵器杯等と共伴して出土。内外面に黒色物質が塗布され、底部外面には木製脚の圧痕が残る。これらの特徴や形態から、関東下野地域の6世紀後半の土器に比定される。同地該期の土師器杯は色調等で4分類でき、そのうち、漆を塗った黒色の製品に本例は相当するらしい。ただ下野の杯底部の木製痕は丁寧にケズリ消されるという。（秋山）

351



351　新羅土器（長頸壺）　古墳後期
上私部遺跡　（rd19.6・h11.6）　文献.790

溝から土師器・須恵器の各器種と共伴して出土。口頸部の破片で、頸は外反して上方にのび、口縁は上に屈曲する。頸部外面は横方向の削り出し突帯で区分され、そこに、短い櫛描文と櫛歯列点文で市松状模様や連続鋸歯文を表現している。極めて緻密な胎土、硬質焼成で、色調は外面灰色・破面灰赤色を呈する。以上の特徴から新羅土器の舶載品と判断される。（秋山）

352

352　製塩土器　弥生後期末～古墳初頭
湊遺跡　（左:h11.7, 右:h7.5）　文献.594

開析谷内の包含層から出土。脚台ⅠA式（広瀬和雄編年による:以下同じ）に分類されるものに相当する。体脚部の分離整作技法による成形。外面に横方向のタタキ調整がなされ、弥生土器の調整技法と共通性をみせる。大阪湾岸での脚台Ⅰ式の出現率は低い。遺跡内での製塩炉は未確認だが、本例は大阪湾岸の土器製塩の初相段階を示すものとして重要である。（関本）

353

353　製塩土器　古墳初頭
湊遺跡　（右端:RD10.6・H26.7）　文献.795

流路周部から出土。外面には全面にタタキ調整がみられ、摩滅痕跡が少ない。いずれも脚台Ⅱ式に分類されるもので、メガホン状を呈し器壁が薄い。体脚部の連続製作技法により成形される。口縁端部などの遺存状況が良好であり、二次焼成による被熱・剥離痕がみられないことから未使用と考えられ、脚台Ⅱ式の全容を知る好例である。（関本）

354

354　製塩土器（甕形）　古墳前期
植松遺跡　(rd12.0・H22.2)　文献.858

古墳前期遺構面の土器溜り4から、小型丸底壺、甕、高杯杯部、有段鉢などと共伴して出土。被熱により表面が灰色ないし白色化しており、器壁が他の甕に比べて薄い。認知が遅れていた甕形の製塩土器である。底部は弥生第Ⅴ様式の名残を示すが、球状の胴部に、手捏ね成形による口縁がほぼ直立して取り付く。煮沸（煎熬）用に用いられたと考えられる。　(岡本)

355

355　製塩土器（甕形）　古墳前期～中期
讃良郡条里遺跡　(RD11.5・H23.4)　文献.831

古墳中期の流路から出土。

354より器高が高くなり底面が安定する。手捏ね成形による口縁が直立して取り付き、粘土紐痕跡が残るなど、全体的に粗製である。長胴のプロポーションを呈するが、製塩作業に伴う被熱のため白色および橙色に変色する部分がみられる。354より後出する型式とみられる。　(岡本)

356

356　製塩土器（甕形）　古墳中期
讃良郡条里遺跡　(rd8.6・H16.2)　文献.830

溝60の肩部から出土。

体部外面にはハケメが施され、下半はさらに指ナデと指頭圧痕が残る。口縁部内面はハケメ、頸部より下は胴部上半まで内面にケズリがみられる。口径から甕形Ⅱ式に分類される。354・355に比べて口縁部が拡がり、より煮沸（煎熬）用に適した形状に変容している。　(岡本)

357

357　製塩土器　古墳中期
讃良郡条里遺跡　(rd4.4～5.2・md4.8～5.8)　文献.825

微高地から低地への斜面落ちぎわの土器溜りから集中して出土。

外面全面にタタキが施された多くの細片が、炭化物混じりの層中に含まれて検出された。内面は指ナデ。復原できたものは丸底Ⅰ式に分類されるもので、口縁部の復原径は5cm程度である。全て細片だったことから、使用後に廃棄されたものと考えられる。　(岡本)

358

358　製塩土器　古墳中期～後期
玉飾遺跡　（上右：rd3.0・h8.0）　文献.827

古墳時代遺構面で検出された土坑 923 の下層から、土師器、須恵器、木片などとともに出土。

内面に貝殻条痕がみられる例を含む。口がすぼまり胴部に最大径をもつ裁頭卵形をなし、いずれも丸底Ⅰ式に分類される。脚台式が消えて丸底式が普遍化する5世紀末葉を前後する時期のもので、なかでも本遺跡の資料は小形で定型化した段階のものである。（関本）

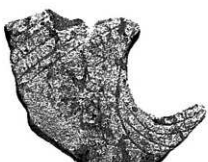
359

359　蛸壺　弥生後期末～古墳初頭
下池田遺跡　（右端：rd5.2・h10.0）　文献.835

地形に沿って調査区を西流する流路 128 から出土。

左奥3点は真蛸壺であり、いずれも胎土は粗く器表面は摩滅が著しい。内面はナデあるいはハケメによる調整が施され、全体的に作りは丁寧ではない。その他は、飯蛸壺に分類されるものである。いずれも穿孔があり、真蛸壺に比べて器壁は薄く小形である。弥生後期末～庄内式期に属するものである。（関本）

360



360　特殊器台形埴輪　古墳前期
小阪合遺跡　（ℓ7.7・T1.2）　文献.704

古墳時代の包含層から出土。巴形（または円形）と三角形の透かし孔およびヘラ描きの沈線文を有する文様帯部片である。摩滅が著しいが、わずかに縦方向のハケメ調整および赤彩がみられる。通常、葬送儀礼に用いられる特殊器台形埴輪の分布は吉備や大和とその周辺に限られるため、本遺跡での発見はそれら地域との儀礼的関連性を考えるうえで示唆的である。（関本）

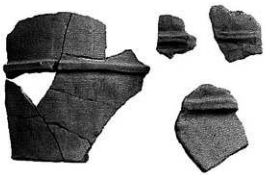
361

361　円筒埴輪　古墳前期
大和川今池遺跡　（左：h53.6, 右：h41.4）　文献.837

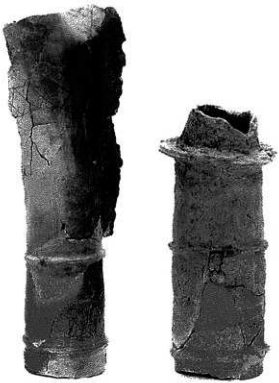
左は、古墳1の墳丘削平面で検出された土壙から出土。棺として転用された円筒埴輪である。半円形透かし孔が相対する2方に一対、上から3・5段目に穿たれる。外面に黒斑がある。右は、同古墳周溝下層から出土。下から2段目の相対する2方に方形透かし孔を有し、外面には黒斑が残る。ともに、透かし孔が円形に定型化する以前の所産とみられる。（関本）

362

363



364



362　円筒埴輪　古墳中期
太秦古墳群　(左:H38.0, 右:h22.9)　文献.715

17号墳の周溝から出土。左は器高が判明する唯一の円筒埴輪で、3条突帯と2・3段目に円形透かし孔をもつ。突帯は水平でなく波打ち、透かし孔もやや楕円を呈する。右は左とほぼ同形同大品で、底部から3段分が残る。ともに黒斑はなく、調整は板状工具による連続的なヨコハケメが施され、突帯は断面M字状をなす。川西宏幸編年Ⅳ期に属するとみられる。(岡本)

363　円筒埴輪・家形埴輪　古墳中期
讃良郡条里遺跡 (左:h24.0, 右下:h11.8) 文献.710・825

古墳時代の包含層から出土。右下は、器厚および直線的な突帯から形象埴輪（家形）かと推定される。他は円筒埴輪である。左は、幅の狭い板状工具を器壁上で何度も止める断続的なヨコハケメを施している。右上2点は、外面はタテハケメ調整であり、一部に円形透かし孔を残す。いずれも、周辺に古墳の存在を想起させるものである。　(岡本)

364　石見型盾形埴輪・剣形埴輪　古墳後期ほか
讃良郡条里遺跡　(左:h75.0, 右:h42.6)　文献.763

2点とも古墳時代と目される流路から出土。

左は、いわゆる「石見型盾形埴輪」に分類されるものである。この類の埴輪は、三重県宝塚1号墳出土の船形埴輪に立てられているものが最古例とされている。縁辺部をのぞくほぼ全面に縦方向のハケメがみられる。上半中央には、横方向の2条の平行線刻間に、X状線刻がおそらく6単位以上にわたって間断なく刻まれる斜格子文帯が看取できる。直弧文などはみられない。縁辺部の残りは悪いが、上部には半円形のくぼみが確認できる。下半には2条の突帯がめぐり、上段突帯より8cmほど上部に径2cmほどの楕円状穿孔がみられる。

右は、径の小さい細身の器財埴輪で、上部に鍔状突帯が1条めぐる。細身であることから剣（大刀）形埴輪と考えられるが、腰拳部が残存せず、柄の表現も明瞭ではないことから、詳細は不明である。

(岡本)

365

365　家形埴輪　古墳前期

大和川今池遺跡　(h28.0・w39.4)　文献.837

古墳１の周溝から出土。切妻屋根をもつ平屋の家形埴輪。裾棄ともに２面だが、裾行が長い直方体を呈する。短辺側に入口とみられる穿孔がみられるが、壁や柱には網代、盾などの装飾は一切ない。裾廻りには四周に鍔状突帯がめぐる。突帯下の四周には中央部に１箇所ずつ方形の切り欠きがある。366 とともに定型化する家形埴輪以前の様相を示すと考えられる。(関本)

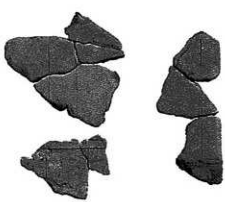
366

366　家形埴輪　古墳前期

大和川今池遺跡　(H54.4・w78.4)　文献.837

古墳１の周溝から出土。切妻屋根をもつ平屋の家形埴輪。下端部には突帯が四周に取り付く。長辺２箇所と短辺１箇所に、半円形の切り欠きが基部にある。屋根に棟飾りや堅魚木などの装飾はない。長辺の１箇所に長方形透かし孔のある破片も見つかっている。構造は 365 と同様であるが、屋根の押縁や柱を粘土板で表すなど、全体として具象的で作風が異なる。　(関本)

367



367　家形埴輪　古墳前期

大和川今池遺跡　(左:t0.6, 右:t1.0)　文献.837

古墳１の周溝から出土。

家形埴輪壁面の破片である。網代などの表現はみられない。左は、梁や柱が沈線で表現されている。器壁厚は１cmに満たず、小形の家形埴輪とみられる。右では、365・366 にみられた下端部突帯が取り付けられておらず、沈線により表現される。あるいは突帯の剥離痕跡の可能性もあろうか。　(関本)

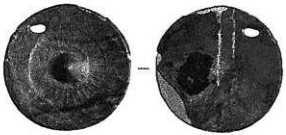
368

368　家形埴輪　古墳前期

大和川今池遺跡(左:w約20,右上:w約30,右下:h約10)文献.837

古墳１の周溝から出土。いずれも屋根の部材片である。左は屋根の破風板および棟木の一部。破風板の角度や拡がりの具合から入母屋造りとみられる。右上は切妻屋根で梁が１箇所接合している。右下は寄棟造の屋根の一隅とみられる。内面には壁面との接合のための補強として、三角形状の粘土板を貼り付ける。押縁は 366 同様粘土板の貼り付けで表現する。　(関本)

369



369　小形仿製鏡　古墳前期

池島・福万寺遺跡　(D3.6・T0.5)　文献.841

古墳時代遺構面の直上層から出土。

磨耗によって文様の不鮮明な部分があるが、円圏に櫛歯文が施される。また鈕孔を欠くが、縁部に不定形の孔があり、懸垂して使用された可能性がある。本資料は文様帯を有するものとしては最小の部類に入る。小形仿製鏡は集落遺跡での出土例が多く、集落内祭祀のあり方を考えるうえで興味深い。　(笹栗)

370

370　耳環　古墳後期

池島・福万寺遺跡　(D2.7～3.3)　文献.586・761・861

上2点はともに奈良時代の層、下左は中世前期の耕作層、下右は5世紀後半～6世紀中頃の遺構面で検出されたピットから出土。全て中実の銅芯金張で、部分的に金張が残存する。右2点は外面の剥落が著しい。耳環は古墳後期の一般的な副葬品で、6世紀中葉頃に上左のように大形化し、7世紀前半には小形化する傾向がある。　(笹栗)

371

371　耳環　古墳後期

讃良郡条里遺跡　(左:D2.3, 右:D2.3)　文献.710・763

左は弥生後期～奈良時代の層、右は江戸時代の層から出土。ともに中実の銅芯金張で、左は表面の金がわずかに残る。右は外面の剥落が著しく遺存状態が良好ではない。耳環は基本的には古墳に伴う副葬品である。特に左例検出の北東近接地で364石見型盾形埴輪・剣形埴輪の出土が認められることなどから、消滅した後期古墳の存在を示唆する資料である。　(笹栗)

372

372　銅鏃　古墳初頭か

下池田遺跡　(W1.2・L4.3)　文献.835

弥生後期後葉～庄内式期前半頃の溝から、大量の土器や絵画土器とともに出土。鏃身は柳葉形で、断面は鈍い菱形である。切先に微細な突起が残存することから遠鋳式鋳造と判るが、茎部分は丸く整形されており、全くの未製品とは断定できない。ただし、過去の調査からも銅鏃の未製品が出土しており、本遺跡での青銅製品の製作を裏付ける重要な資料である。　(笹栗)

373

373　銅鏃　　古墳初頭か

久宝寺遺跡　　（左：ℓ4.0，右：L3.8）　文献.665・759

左は庄内式期の竪穴建物の堆積土から、右は江戸時代の耕作土層から出土。

両例とも鏃身が三角形の短茎鏃で、鏃身に鎬があり断面は菱形である。ともに形態的特徴などから弥生後期～庄内式期のものと考えられる。類似する形態の銅鏃は、河内平野に所在する遺跡からの出土が数例確認できる。　（笹栗）

374

374　銅鏃　　古墳初頭か

久宝寺遺跡　　（w1.1・ℓ2.7）　文献.759

庄内式期の墳墓近辺から出土。ただし、下層の弥生後期後半の遺物の可能性もある。

鏃身が三角形の無茎鏃である。形態的特徴などから弥生後期～庄内式期のものと考えられる。材質が相違するが、同遺跡から検出された375鉄鏃とほぼ同じサイズを示し興味深い。

（笹栗）

375

375　鉄鏃　　古墳初頭か

久宝寺遺跡　　（w1.1・ℓ2.6）　文献.665

古墳前期の面もしくは下層の古墳時代初頭の土壌層から出土。

鏃身が三角形の無茎鏃である。弥生後期～庄内式期のものと考えられる。古墳前期には多量の鉄器が古墳の副葬品として出土するが、近畿地方中央部ではこの時期まで鉄器の確認例が多くない。本例は稀少な鉄器普及を具体的に示す貴重な資料である。　（笹栗）

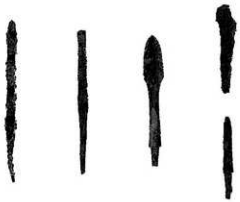
376

376　鉄鏃　　古墳後期～飛鳥

上私部遺跡　　（w1.5・ℓ6.4）　文献.754

6世紀後半～7世紀初頭の竈を伴う竪穴建物から出土。鏃身は柳葉形を呈しているが、基部は欠損しており、全体の形状は不明である。部分的に錆膨れしているが、断面は扁平な形態である。出土状況から使用のあり方や遺物の性格は判断できないが、本遺跡は当該期の在地首長層の居住域であったと想定されており、当資料の性格を考えるうえで興味深い。　（笹栗）

377



378

379

380

377　鉄鏃　　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　（左：W0.7・L9.4）　文献.831

5世紀中頃～6世紀前半を中心とした時期の流路から出土。全て長頸鏃と考えられる。左端からの3点はそれぞれ、鏃身が柳葉形、方頭形、柳葉形である。中央右は茎部が欠損するものの、遺存状態が良好で錆化がほとんど認められない。右端上は鏃身部の一部が残存し、同下は頸部から茎部のみ残存する。古墳中期後半以降、鉄鏃は長頸鏃が主要な形式となる。（笹栗）

378　鉄鏃　　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　（左：ℓ17.9, 右：ℓ13.1）　文献.825

5世紀中頃～7世紀初頭の落込みから出土。左は鏃身が三角形をなす長頸鏃で、頸部に別造り片鏑挟をもつ。台形関である。右は鏃身が三角形の長頸鏃で、線関である。茎に糸巻きが明瞭に残る。それぞれ頸・茎部が大きく曲げられている（左写真では主軸方向）。落込みからは須恵器や韓式系土器、滑石製品や玉類、剣形土製品など多様な遺物が出土している。（笹栗）

379　鉄剣　　弥生後期～古墳前期か

大尾遺跡　（w3.2・ℓ46.8）　文献.599

地山直上から出土。剣身には鎬があり断面は菱形である。両関で、茎には目釘孔があり、柄には木質が残る。また鞘口金具を伴う。出土地点から北4.5 mの位置で、棺床に粘土を敷く船形木棺墓が1基検出されており、これに伴う可能性がある。遺跡内では弥生中期後半の周溝墓が多数検出されたが、棺構造の違いから船形木棺墓は古墳時代まで降る可能性が高い。（笹栗）

380　鉄剣　　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　（W3.4・L26.7）　文献.831

377鉄鏃と同じ流路から出土。

短剣あるいは槍と考えられる。剣身の両面に鎬があり断面は菱形で、茎には目釘孔がある。柄の形態は不明であるが、口巻糸が残存する。刃部中央付近で約20度曲げられている。同じ流路内からは、意図的に曲げられたと考えられる鉄器が複数出土しており、祭祀的な行為によるものと想定される。（笹栗）

381

382

383

384

381　鉄鉾　　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　　(W1.6・ℓ8.7)　文献.831

377 鉄鏃ほかと同じ流路から出土。

小形の鉄鉾と考えられる。刃部をほぼ直角に曲げられており、380 と同様、流路への投棄行為に何らかの祭祀的な側面が窺われる。流路内からは馬骨や木製馬具などが多数出土しており、渡来人による馬匹(ばひつ)生産が行われていたことは確実で、この祭祀行為に渡来人が深くかかわっていたことが推測される。　(笹栗)

382　鉄鎌　　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　　(w3.1・ℓ16.0)　文献.831

377 鉄鏃ほかと同じ流路の直上層から出土。

基部が上方に折り曲げられている曲刃鎌である。遺存状態は良好でない。曲刃鎌は５世紀前葉に出現し、それまで使用されていた直刃鎌にとってかわり普及していく。鋤・鍬における方形板刃先からU字形刃先への変化とあわせて、古墳中期には朝鮮半島からの影響によって農具における技術革新が認められる。(笹栗)

383　鹿角装刀子　　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　　(上:w0.9・L8.5)　文献.831

377 鉄鏃ほかと同じ流路から出土。検出時には鹿角の柄（写真下）が装着されていた。刃部の遺存状態は茎部に比べ良好でない。茎部には格子状の糸巻きが認められる。また刃部が意図的に曲げられている。この流路は近接する集落の規模に比べ、遺物の出土量も多く種類も多岐にわたる。居住域からの単純な投棄行為というより、やはり祭祀的な側面が推測される。(笹栗)

384　鉄製釣針　　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　　(W2.4・L7.6)　文献.831

377 鉄鏃ほかと同じ流路から出土。

針先にかえりが認められる。軸部の断面形態は隅丸方形から方形を呈する。腰曲げ部から先曲げ部にかけてわずかなねじりが認められる。残存状態が比較的良好である。本遺跡は河内湖北岸に位置する水辺の遺跡であり、この地の集団が生産活動の一つとして漁撈に従事していたことを示す資料と考えられる。　(笹栗)

385

385　鉄鋌　古墳中期

私部南遺跡(左)・高宮遺跡(右)(左:L15.8, 右:L15.5)文献.856・857・886

左は5世紀末の落込み、右は5世紀前半の竪穴建物から出土。後者は、韓式系土器や初期須恵器と共伴したが、外面の片面のみに横方向の糸巻きの痕跡が明瞭に確認でき、鉄鋌が複数枚束ねられていたことを示す。鉄鋌は墳墓からの出土例が目立つものの、本資料のように集落からの出土例も増えており、渡来人とのかかわりが推測されている。　(笹栗)

386

386　金属製輪　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　(W2.5・L2.2)　文献.825

378鉄鏃と同じ古墳時代の落込みから出土。

材質は銅ないしは銅を含む合金の可能性がある。用途は不明であるが、装身具であった可能性が推測される。出土した落込みからは多種多様な遺物が出土しており、集落域の消長とも密接にかかわる内容を示す。装身具が集落から出土することは珍しいが、集団が保持したものが投棄されたと考えられる。　(笹栗)

387

387　轡羽口　古墳後期

私部南遺跡 (左:md6.0, 中:md6.0, 右:ℓ9.7) 文献.865

6世紀中葉の溝から出土。3点とも轡羽口(くつわはねぐち)の先端部で、外面にガラス質滓の付着がみられる。溝からはあわせて鍛造剥片や粒状滓(ぶつ)、鉄滓が検出されており、この溝の近辺に鍛冶工房があったことが確実である。周辺には交野市森遺跡をはじめとして鍛冶関連遺跡が集中しており、天野川流域一帯で鉄器生産が盛んに行われていたことを示す資料として重要である。　(笹栗)

388

388　轡羽口・鉄滓　古墳後期

上私部遺跡　(手前:w5.9・t1.9)　文献.790

奥中央は轡羽口で、古墳時代の掘立柱建物の柱穴から出土。その他は椀形滓で、古墳時代の土坑や包含層から出土。鍛冶関連遺物の検出量はそれほど多くないため、集落内での小規模な鍛冶作業が想定できる。その一方で交野市森遺跡では専業的な鍛冶作業を行っており、本遺跡は、森遺跡などで鍛冶作業に強くかかわった集団の居住域だった可能性が推測される。　(笹栗)

389

389　土製鋳型　古墳初頭

池島・福万寺遺跡　(左:w10.2・ℓ15.9)　文献.718

遺構面検出時および溝や土坑から出土。

土製鋳型の外枠であるが、いずれも破片であるため本来の形状は不明である。内面はやや内湾する平坦面をもち、斜格子もしくは正格子状の線刻を施す。外面には把手が造り出されたものもある。また、側面は面取りを施す。本遺跡において何らかの鋳造作業が行われていたことを示す遺物である。　(後藤)

390

390　須恵質鳥形土製品　古墳中期

讃良郡条里遺跡　(w6.6・ℓ13.2)　文献.830

ほぼ南北方向にのびる溝から、初期須恵器などとともに出土。鳥形の注口土器で、体部側面には線刻で羽が表現される。尾（写真左端）は幅広で水平に貼り付けられる。頭部から頸部を欠くため明言できないが、水鳥をモチーフにした可能性が高い。体部後方には上方に大きく開く口があり、胸部に注口を穿つ。埴輪以外でこのように表現された土製品は大変珍しい。(後藤)

391

391　土馬（飾馬）　古墳中期か

讃良郡条里遺跡　(w8.3・ℓ18.4)　文献.831

微高地間を蛇行する流路の最上層から、体部を横たえた状態で出土。体部は中空で、頭部、四肢、尾、馬具の一部を欠くが、手綱、鞍、力革、鐙の基部、尻懸などが表現される。腹と尻に円孔がある。また、脚の破断面には成形時の補強のためと考えられる穴が残る。周辺から滑石製臼玉779点など祭祀行為を示す遺物が出土したことは興味深い。　(後藤)

392

392　剣形土製品　古墳中期

讃良郡条里遺跡　(w6.8・ℓ21.9)　文献.825

古墳時代～古代の集落が展開する微高地の間に存在する落込みの最下層から出土。丁寧な作りで剣身および把縁と把縁突起が表現される。さらに把縁や把頭には勾金を装着するためと考えられる穴やV字状の切れ込みも認められる。鹿角装刀剣を模したもので、埴輪以外の土製品としては大変珍しく、祭祀や儀礼に使用するための遺物と考えられる。　(後藤)

393

394

395

396

393　U字形板状土製品　古墳中期
横良郡条里遺跡　(左:ℓ23.0, 右:ℓ30.0)　文献.825

392側形土製品が検出された落込みの最下層と落込みぎわの土坑から十数片出土。表面両端には突帯がめぐり、裏面には木目と思われる筋が残るものもある。生駒山西麓産の胎土である。この土製品は造り付け竈の焚口を保護する付属具で、百済漢城期の風納土城(プンナプトソン)での出土が知られる。本遺跡周辺の四條畷市郡屋北遺跡や寝屋川市長保寺(ちょうほじ)遺跡などでも出土がある。(後藤)

394　土製支脚　古墳初頭～前期
池島・福万寺遺跡(左)・山賀遺跡(右)(左:W11.8, 右:h8.4)文献.761・788

左は、庄内式期の土坑から出土。片面は欠損する。扁平な三角形を呈するが、途中で前屈しながら立ち上がり、背部にくぼみをもつ。右は、包含層から出土。下方に拡がる裾部と突起部を欠くが、上部は二又の形状を呈する。これらの土製支脚は山陰地方の遺跡から出土する例が多く、搬入を含め当地域との交流を窺わせる。(後藤)

395　ミニチュア竈　古墳後期～飛鳥
植松遺跡　(RD12.8・H14.0)　文献.789

旧大和川の支流の一つと考えられる自然河川から、古墳後期～飛鳥時代の遺物とともに出土。

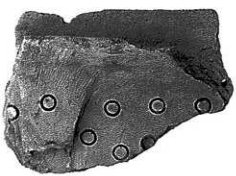
焚口上部は曲げ庇で、焚口の正面形は台形を呈する。体部側面には先端下向きの把手が付く。内面上半部に広く煤が付着しており、実際に火を焚いたと考えられる。出土状況などから、河川の氾濫にまつわる祭祀行為の存在が示唆される。(後藤)

396　須恵質紡錘車　古墳中期
郡戸遺跡　(D4.0・T1.8)　文献.595

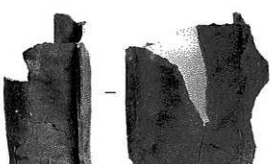
7基ある小規模な方墳(一辺2.7～8.5m)群のなかで、一辺約8mを測る方墳の周溝西辺部から、無蓋高杯や提瓶(ひさげ)、把手付椀などの初期須恵器とともに出土。断面形は少し丸みをおびた台形を呈し、全面に研磨調整を施すが、焼きはややあまい。中央部に径0.7cmの孔を穿つ。小規模古墳のもつ性格や被葬者を考えるうえで重要な資料といえる。(後藤)

397

398



399



400

397　土師質紡錘車　古墳中期

讃良郡条里遺跡　（左：D4.7，右：D4.2）　文献.825

392 剣形土製品や 393 U字形板状土製品が検出された落込みの最下層から、石製紡錘車や断面長方形の土製紡錘車とともに出土。本例は２点とも断面形は扁平な算盤玉状を呈する。この形状をもつ土製紡錘車は朝鮮半島南部地域に出自が求められることから、U字形板状土製品などとともに、本遺跡が朝鮮半島と密接なつながりをもっていた証左となる。　（後藤）

398　陶棺　古墳後期

大坂城跡　（h15.2・w21.8）　文献.567

古代以降の層準から出土。

須恵質で灰白色を呈する。報告書段階では蓋部としたが、身部と考えられる。外面は幅広突帯と竹管文を施す。内面には同心円文のタタキ当て具痕が残る。上部は蓋部を受けるため受け口状を呈する。周辺の調査でも埴輪片の検出があることから、難波宮の時期に古墳が破壊されたものと考えられる。　（後藤）

399　土製槨構築材　古墳中期～後期

私部南遺跡　（h37.2・w33.2）　文献.865

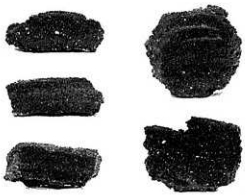
中世以降の暗渠に転用された状態で出土。上から見た断面形は半月形や扁平楕円形を呈し、両脇に鰭状突帯が１～２条取り付く須恵質土製品で、表面には朱彩が残る。同巧品を横に並べ相互の突帯を組み合わせて、棺を取り囲む槨を構築したと推定される。付近にあった古墳が破壊されたのだろう。類品は、生駒山地を挟んだ東側の京都府堀切７号横穴にある。　（後藤）

400　土師質タタキ当て具　古墳中期

私部南遺跡　（md8.2・h3.0）　文献.857

落込み状土坑から、須恵器、土師器、製塩土器、砥石、鉄滓などとともに出土。欠損するが、扁平な半円球部の裏面に円柱状把手が付く。使用時に土器と接する部分は平滑に仕上げる。遺跡周辺には交野市大谷窯・大谷北窯、枚方市茄子作窯（推定）などの須恵器窯が存在したことから、未発見の窯の存在を含め、本遺跡と須恵器製作との密接な関連を示唆する。　（後藤）

401



402

403

404

401　須恵器窯壁材　古墳中期
上の山遺跡　(w約26～30・ℓ約26～30)　文献.758

開析谷内にある平安時代の水田面上および古代以降の包含層から出土。全体が溶岩状に発泡する。素地は粗く径5～10㎜ほどの砂粒が多く含まれる。また、スサと思われる植物繊維が練り込まれた痕跡も確認できた。断面には何層かの被熱面が認められ、補修されたことが窺える。変形・溶着した須恵器片も出土しており、近接地での須恵器窯の存在を裏付ける。(後藤)

402　須恵器焼成台　古墳中期
茄子作遺跡　(右:H12.0・W15.1)　文献.799

5～7世紀の流路から、溶着や火膨れを起こした須恵器片とともに出土。大小の甕に須恵器甕の体部片が溶着した状態である。本遺跡では甕片が多く出土したことから、甕などの大形品を焼成する際、安定させるために甕を使用したと考えられる。401須恵器窯壁材とあわせて、本遺跡の近隣に須恵器窯が存在したことを裏付ける決定的な資料といえる。　(後藤)

403　グリーンタフ製管玉　古墳初頭
久宝寺遺跡　(左端:D0.5・L1.0)　文献.759

庄内式段階の墳墓から出土。左端は土器棺内、他は埋葬施設の構造不明な29号墓の中心埋葬施設の床面および上層における検出である。

いずれも、硬質のグリーンタフ製で、両面穿孔によって製作された管玉である。資料の少ない当該期の近畿中央部における玉の墳墓副葬を考えるうえで貴重な資料である。　(廣瀬)

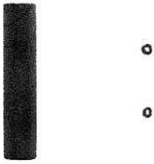
404　蛇紋岩製管玉　古墳中期～後期
讃良郡条里遺跡 (左端:L2.4, 右端:L2.7) 文献.763・831

左端は古墳時代(第4・2面)と考えられるピット、他は古墳時代の流路1から出土。

蛇紋岩製の管玉である。一般的によくみられるサイズで比較的良質な両面穿孔の、通有では滑石製とされる管玉である。古墳中期～後期前半に多くみられる類の管玉と考えられる。

(廣瀬)

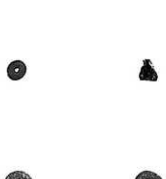
405



406

407

408



405　グリーンタフ製管玉・ガラス製小玉　古墳前期
東倉治遺跡　（左：D1.0・L5.0）　文献.749

1調査区12落込みから出土。軟質グリーンタフ製の管玉とソーダガラス製の小玉である。ガラス小玉が小形のために管玉の穿孔内に入り込んで検出されたことから、一連を構成した可能性もある。ただし、その場合は相互の径を考えると、他に遺存しなかった有機質材製等の玉の存在を想定することも必要だろう。共伴土器から、古墳前期の所産と考えられる。（廣瀬）

406　碧玉製管玉・滑石製臼玉　古墳前期
勝部遺跡　（左端：D0.4・L0.8）　文献.625

炭化物や植物遺体を多く含み古式土師器や木製品が検出された土坑8から出土。

両面穿孔の碧玉製管玉と、小形で薄く比較的丁寧な作りの滑石製臼玉である。出土した土器から古墳前期の所産と考えられる。土坑からの共伴遺物や滑石製臼玉の検出を考えると、何らかの祭祀にかかわる遺構または祭祀に関係した遺物を廃棄した土坑か。（廣瀬）

407　蛇紋岩製管玉・滑石製勾玉　古墳中期
新上小阪遺跡　（左：L1.6, 右：ℓ4.5）　文献.791・859

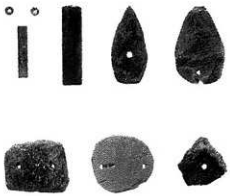
左・中は、古墳中期と考えられる土師器小形壺の内部から出土。緑色の蛇紋岩製の管玉。右は、撹乱から出土。古墳中期と考えられる淡い緑白色の丁寧な作りの滑石製勾玉。しかし本遺跡では布留式新段階から6世紀にかけては遺構・遺物が少ない時期である。玉が壺内から出土したことなどを考えると、周辺において祭祀的な行為が行われた可能性も考えられる。（廣瀬）

408　滑石製臼玉・ガラス製小玉・同片　古墳後期～飛鳥
上私部遺跡　（左上：D0.3・H0.2）　文献.838

3調査区南端の296・297竪穴建物の竈付近から出土。竈周辺の黒色粘土や炭化物の集積中より検出されたものである。

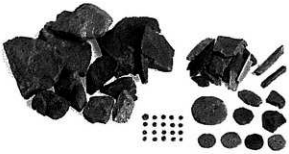
ガラス製小玉は水色を呈するソーダガラスと考えられる。共伴した土器から古墳後期～飛鳥時代の所産と考えられる。古墳後期以降にみられる竈の祭祀にかかわる資料である。（廣瀬）

409

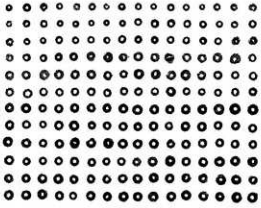


410

411



412



409　玉類・滑石製品　　古墳中期～後期
上私部遺跡　　(左下:W2.9, 右上:W2.4)　文献.754

古墳中期後半～後期前半の集落跡から出土。

上段左から２列目例は両面穿孔の碧玉製管玉、その他は滑石製品で、ほとんどが扁平で粗雑な造りの製品である。上段左上は臼玉、その下は管玉、上段右半は剣形、下段は双孔円板と有孔石製品である。この種の滑石製品は、当該期の集落遺跡において確認される組み合わせとして通有のものである。　(廣瀬)

410　滑石製品集合　　古墳中期～後期
私部南遺跡　　(上中:W3.7・T2.0)　文献.857

左の臼玉は古墳後期の溝中検出の土師器壺内、上中の紡錘車は土坑、下中の子持勾玉はピット、他の滑石製品の素材２点は溝と８-竪穴建物１内の８-708土坑から出土。

右上例は、生産対象物は明らかではないが、分割のための施溝が複数みられる。古墳中期後半～後期前半頃の滑石製品の生産関連遺物であろう。　(廣瀬)

411　滑石製品・同未製品　　古墳中期ほか
讃良郡条里遺跡　　(右下:D2.2・T0.4)　文献.830

古墳時代～飛鳥時代のピット、井戸などから出土。

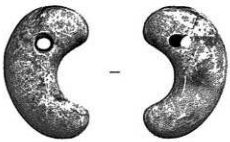
滑石製の双孔円板・臼玉などとともに、未穿孔の穴を施した滑石製品の素材が多数みられる。穴は石材質の確認のためであろうか。他の出土遺物とあわせて考えると、５世紀後半以降の集落形成時期には、集落内で小規模で自家消費的な滑石製品の生産が行われていたようである。　(廣瀬)

412　滑石製臼玉　　古墳中期～後期
讃良郡条里遺跡　　(左上:D0.4・H0.3)　文献.831

古墳時代の流路埋土の土壌洗浄により検出。

同じく滑石製でありながら材質的にも多様で、粗雑な作りのものがほとんどである。石材は色調的にも多岐にわたり、形態も側面に稜をもつものから、胴張りのもの、円柱状を呈するものなど各種みられる。穿孔の行われている両端面も平行ではなく、径も５㎜を中心に約４～６㎜サイズのものが混在している。(廣瀬)

413



413　翡翠製勾玉　古墳前期

池島・福万寺遺跡　(L2.1・T0.8)　文献.872

弥生後期～古墳時代の層から出土。古墳前期の集落相当域から発見されている。

あまり透明感のない翡翠製の小形の定型勾玉である。両面穿孔であるが、当初貫通に失敗したためか片側のみ2回の穿孔の痕跡がみられる。墳墓ではなく集落からの検出と考えられるが、一般的な集落域からの確認遺物としては特殊である。　(廣瀬)

414

414　滑石製勾玉　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　(左:L4.8, 右:L3.9)　文献.634・825

左は溝27、他は落込み内の古墳時代の堆積層から出土。

いずれも滑石製と考えられるものである。左・右は、断面円形の体部をもつもので通常の勾玉である。中は、形態的にも側面に稜を残す扁平な製品で、いわゆる滑石製模造品の勾玉としても粗雑な作りのものである。

(廣瀬)

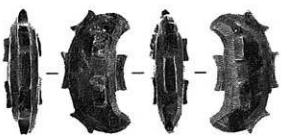
415

415　滑石製子持勾玉　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　(w3.4・ℓ7.1)　文献.825

プライマリーな検出でなく古代～中世の包含層から出土。子持勾玉は、大形勾玉の表面に簡略小形化した勾玉＝「子」を作り出した形で、主に滑石質軟質石材を素材とし古墳中期～飛鳥時代に製作された。本例は一部欠損するが、大形勾玉の背に3個、腹に1個、両側面に各2個の子をもつ。形態省略が大きく進行する前段階にあたり、古墳中期～後期初頭だろう。(秋山)

416



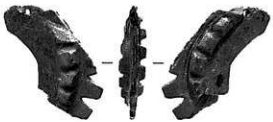
416　滑石製子持勾玉　古墳中期～後期

私部南遺跡　(W3.6・L6.4)　文献.865

谷部の包含層4層から出土。

完存品で、415と同じく、大形勾玉の背に3個、腹に1個、両側面に各2個の子をもつ。子の勾玉の形状は、外側に弧状のくぼみをみせるが、板状突起のようになっている。大形勾玉そのものも、やや扁平化している。これらの点から、415より型式学的な変化が窺え、時期が若干新しくなる可能性があろうか。(秋山)

417

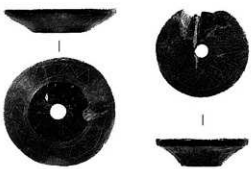


417　滑石製子持勾玉　古墳後期

私部南遺跡　(w4.6・ℓ8.3)　文献.865

掘立柱建物の柱穴から出土。両端と背面の一部を欠損する。扁平化が進行した大形勾玉の背に3個以上、両側面に各4個ないし5個以上の子をもつ。腹の子は現状では確認できないが、子の形状は本来の勾玉形から大きく退化し板状突起等となる。同建物の他柱穴から6世紀前半の須恵器（MT 15型式）が出土し、時期比定の根拠が少ないなかにあり有意例となる。（秋山）

418



418　滑石製紡錘車　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　(左:D5.3, 右:D4.2)　文献.831

古墳時代の流路1から出土。

ともに滑石製で、断面が円錐形の頂部を除去した形状を呈する。左は、斜めの側面に粗雑な圏線と鋸歯文を施している。右は、上面に粗雑で退化した星形文と考えられる線刻、側面に鋸歯文を施している。いずれも線刻は明瞭ではなく、かなり退化した感じを受ける。（廣瀬）

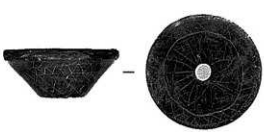
419

419　滑石製紡錘車　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　(D3.0～4.8)　文献.763・825・860

上左はピット、上中・上右は落込み、下は竪穴建物から出土。いずれも古墳後期頃から古代にみられる滑石製品の紡錘車である。上左・上右は、最も通有な、上面・下面径が相違する円錐形の頂部をのぞいたような薄いタイプで、上中・下は、上面・下面径が近似する断面が台形のタイプである。上中には、円形とそれに直交する放射状の線刻が施されている。（廣瀬）

420



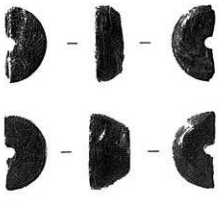
420　滑石製紡錘車　古墳中期～後期

小阪合遺跡　(D4.0・T1.7)　文献.704

古墳時代～古代の包含層から出土。

円錐形の頂部を除去したような形状のものである。側面と上面に線刻を施している。側面の線刻は、螺旋状に沈線を引き、その間に鋸歯文を施し、さらにその内側には交錯する直線文が加えられている。上面には、二重の圏線とその間を鋸歯文、その内側に粗雑な線刻が施されている。（廣瀬）

421



421　滑石製紡錘車　　古墳中期～後期
上私部遺跡　　(上:d3.7, 下:d4.3)　文献.754

上は包含層、下は建物から出土。

ともに上面・下面径が近似した断面台形を呈する紡錘車で、側面と上面に鋸歯文が施されている。上例の上面には、中央に1条の圏線を引き、その外側に鋸歯文を加える。下例上面の鋸歯文は、2本の圏線を引きその間に施されたもので、比較的丁寧な線刻である。

(廣瀬)

422

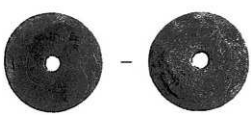
422　滑石製紡錘車　　古墳後期
私部南遺跡　　(D3.4・T1.6)　文献.865

4層から出土。

一部を欠損しているが、上面・下面径が相違する円錐形の頂部をのぞいたような形状の紡錘車である。上面（写真左）および側面に丁寧な鋸歯文を施している。近畿地方における、古墳中期後半～後期の最も定型的なタイプの紡錘車である。

(廣瀬)

423



423　滑石製紡錘車　　古墳後期～飛鳥
郡戸遺跡　　(D4.1・T1.3)　文献.595

ピット1508から出土。

上面の大きい断面台形の形状をもつ滑石製の紡錘車である。上面に円形と放射状の線刻を刻んでいる。先述の419（上中）例に類似した線刻である。鋸歯文を表現したものとの考えもある。鋸歯文を施す紡錘車は、6世紀後半～7世紀前半頃に多くみられるとされる。

(廣瀬)

424

424　玉砥石か　　古墳中期か
讃良郡条里遺跡　　(w10.0・ℓ11.0)　文献.830

7a層から出土。

被熱しているが、表面に円形や溝状のくぼみがみられ砥石と考えられる。溝状のくぼみのある砥石は、玉生産において研磨に使用された可能性が指摘されていることから、その関連遺物とされることが多い。本遺跡内では滑石製品の生産も確認されており、それらの生産に関連する遺物の可能性がある。　(廣瀬)

425

425　砥石　古墳中期

牘良郡条里遺跡　(w11.3・ℓ20.2)　文献.860

古墳中期の竪穴建物から出土。

研ぎ減りにより上面の半分が傾斜している。砥石は形態から、直方体に整形された定型砥石と、それ以外の不定型砥石に分類できる。この砥石は不整長方形を呈するが、側面が平坦に整形されており、定型砥石と不定型砥石の中間にあたるといえる。

(倉賀野)

426

426　砥石　古墳後期か

私部南遺跡　(左:L23.9, 右:L7.1)　文献.865

左は、7世紀後半以降の落込みから出土。もとは直方体を呈する小形定型砥石である。右は、5世紀後半以降の竪穴建物から出土。平面が台形状を呈する小形定型砥石である。どちらも中央がくぼんでおり、四面とも磨り減るまで使用されている。弥生時代から古墳時代にかけては石器から鉄器へと材質転換が起きた時期であり、砥石の研究は重要な意味をもつ。(倉賀野)

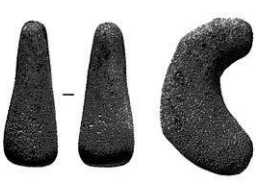
427

427　石杵　古墳初頭

久宝寺遺跡　(W5.5・L8.2)　文献.759

49号墳の西側周溝から出土。砂質ホルンフェルス製。円礫状を呈し、鏡面状に磨かれた下面全体に水銀朱の付着が認められる。表面には敲打痕が残っており、原材料の岩石を砕く際に付いたものであろう。同じ周溝から水銀朱の付着した430(右)石臼と水銀朱の塊が出土していることから、水銀朱の精製のために石臼とセットで使用されたと考えられる。　(倉賀野)

428



428　石杵　古墳中期ほか

三宅西遺跡　(左:L8.9, 右:L9.9)　文献.832

左は、古墳時代の土坑から出土。下部が拡がる截頭円錐形状を呈する。下端は摩滅により平滑化している。平滑面に水銀朱が付着しており、辰砂の粉砕に使用されたと考えられる。右は、弥生〜古墳時代の遺構面の溝から出土。砂岩製である。全体はゆるやかなL字状に湾曲する。同様の形態の石杵が茨木市溝咋(みぞくい)遺跡から出土している。　(倉賀野)

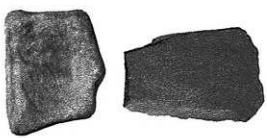
429

429　石臼　古墳前期

大和川今池遺跡　(d31.4・t7.3)　文献.837・848

方墳の周溝から出土。砂岩製。平面円形を呈し、約1/3が残存する。下面は周辺を浅く削り出す。上面の周縁には平坦面を設け、深さ約1㎝の皿状にくぼませている。欠損しているが、一方に片口を備える。古墳に伴った可能性が高い。片口のある石臼は完形のものが八尾市久宝寺遺跡、藤井寺市野中古墳などから出土している。　(倉賀野)

430



430　石臼　古墳初頭

久宝寺遺跡　(左:ℓ40.6,右:ℓ38.9)　文献.665・759

左は古墳時代初頭の集落の井戸から出土。不整長方形の板石状を呈し、角は丸く、片面に使用痕らしいくぼみがある。右は49号墳周溝から出土。安山岩製。不整長方形の板石状を呈する。上面平坦部のほぼ全体に平滑化した使用痕がある。同周溝から427石杵と水銀朱塊も出土した。臼・杵とも赤色顔料の付着があり、水銀朱精製に使用されたと考えられる。　(倉賀野)

431

431　線刻石製品　古墳初頭

久宝寺遺跡　(w7.3・ℓ7.1)　文献.665

古墳時代初頭の大溝から出土。

火山岩製の線刻された石製品である。火山岩(軽石)の亜角礫の一端を削って面を作り出し、その面に女陰を表現する。その線刻は非常に繊細である。同じ大溝からは本品のほかに大量の土器や木製品が出土している。これらは大溝の西側に展開する集落遺構と同時期のものであり、相互の強い関連が窺える。　(倉賀野)

432

432　玉砂利　古墳初頭

久宝寺遺跡　(主体:L3～5)　文献.759

古墳時代初頭の流路提裾の落込みから出土。

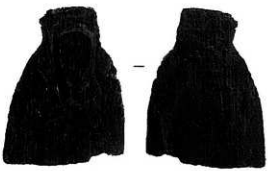
石英製の玉砂利である。同じ箇所からまとまって出土しており、人為的に集積されたものと考えられる。周辺に多数の墳墓が検出されており、それらとの関連が考えられるが、明確に関係を示すものは見つかっていない。なお、古墳から玉砂利が発見された例は、奈良県櫛山古墳があげられる。　(倉賀野)

433

433　直柄平鍬　古墳初頭
茄子作遺跡　(W19.2・ℓ31.5)　文献.799

谷内を通る流路底面から出土。身部が略台形を呈する直柄鍬で、柄の挿入孔は鍬身上位に設けられている。柄孔隆起はなく、扁平である。鍬身に対し、柄孔は斜めに穿たれている。側縁部は摩滅、下端は折損する実用品。泥除けの装着装置が認められないことから、打ち込み具として使用された可能性が高い。古墳時代初頭の汎用品である。用材はアカガシ亜属。　(黒須)

434



434　直柄平鍬未製品　古墳初頭
讃良郡条里遺跡　(w23.5・ℓ30.5)　文献.801

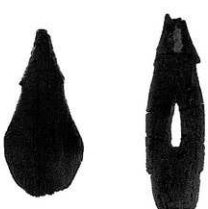
集落と墓域の間に設けられた溝から出土。直柄鍬身の未製品で、頭部を幅広に作る鍬のうち、最も遅くまで残るタイプである。柄孔および泥除け装着溝は、まだ彫り込まれていない。前面（手元側）と刃先の一部に焦痕が残る。用材はアカガシ亜属。経済具破損品(用材ヒノキ)、椅子天板の未製品（用材エノキ属）と推定できる材等とともに検出された。　(黒須)

435

435　横鍬　古墳中期
讃良郡条里遺跡　(w45.0・ℓ9.5)　文献.830

溝から出土。幅広の材を用いた横鍬の鍬身で、上位中央にやや傾斜をもつ柄孔を設ける。柄孔は方形で、これをめぐる柄孔隆起も方形に作る。刃先は欠損、上位に泥除け装着孔がないことから、田の表面を均すエブリのように使用する道具と考えられる。表面加工は丁寧で、横方向に手斧(ちょうな)によるハツリ痕が認められる。用材はアカガシ亜属。　(黒須)

436



436　曲柄平鍬（ナスビ形）　古墳中期～後期
讃良郡条里遺跡（左:ℓ21.3, 右:ℓ39.1）文献.721・831

自然流路から出土。左は、水滴形の平面形状をもち、上半部に小さく紐を掛ける突起を作る。鉄刃装着の可否は不明である。右は、軸部先端を欠損するが身部の残存は良好、平面形状は左例に比べて細身である。先端部にU字形鉄刃を装着させるための切り欠きがある。また身部中央に縦長の三角形のスリットが設けられている。用材はともにアカガシ亜属。　(黒須)

437

437　雁柄斧柄　　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　(w6.9・ℓ83.2)　文献.721・831

自然流路から出土。方形孔を穿った斧台に柄を差込み、側面から木釘で固定した雁柄(ひさいえ)である。柄は断面方形を基本とし、握り手に近い部分を断面円形に加工する。装着角度は75度前後を測る。斧台は断面円形で先端部は縦長の長円形に作る。このため袋状鉄斧を装着すると、刃は縦斧となる。用材は柄・斧台・木釘いずれもアカガシ亜属。　(黒須)

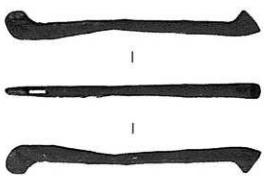
438

438　曲柄斧柄　　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　(上:ℓ54.2, 下:ℓ53.8)　文献.825

集落横の落込みから出土。ともに一木作りの曲柄で、斧台先端に袋状鉄斧を装着することによって縦刃とする。上は、使用時に鉄斧が接触することにより生じたと推測される圧痕が斧台の両端にある。双頭の斧台として機能したものか。下は、上例に比べて湾曲した柄であるため、斧台との角度がより鋭角となる。柄の湾曲部に割損が認められる。　(黒須)

439



439　鎌柄　　古墳か

私部南遺跡　(w4.5・ℓ40.1)　文献.865

集落に近い谷から出土。鉄製鎌刃を差し込んで使用する鎌柄である。刃は柄頭部の反り面（写真上では下側）側に差し込まれる。頭部の断面形状は方形で、平面形状は丸く加工されている。握り手の断面形状は丸く、下端には平面三角形を呈するグリップエンドが設けられている。刃孔は、柄主軸に対しわずかに鈍角をなす角度で穿たれている。用材はヒノキ。　(黒須)

440

440　背負子　　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡（上:ℓ36.1, 下:L27.8）文献.721・831

ともに自然流路から出土。有爪型背負子の縦木である。上はサカキ、下はヒノキの幹と枝を利用して作られている。上は、爪部と軸部の上端を欠損する。断面形状はかまぼこ形で、軸部下端を有頭状に作る。下は、軸部と爪部の先端を有頭状に作る。有頭部の根元に紐ズレ痕を残す実用品である。軸部上半部の切り欠きは、組み合わせて使用するためのものか。　(黒須)

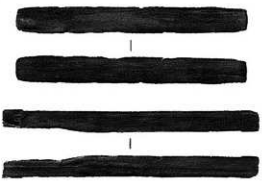
441

441　把頭・把間　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　(W5.6・ℓ9.3)　文献721・831

流路から出土。鉄製刀身をおさめるための把頭と把間(つかあい)の一部である。把間の背面はほぼ直線、腹面は湾曲して幅を増し把頭へと続く。把間背面には刀身を装着するための溝が切られ、把間中央に刀身を固定する釘孔が設けられている。把間表面には糸巻きの痕跡があり、把頭と把間の一部に赤色顔料（赤漆か）が付着する。精製品である。用材はクルミ科。　(黒須)

442



442　刀鞘　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　(上:ℓ47.2, 下:ℓ49.1)　文献825

集落横の落込みから出土。上は佩表(はきおもて)で、完存状態の断面形状は菱形となる。鞘間(さやあい)と鞘尻を区別する明確な加工はないが、鞘口と鞘間の間には横方向の切り込みがある。下は別個体の佩裏で、鞘間をわずかに削り込み、鞘口と鞘尻を立体的に表現する。鞘間には縦痕が残る。完存状態の断面形状は楕円形となる。刀身をおさめる抉りは浅く鞘尻に達していない。　(黒須)

443

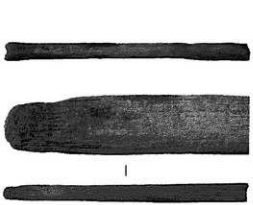
443　弓　古墳中期～後期

讃良郡条里遺跡　(上:ℓ63.5, 下:ℓ6.8)　文献825・831

上は集落横の落込み、下は自然流路から出土。

ともに丸木弓である。上は、ほぼ半分を折損する。握部を含む遺存部では、弓なりに湾曲させ、外湾側に棒樋を切り込む。先端部には突起を作る。下は、先端部のみの残存で、やや扁平な本体部分から細く突起を削り出す。両例ともに弦を張った痕跡は確認できていない。下の用材はアジサイ属。　(黒須)

444



444　弓　古墳後期

上私部遺跡　(上:ℓ18.4, 下:ℓ17.5)　文献838

集落内に設けられた区画溝から出土。

ともに弓の先端部と考えられる断面円形の棒状品。上は先端部に浅く幅広の溝を切る。下は先端部に突起を作った後に浅く溝を切る。その周辺には、繊維で緊縛したような痕跡が横方向に細かく残る。表面には縦方向の丁寧な加工痕が認められる。用材はともにヤマフジであるが、同一個体か否かは不明。　(黒須)